
蒼穹の竜騎士《ドラグナイト》

紗夢猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼穹の竜騎士
ドラクナイト

【Nコード】

N6072Y

【作者名】

紗夢猫

【あらすじ】

農村生まれの平凡な少年は、ある日を境に大きな時代の流れへと巻き込まれていく。出会い、別れを繰り返し、その先に待つものは平穏か、それとも……。

今は少なくなってきた王道ファンタジーを目指しています。チート、転成、召喚系ではありません。最終的に主人公は強くなっていますが、普通に傷を負い、苦しみながら成長していきます。

初投稿作品です。誤字、脱字等お見苦しい部分を多く含むかもし

れませんが、なまあつたかい目で見守ってくれると嬉しいですよ。

*12/5*300000PV、ユニークアクセ30000お気に入り登録950件突破しました！これからもよろしくお願ひします！

プロローグ（前書き）

この作品はあくまで架空であり、作品中にある都市、人名等は一切現実とは関係無いのでそのコトを忘れずに。

プロローグ

――静寂。

風で揺れる木の葉の音と、時折聞こえる虫の声以外は何も聞こえない。

そんな中、自分の鼓動だけがやけに大きく聞こえてくるさく感じる。

普段なら気づきもしないその音も、かすかな音しか聞こえないこの森の中では、十分すぎる程大きな音に聞こえてくる。

そう、気づかれてしまっんじゃないかと、心配になる程に。

この場所で息を潜める事およそ2刻。

じつと身を潜め続けるのもそろそろ限界かもしれない。

”ここにはこないか？――移動するべき……か”

そう考え始めた瞬間、奥の茂みからガサリ……と音が響く。

「ヴフツ…フツフツ…」

そこには、1リルム（1m80cm）程もあるつかという巨大な体躯を持った生き物がいた。

それはボアと呼ばれる、四本の脚で歩き、顔には3リム（約54cm）程もある角を持った生き物だった。

この森の中では一際大きな体躯を持つそれは、この森で幅を利かせる森の主と言ってもいい存在だ。

ボアは周囲を伺いながらゆっくりと目の前を横切り、この先にある水場へと歩いていく。

俺は悟られないように呼吸を抑え、ゆっくりと手にした弓に矢をつがえた。

キリキリ……

つがえた矢を限界まで引き絞っていく。

このサイズでは、きつちりと急所となる首の付け根へと撃ち込まねば1撃では落とせない。

ゆっくりと慎重に狙いを定め、その時を待つ。

ボアが目の前を通り過ぎたその瞬間――。

――ヴュンッ！

唸りと共に風を切りながら飛んだ矢は、狙い通りに首筋に突き刺さった！

しかし、撃ち出す瞬間の殺気を捉えたのか、傷ついた体を

引きずり駆け出すボア。

辛うじて外れず、後脚の付け根に刺さった矢の痛みに鳴き声をあげながら、それでも倒れずにこちらを睨みつけ一直線に駆けてくる。

”チツ…それなら…ッ”

勢いよく隠れていた茂みから飛び出た俺は、腰からダガーを抜き放った。

目の前に迫るボアの命を刈り取るべく俺は、右手のダガーを駆け抜けてきたボアの巨体を避ける同時、その首筋へと叩き込んだ。

プロローグ（後書き）

コツコツと更新して行こうと思います。
感想等お待ちします。

12/5 改稿

平穏な日々

「くそ……重い……っ」

先程狩った獲物を引きずり、やっとの事で村の入り口まで辿り着いた俺は、ボアの体を離すと同時に、その場でへたり込んだ。

いくら血を抜いたとは言え、この大きさ。

その上全身筋肉の鎧で覆われた体を持ったボアは、まだまだそれでもそこらの大人より重い体を持つ。

なんとか森の奥から引っ張ってきたとはいえ、流石にここらに限界だ。

額から滝の様に流れ出る汗をぬぐいつつ、俺は大きく息を吐いた。

体力を回復しようとはぼーっと空を眺めていると、辺りから村の住人が顔を出し始めた。

「おうカイト、今日はまたえらくデカイ獲物を獲ってきたなあ！」

そう言いながら、よくやったとでもいいかげんに肩をポンポンと叩かれる。

「たまたま運がよかったただけだよ。後で捌くから取りにきて」

「いつも悪いなあ。この村で狩りができるのは、もうお前しかないな

いから」

「気にしないで。ベルクさんにはいつもお世話になってるし」

「悪いなあ。俺も、こんな体じゃなければ…」

そういつて自分の左半身を見るベルク。

そこには、本来あるはずの左腕が無い。

彼は、隻腕だった。

身体中にいくつもの古傷を抱えた彼は、元冒険者だったらしい。

自分が幼い頃に村の側で行き倒れていた所を村人が介抱し、なんとか一命をとりとめたという事だった。

だが、失った片腕はどうする事もできず、この村に留まって助けてくれた恩を返しているらしい。

だが、既に村では彼を余所者とは見ておらず、村の一員として既に暮らしている。

実際彼は、早くに父親を亡くした俺と妹の親代わりのような存在だ。

母親すら数年まえに亡くした今は、ある意味父そのものと言ってもいいかもしれない。

その後も村人達と話をしていると、村の奥から一人の少女が両手にいっぱいの道具を抱えながら走ってきた。

「遅いわよ兄さん！まったくどこまで行ってたのよ！帰りが遅いか

ら心配……って……またこんな大きな獲物をとってきて……」

「ただいま、リリース。道具持ってきてくれたんだな、ありがとう。」

「ああ……うん。はい、コレ」

呆れながら解体道具を渡してくる妹。

小言が多い妹は、黙っていればそれなりの容姿をもっているのに、未だに仲のいい男の一人もいない。

今年13になる妹は、早くに両親を無くして、俺と二人で生活しているからだろうか……そこらの男共より手が早く、口煩い。

男勝りな性格と口が災いしているんだろうか……。

まったく兄さんは後先考えないで……

などと小言を言われながら、無言で獲物を解体する俺。

何故かニヤニヤとこちらを見てくるベルク達を睨みながら、この子の旦那になる人間は大変だろうな……とため息をついた。

きっと、その男とは色々と分かり合えるはずだ。

そんな事を考えつつ、手だけは器用に解体を進めて行く。皮はなめして街に持って行くとして……肉はこの位で分けて行けばみんなの家に行き渡るかな？

「聞いているの兄さん!？」

「はい、はい、聞いているよリリース。」

おっと危ない。もう少しで拳が飛んでくる所だった。

あれは痛いんだ……

以前街から来た男がちよつかいを出そうとして殴られ、顎の骨を砕かれたのはそう昔の話じゃない。

「だから、もう無茶はしないでよね！？んじゃ、私は先に家に帰ってご飯の支度してるからね？」

そう言っただけで来た道に戻っていくリリース。

思わず溜息をついていると、

「っと、兄さん！……15歳の誕生日、おめでとー！」

振り返り告げられた言葉に「ありがとう」と微笑み返すと、妹は照れたように走っていった。

「相変わらずだな。愛されてるじゃないか」

「うるせえよトリス。ほら、お前の分」

ニヤニヤしながら話しかけて来た男にひょいっと肉を投げる。

あぶねえ！と、飛んで来た肉を慌てて受け取る。

「あぶねえなあ、貴重な肉を……」

「お前が余計な事言ってるからだ。さっさと持って帰って、妹に食わしてやれ。うちのみたいに頑丈じゃ無いんだから」

彼の家にはには二ーナと同じ年の病弱な妹がいる。

俺の家と同じ様に早くに両親を無くした彼の家には、もう他に養える人間がない。

彼は一人、妹の為に幼い頃から畑仕事を続けていた。

へへっ、いつもありがとなっ！と、自分と同じ年の友が家へと帰っていく後ろ姿を見ながら、あいつが妹もらってくれたらなあ……などと考えてしまう。

面倒見の良くて誠実なトリスなら、きっと妹を幸せにしてくれる。

まあ、今すぐになんて話でもないからと、そんなくだらしない妄想を振り払い、解体を続けた。

平穩な日々（後書き）

ポアはイノシシのおっきいVrを考えてもどうとわかりやすいと思います

12/5 改稿

暴虐の果てに

その日俺は、溜まっていた皮や牙等を近場の街に売りに出ていた。牙や皮だけじゃなく、村で採れた野菜や果物なんかも一緒だ。週に1度、こうやって街に出て、売ったお金で消耗品を買い揃えて戻る。どうしても、採れたものだけじゃ生活はできないから。

売れ残りや買った消耗品を馬車に載せ村に帰っていると、街道の向こうから、旅人らしき人影が必死に走って向かって来ていた。

「どうしたんだい？そんなに急いで」

「と…盗賊が…」

「盗賊!？」

戦争が起こってから、街や村では男が駆り出される。

そうして駆り出された男手の無い場所に、軍からの脱走兵や敗残兵が盗賊となって押し寄せる。今迄は戦場も遠く離れていたから比較的 안전한場所だったのだが…

「お前も、早く逃げた方がいい。これだけ荷物を抱えていたら、きつと見逃しては「ダメだ!この先に、俺の村があるんだ!」…そこは…もうダメだろう…俺が盗賊を見かけたのは、1刻も前の話だ…きつと…」

唇を噛み締め、それでも諦めないと馬にムチをくれる。

「おじさんは街の人達にその事を伝えてくれ!俺はいく!」

脳裏にいろんな顔が浮かんでは消えていく。

リス…母さん…ベルク…トリス…

俺がいった所で何ができるかはわからない。それでも、見捨てる事はできなかった。

半刻ほど走らせると、ようやく村が見えてきた。しかし、村の至る所から煙が上がっている。

涙がこぼれそうになるのを必死で抑え馬車を走らせていると、村か

ら何人かの人影が走り出てきた。

あの人影は…

「リーリース!!!」

「…ッ!…お兄ちゃん!」

馬車を止め、話を聞こうとする…が、

「あつちにいるぞお!!!」

「く…ッ!皆はこの馬車で街にいけ!おれが食い止める!」

「無茶だ!一人でなんて…」トリス!妹達を死なせる気か!?!…
でも…」

馬車から飛び降り弓に矢をつがえる俺に、なお渋るトリス。

「大丈夫だ、少しの間脚を止めたらおれもすぐに逃げる。森の中にはいれば俺なら逃げられる!早く行け!」

そう言うと馬に問答無用でムチをくれ走り出させる。

もう猶予はない。

「カイト!絶対!絶対死ぬんじゃねえぞ!!!」

…わかってる…こんな所で俺は死ねない!死んでやるものか!

馬車を追おうとする盗賊に矢を放ち牽制しながら、

必死に脱出手段を考えるカイトだった。

過酷な現実 - 1

「うう……ぐ……っ……」

ここはどこだ…？

ガタゴトと揺れる振動が身体に響く。

何処かに移動しているのはわかるが、自分がいつ、どうやってこの場所に来たかがわからない。

身体を起こそうとした所で身体の至る所に激痛がはしった。

「うあああああっ！」

「ダメよ！まだ寝てなきゃ！！」

そう言っただけで誰かが俺の身体を抑える。

誰だ！？いや、ここはどこなんだ！？

意識が徐々に覚醒するに連れて激しい痛みと疑問が浮かんでくる。

俺は確か、村を襲う盗賊から妹達を守ろうと…っ！？

そっだ、妹は！？

盗賊はどうなった！！？

再び身体を起こそうとするが、身体を襲う激痛のせいで思うように動かせない。

「ああ……が……ううう……ぐううう……！」

誰か、誰かあの人達を呼んで来て！！

ぼやける意識の片隅でそんな声を聴きながら、カイトの意識は再び闇に閉ざされていった…。

「ふむ…意識を取り戻したか。なかなか頑丈な奴だ。」
道端にボロボロになって倒れているのを見た時は、もう死んでいるかと思っただが…なかなか悪運が強いらしい。

しかし…この小僧がアレをやったというのだろうか…？

あの時の事を思い出して彼…デイルケンは寒気を覚えた。

街道を西に進んでいた彼は、街道沿いに横たわる幾つもの死体を横目に黙々と馬車を進めていた。

「…盗賊か…」

戦場はもつと東。本来であればこんな場所に盗賊が現れる事は滅多にない筈だが、それでも絶対とは言いつれない。

事実、この周囲を取り締まっている騎士の連中に捕まりさえしなければ、戦場に近い場所よりも安全に獲物を捉える事ができるだろう。巻き添えを食う事もない。

だが、これだけの人数がそうそうやられるものなのだろうか？

戦える大人達は皆戦場へと駆り出されている。

残った老人や女子供では盗賊に勝てる筈もない。

だからこそ”自分達のような仕事”もこうやって、堂々と街道を進んでいけるようなものなのだから。

ポツポツと転がっていた死体も途切れ、そのまま街道を進んでいた彼は、その先に一人の少年が行き倒れているのが見えた。

全身をボロボロにして、至る所から血が流れ出している。片手には

弦の切れた弓、反対の手には無骨なダガーが握られていた。

「…盗賊…にしては若い…」

そう言えば、街道沿いの死体には何本か矢が刺さったものがあつたが……

「まさか…こんな子供が……？」

いや、あり得ない。いくら盗賊とはいえ、戦場に出たこともあるだろう大の大人が、こんな少年にそうやすやすとやられるだろうか…

だが、現状ではそれしか考えられない。

隊列を止め、その少年の様子をみよう…万が一にも死んではいるだろうが…近寄ると、かすかにその少年が身じろぎをしたように見えた。

「…おい、こいつに手当をして、馬車に放り込んでおけ」

不思議そうにしている手下に指示を出し、再び馬車に乗って走り出す。

8割…いや、9割がた死んでしまうだろうが、
もしも生き残れたら、いい”商品”になるかもしれない。

そう思考する彼の顔には、この商売をしている人間特有の邪悪な笑みが浮かんでいた。

再び目を覚ましたカイトは、大人達に連れていかれ、彼らの長である人物の前で跪かされていた。手と脚は鎖で繋がれており、自由に身動きする事ができない。

「お前、名前は？」

「…盗賊に名乗る名前はない…」

間髪おかず出した答えに一瞬虚を突かれたのか、目の前の男が目を丸くし、次いで大笑いしはじめた。

「何がおかしい！？殺すなら早く殺せ！奴隷になどなる気はない！」

男はそれを聞いて、今度はとても…本当に意地悪な、嫌らしい笑みを浮かべてこちらを見た。

「残念だがそれはできないな」

「何故だ！？」

「それはな、俺がその、奴隷商人だからさ。」

過酷な現実 - 2

曰く

お前は街道沿いに倒れていた

それを拾い

手当をして

看病をしてやった

あのままならば確実に死んでいただろう

その命を救ってやったのだから、それをどうしようが俺の勝手だ

そのあまりの暴論に異議を唱えようとすると、抑えていた大人から殴られた。

お前はもう奴隷なのだ。

その身体に奴隷の証も刻んであると。

そう言って改めて見せられたのは、己の右手。

その甲には見慣れぬ刺青が刻んであった。

自分が気を失っている間に、自分が人である事を辞めさせられていた。

反論しようとするやと殴られた。

奴隷が勝手に口を開くな…と。

そして聞かされた。

今いるのは、俺の慣れ親しんだ場所ではなく、そこから10ラギオ（200km）も離れた、大陸の中央部にさしかかる場所だと。

これから俺達は、山を越え、100ラギオ（2000km）先にある大陸中央部の国、ウィラスの首都、オフィリスへ向かうのだと。

まさか自分が4日も気を失っていると思ってもいなかったカイトは、その日、もう、今迄の日常には帰れぬのだと、そう理解した。

そして、あての無い、未来の無い、旅が始まった。

傷が治る迄は馬車に乗って。

傷が治ってからは、外で歩かされた。

お前より高く売れる女を馬車に載せるのだと言われて。

たまに村や街に着くと、

奴隷の中の何人かが連れていかれたり、
人数が増えたりもした。

口減らしの為や、身寄りの無い子供が売られて来たんだそうだ。

逆に、買われていった者もいた。

俺の看病をしてくれていた女の子も売られていった。

地方の領主の慰み者になるんだ…と、誰かが言っていた。

そうやって売られていくものは多かった。

男でも、その手の類で売られていく事も何度かあったようだ。

大抵は、力仕事をする為に売られていったようだが…

そうやって、周囲の人間が入れ替わっていくうちに、希望や、そもそもの思考能力すら奪われていったような気がする。

延々と歩かされ、

少し仲良くなつた人間も売られていき、

たまに野宿をする事になった日などは、
奴隷の中から何人かの女の子が連れていかれ、相手をさせられていた時もあった。

見た目がいいモノは手を出さずに高値で売るが、そうで無いモノはどうせ娼館に売られる。それなら俺たちが教え込んでやる…そう下卑た笑い声を聞いた事もあった。

最初の頃は、

妹や、トリス、ベルク等、村の人達の事を考える事もあった。

同じ奴隷の事を庇ったりする事もあった。

しかし、時が経つに連れ、何度も同じ事が起こるに連れ、感情が麻痺していったのだろうか、なにも思う事がなくなっていた。

ただひたすら、自分はどこにつくのだろうと

自分を買う人間はどこにいるのかと

いつ、この歩くだけの日々が終わるのだろうと

そう考えるだけになっていった

何処とも知れぬ地で

その日、何度目かの街に着いた日、
売られる為にと近くの川で身体を洗わされ、
連れていかれたのは、それまでにはあまり見た事がない、大きな屋敷だった。

何人も人間が働き、忙しく行き交うそこは、明らかに裕福な、そう、領主の住むような、そんな雰囲気のある場所だった。

お前からはなにも喋るなと言われ…すでに反抗する気もない…連れていかれた場所には、その屋敷の主であるらしき、風格のある男が待っていた。

「デイルケン、久しぶりだな。お前から訪ねてくる事があるとは」
「今回は、面白い商品があったからな」

若干嫌そうに…奴隷商人が直接来たからだろう…そういった男に、悪びれもなくそう言ったデイルケンはカイトに目を向けた。

「確かに見た目はそう悪くは無いようだが、別段力がありそうでもないし、特徴もなさそうだが？」

そう言った男にデイルケンは笑ながら、

「俺もパツと見は確かにそう感じるがな、これでなかなか、役に立つようだ。こいつを拾ったのはだいぶ東の農村の近くなんだがな、どうやらその農村を襲った盗賊を、結構な人数、弓とダガーで倒し

たらしい」

「…ほう…?」

値踏みするようにカイトを見るが、鼻で笑つと、

「そんな腕があるようには見えんがな…お前、名前は?」

「…カイト…」

「カイト…お前は、何が得意だ?」

と、問いかけて来た。

少し考えたカイトは、

「弓を少し…狩りができます…」

「ふむ…それだけか。で?この小僧をいくらで買えと?」

デイルケンはニヤリと笑うと言った。

「1エルム」

「バカな。たかが子供、それも狩りしかできない子供に1エルムとは…」

「しかし、それだけの価値はあると俺は見た。長年の、勘だ」
「……………」

それを聞いてじつところらを見て来る男。

なおも訝しげに見てくる男に、

「今は確かに弓しか使えないかも知れないだろうが、教え込めば使
い物になるかも知れんぞ?」

「しかし、1エルムはポリすぎだ。50レルム」

「80」

「…いいだろう。80レルクム。ただし、使えなければ二度と貴様の所からは買わんからな」

そう告げた男にディルケンはニヤリと笑うと手を差し出した。

こうしてカイトの未来は、また別の人間の手に握られる事となった。

何処とも知れぬ地で（後書き）

1 エルム ≡ 10万

1 レルム ≡ 1000円

80 レルム ≡ 8万円

他の奴隷の平均が30レルム、力のある奴隷や普通の女が50、見た目のいい女が80、特に良いものが1〜1.5エルム

そう考えると、ディルケンはいぶ足元見えますね、はい。

新しい生活 - 1

「ついて来なさい」

そう言われ連れて来られた場所は、広大な敷地の端にある、大きな森の側に建っていた小屋だった。

意外にも綺麗な見た目の小屋に連れて来られ、何をするのかと戸惑っていたカイトに「入りなさい」と促され、自身もその小屋に入ろうと…扉を開けた、おそらくこの屋敷の使用人らしき人物は、中を見て、眉間に皺を寄せた。

何故動きを止めたか気になったカイトは、そつと脇から中を覗き込む…と…

…き…きたない…

思わず「…うつ…」とつめき声をだす程に、小屋の中は酷く…で済むのだろうか…散らかっていた。

足元には元が何かもわからぬ、辛うじて食べかけの食料か？と見られる“ナニカ”や、新しく何かを作っているのか？よく分からない部品などの欠片や塊、着古された衣服などが積み上がり、文字通り“脚の踏み場も”なかった。

他にも、何故ここにあるのか分からぬ鋏やら木の棒などが立ち並び、「倉庫か？」とも思いたくなる小屋で、いったい何をするのだろうか、チラリと件の使用人の様子を伺うと、眉間に深く…本当に深く皺を寄せ…

「片付けます。手伝いなさい。」

抑えきれぬ怒気を孕んだその声に、カイトは只、頷くしかなかった。

何をどうすればいいのかわからないカイトに、「アレはこっちに」「それはあつちに」等と支持を飛ばし、部屋を片付け続けていた使用人“フィリップ”は、やっと片付いてきた小屋内部を眺め、はあ…と溜息をついた。

ここに住む男は、いつ訪ねてもこんな風に部屋を散らかし、その度に自分が掃除をしていた。俺は掃除夫では無いのに…などと考えつつ、今日からこの屋敷に住む事になる奴隷…カイトといったか…を、横目でチラリと伺った。

主に呼び出され応接間に赴けば、例の“奴隷商人”が持つて来た奴隷を買ったと言われ、ここに連れて来て渡すように命じられた。別段奴隷を買う程困っている事があるわけでもなし、唐突に買う事になった奴隷を、どうせあの薄汚い商人にあれこれ言われ買わされたのだろう、そのどうにも平凡な少年を見て、ほんの少しだけ憐憫の表情を向け…しかしそれが仕事なのだと言い聞かせ、あれこれと支持を出す。

実際、使えない少年では無いようだ。

言った事には素直に返事をし、どうやら文字も少しは読めるらしい…先程本の整理をしていた…まあ、教え込めば使えるのだろう。し

かし、この小屋の主に果たしてそこ迄の期待ができるだろうか…と
考え、フィリップはまた少し頭が痛くなった。

新しい生活 - 2

小屋の掃除も一段落し、思わず溜息が出た所で、帰って来ない小屋の主に業を煮やしたのか、あの使用人が声をかけて来た。

「君、名前は？」

「カイト…といます」

それまで特に会話らしい会話をしていなかった為、虚を突かれたカイトは、少し緊張しながら返事をした。

「ふむ…私の名前はフィリップだ。この屋敷で、使用人として働いている。奴隷の管理も私が受け持っていた。君が来る迄はいなかったがな」

冗談を交え、ニヤリと笑いながらそう言った使用人…フィリップを見て、緊張しているのがわかったのか、気分をほぐそうとしてくれたのか、おかげでカイトはすこし気が楽になった。

「君は運がいい。この屋敷の主、アベル様は、とてもお優しい方だ。他の所と違い、君にも人としての生活はさせてくれるだろう」

優しく微笑みながらそう言われ、ほっと胸をなでおろしたのも束の間「だが…」と続けた彼の目に射竦められ、思わず息を呑む。

「だからと言って、怠けたりなどしたら、当然罰はある。いくら優しくとも、甘やかしはしないだろう。覚えておく様に」

身体に緊張を走らせ、かすれた声で返事をするのと同じ、小屋の扉

が開き、一人の男が入って来た。

「おうフィリップ！相変わらず真面目にやってそうだなあ！で？なんでうちでこんなガキをいじめてやがんだ？」

そう言っ入って来た男は、簡素なレザーアーマーを着込み、腰にショートソード、背中に弓を背負った、どう見ても冒険者か狩人しか見えなかった。

なんでこんな所に？などと思っていると、

「今日、旦那様を買われた奴隷を連れて来たんですよ。ここに連れて来る様にと言われたので。」

「ほー…見た目はひよろつちそうだが、使えるのか？」

「さあ…少なくともバカではなさそうですが…使えるかどうかはあなた次第でしょう」

それではこれで…と、小屋を出ていったフィリップを送り出したあと、冒険者のような人がこちらを振り向いた。

「とりあえず…メシだ！腹が減っちゃなんにもできやしねえ、お前も腹が減ってるだろう？こっちにこい！」

引きずられるように連れていかれたカイトは、少しだけ、明日からの生活が不安になっていた。

新しい生活 - 3

「で、お前は何かができるんだ？」

唐突に切り出され、言葉を失うカイト。食事をしている手も止まっていた。

狩ってきたのだろうか？ラビやホーン等の肉と、ライと呼ばれる植物の種子を煮込んだ物を差し出され、「こんな物しか無いが、好きなだけ食え」と言われたのは四半刻程前。

ここ数ヶ月とは比べられない程良い物を出され、戸惑っていたのも数瞬、鳴った腹の音に顔を赤くし、貪り様に食べていた結果、鍋の中はほぼからになっていた。

カイトの食べ様を面白そうに見やり、自身も負けじとかつくらっていたその男：ガゼットといったか：は、落ち着いた所を見計らい、そう切り出していた。

彼としては別段おかしな問いではなかっただろう。むしろ、当たり前疑問でもある。

と、言っても、彼の所に連れてこられたからには、やる事はそうあるわけでもなく、その中の何をさせるかを考える為に聞いた迄だ。

だが、世間一般ではとてもおかしな事でもあった。

奴隷と言えば、言われた事に絶対服従、アレをしろ…と言われれば、有無を言わずやらされる。当人ができる、できないは関係無いのだ。

この人は、あまり奴隷を扱った事が無いのだろうか？

などと、奴隷歴数ヶ月のカイトがバカな事を考えつつ、「言われた事ならなんでも…」と、答えたのを聞き、ガゼットは少し困った様な顔をした。

「ん〜あ〜…お前は、ここで何をやるか聞いたか？」

黙って首を横にふるカイトを見て、嘆息するガゼット。「あのぼっちゃん…軽い説明くらいしとけよ…」と、一人愚痴ると、改めてカイトを見やった。

「よし、ならここでの仕事の説明から始めるか。俺はここで、森から出て来るモンスターの退治、それと肉類の食料の調達をしている。お前がここに来たのは、その補佐と言った所だろう。まあ、今迄俺一人でどうにでもなっていたから、人出が必要って訳でもないんだがな」

「モンスター…が、出るんですか？」

その言葉に、内心ヒヤリとさせられる。

モンスター…人を襲う怪異

と、言っても、全部が全部、人を襲う訳でも無い。

先程食べていたラビヤホーン、以前村で狩っていたボア等、草を食べて生きる比較的穏やかな物も多い。

人語を解する物もいる位だ。むしろそちらのほうが多い。

だが、問題は、その少数派になる、人を襲う物たちのほうだ。

人を襲う。それが出来る程の力を持ち、存在する物。それらを総じて“モンスター”と、人は呼んでいた。

つまり、この森には“人を襲うモンスターが出る”という事。

その事を理解し、緊張するカイトを見て、何故かニヤリと笑うガゼット

「成る程、確かに頭は働く様だ。だが、心配しなくていい。もう滅多な事じゃこの森からモンスターが出て来る事はない。基本は2日か3日おきに森に入って、獲物を狩ってくる。後は、裏手の畑の世話やら…後は、薪割り位か」

それを聞いて安心した。そうでないならば、四六時中モンスターの襲来に気をつけていなければいけない。休む間もなく警戒し続けるのは、死ねと言われるも同義だ。

いくら、奴隷になったからといって、簡単には死にたくない。

「だから…お前が何ができるか聞いたんだ。あしでまといは連れて行きたくないからな」

ほっとしていたカイトにそう告げるガゼット。若干ニヤニヤとした意地悪な笑みを浮かべている様な…

「弓と、ダガーを少し。でも、いいんですか？刃物持たせたりしちゃうまじいんじゃない？」

ちよつとムツとしたカイトが少し投げやりに答えると、なおも面白そうに笑うガゼット。

「お前位のカギが刃物持った所で、何も怖くはない。素手でも叩きのめせる」

さらにムツとしたカイトに、さらに追い討ちをかけるように

「それに、お前の右手の“ソレ”がある限り、ここから出たとしても、何も変わらんぞ」

…そう、奴隷になった事でつけられた、この右手の“奴隷の証”は、一生涯奴隷である事を刻む物。

本来首筋等に多くつけられるそれは、主人に解放の証である、別な刺青を彫られる迄、奴隷である事を示される。

もしここを自力で出た所で、別な人間にそれを見られ、捕まれば、また容赦なく奴隷である事を強いられる、魔の鎖。

その事を思い出せさせられ、俯くカイトに、少し言いすぎたとちよつと申し訳なさげなおそをしたガゼットだったが、気を取り直したようにまた説明を続けた。

「まあ、そうゆうことだ。ダガーは生憎持ち合わせがないから、代わりにショートソードを使え。俺の予備を貸してやる。弓もな。矢は自分で作れ。それから、これから薪割りはお前の仕事な」

狩りは今日はやって来たから、薪割りと、獲物をいくらか干し肉よ

うにしておいてくれ。

そう言い残し、後は任せたとこる寝をはじめたガゼットに、ほんとは大丈夫なんだろうか、この人は？と、どうにも釈然としない気持ちで、仕事を始める為に表に出るカイトだった。

それから、矢のように月日が過ぎて行った。

ガゼットの行ったとおり、モンスターが出る事はなく、数日置きに入る狩りでも、苦勞する事もなく獲物を獲っていった。

元々狩りをしていた事もあり、ガゼットの力量もあつてか、必要がない程獲ってしまった事もある。そんな時は全て干し肉にするか、街に使用人が売りに行っていたようだが。

畑の方も特に手がかかる事は無く、とつた野菜も自分達が食べるだけの物なので、特に気負いなどもなかった。苦勞したのは薪割り位だろうか。

だがそれも、2年を過ぎた今は、全く区も無く出来るようになり、毎日の様にやっていたせいか、体つきも一回り…いや、2回り程も大きくなっていた。

もう子供と言われる事もないだろう。

時折暇を見ては稽古をつけてくれたガゼットのおかげで、ショートソードの使い方も少しはマシになっていた。

そこの野盗数人位なら、苦もなく圧倒出来る程に。

弓の方もだいぶ腕が上がり、空を飛ぶ鳥も射落とせる様になっていた。

これは、もともと不器用だったのだろうか？ガゼットよりも腕が上がり、彼を苦笑いさせていた。「俺は必要ないんじゃないか？」という冗談とともに、毎度の如くサボろうとする言い訳に使う様になっていたが…。

しかし、新たな日常になっていたそれらは、とある一人の人物によって、粉々に打ち砕かれる事となる。

とある、一人の“お姫様”によって…

新しい生活・3（後書き）

まだまだ書く文章量がわからず、部の長さが短くなっていますが、徐々に量をあげていけたらな…などと思っています。

出会いは唐突に

その日もカイトは、ガゼットと共に森の中に入っていた。

今日はいつもと違い、出来るだけいい“獲物”を獲るべく、かなり深い所まで潜っていた。

と、いうのも、今日からしばらくの間、ガイランド家へ王城の姫君がお出でになるというのだ。

カイトが飼われているガイランド家の当主、アベル・ガイランド。

どうやらこの人は、ただ腕のいい領主……というだけではなく、王城の姫君の世話を任される程に力を持つ存在らしかった。

何故それ程の力を持つ存在が地方領主で収まっているか等、謎も多かったが、ただの奴隷には関係がない話。

自分の仕事は、ただいい肉を狩り、持って行くだけ。

そう割り切り、弓を手に、森の中を疾駆していた。

今回は普段来ない森の奥という事もあって、普段よりも警戒しつつ、飛ぶ様に森の中を奥へ奥へと走り抜ける。

足場が悪い森も、何年もの間狩人として過ごして来たカイトやガゼットには、少し足場の悪い庭程度にしか感じられず、まるで飛ぶ様に木々の間をすり抜け走る。

時折止まっては気配を探し、手で合図を送っては獲物を追い求めるカイト。

その姿を見やり、「もうお前は人間というより動物と言った方が正しいかもしれない」と、苦笑混じりにガゼットが言っていたのは3ヶ

月ほど前だった。

先行していたカイトは、強烈な気配を感じ、慌てて気配を殺す。

この先に何かいる…

ゆっくりと、慎重に歩を進めたカイトの前に現れたのは、人よりも遥かに大きな巨体を持つ一頭の獣。

今迄に見た事もない、その桁外れの存在感と巨体に息を呑む。じつと気配を殺し見つめていたカイトに、いつのまに近づいたのか、隣に屈んでいたガゼットから「あれは…ガイラルベア…か」と、溜息にも似た声が漏れる。

「あれは、ここいらにいる魔物の中じゃ頭一つ飛び抜けた力を持つ。そこいらにいるモンスターよりも夕チが悪い…」

「…避けますか…?」

その言葉に危機感を抱き、安全策を取ろうかとしたカイトに、「いや…」と、いつもの様に意地悪な笑みを浮かべ、

「確かにいつもなら無理に狩る必要も無いが、今回は特別だ。何より、あいつの肉は、美味しい」

そういう事ならと、顔をあげ、狩る為の段取りを考えていく。

あの巨体だ。真っ正面からやりあっても勝ち目は薄い。死角から急に矢を叩き込むか…等と考えていると、何の気配を感じたのか、

ふっ…と獲物が顔をあげた。
バレたか？と肝を冷やしていると、何処かへと歩み去っていくガイルルベア。

ここで逃すのは勿体無いなど、ガゼットと二人、そつと後を追っていく。

気配を殺し二手に別れ、どこ迄いくのかと後を追いつける事半事。

そろそろ森野はずれじゃないかと、記憶を頼りに自身の位置を確認していると、唐突に獲物の先から「ひっ…！」と言つ悲鳴の様な物が聞こえて来た。

声が聞こえて来た方に目を凝らすと、森には不似合いなドレスを着た少女が、同じく不似合いな侍女服を着た少女を庇う様に、腕を広げ、魔物の前に立ちはだかっていた。

これは…まずいだらうっ…ッ！

慌てて飛び出ようとするカイトを目で抑え、ガゼットが手で支持を送ってくる。

こいつの注意を俺に向ける。いくらか傷を負わせるから、とどめはお前が刺せ。

了解の合図を手で送り、腰の剣に手を当てていつでも飛び出せるように腰を落とし呼吸を整える。

失敗は許されず、一刻の猶予もない。

焦りにも似たその感情を抑え、待ったのも束の間、ガゼットがいた反対方向から矢を飛んだ！

射られた矢は真つ直ぐに飛び、狙い違わず獲物の脇へ。

一瞬やったか！？と思ったが、予想以上に皮は厚いらしく、先端が刺さるだけだったようだ。

突然の攻撃に驚き怒ったガイラルベアは、その矛先をガゼットへと向け、思い切り地を蹴った！

その勢いは凄まじく、あっという間に距離を詰めていく獲物にカイトは、驚くと同時にしまった！と慌てて地を蹴る。

しかし、獲物の勢いは凄まじく、あっという間にガゼットへの距離を縮めていく。

間に合わない…ッ！

必死に走るカイトを横目にみるみる近づく獲物を前に、ガゼットがチラリとこちらを見て、意味深な笑みを浮かべた。

それと同時に、ブツブツと何事かつぶやいていたと思ったら、突然片手をあげ、まるでガイラルベアを止めるかの様に手のひらを向け、吠えた！

『フレイム！』

すると、掲げた手のひらから唐突に炎の塊が現れ、向かって来たガイルルベアの鼻面に直撃した！

いきなり現れた火球を顔面にぶつけられ、狂ったようにもかくガイルルベア。

隙ができた！今しかない！！

瞬時に判断したカイトは、腰の剣を抜き、獲物の腕の下を抜け胴の下へと抜けるやいなや、頭上にある獲物の首筋へと一直線に剣を突き立てた！

しかしそれでも即死しなかったのか、腕を振り上げカイトへと振り下ろそうとしたその瞬間、カイトの背後にいたガゼットが弓を一閃。飛び出した矢は一直線に額へと突き刺さり、それと同時に力尽きたのか、その巨体を地へと投げ出した。

危なかった…

初めて遭遇した種類の獲物だったといっても、危険だった事には変わらない。ガゼットがいなければ、倒れていたのは自分の方かもしれなかった。

知らず流れていた冷や汗をぬぐい、それにしても…と後ろを振り返る。

その的確なサポートだけでも凄いのに、さっき見たアレは、確かに…

「魔法…ですか…」

「そういや初めて見せたか？まあ、使いどころなかったしなあ」

と、とぼけるガゼットの言葉に、はあ…と溜息が漏れる。

魔法。

言うだけなら簡単だが、それを実際に使うのは恐ろしく難しい。

遙か昔は、大地に魔法の源となるマナが満ち溢れてはいたいたらしいが、今の時代ではほぼ枯渇し、魔法は己の体内に宿るマナを使う事ではしか行使できなかつたはずだ。

それを、まるでちょっと出来のいい手品を使って見せるかのごとく出し、さらにそれを当たり前の如く言う。

前から思っていたが、本当にこの人は、得体が知れない…

そんな思いをしつてか知らずか、サクサクと歩を進め、狩った獲物の血抜きなどをしている様は、どこからどう見ても、むさ苦しいただの狩人でしかなかった。

出会は唐突に（後書き）

ラビ＝野うさぎ

ホーン＝鹿

ガイラルベア＝3m位の巨体を持ったクマ

って所でしょうか。

熊鍋おいしいよ熊鍋

面倒な客人

「そのほうら！たいぎであった！」

手にした剣についた血油をぬぐい、どうやってこれを持って帰ろうか等と考えていると、倒れたベアの向こうから、小柄な少女が近づいてくるのが見えた。

「そなたらのゆうし、しかとみとどけた！」

…うん、

ちよつと舌足らずな感じで偉そうにしゃべるその子は、きつとその手の類の趣味の人には、とても可愛く思えるんだろうなあ。

そんな感想を抱きつつ、どうするんです？と、ガゼットのほうを見るやる。

どうやらガゼットも少し困っているらしく、ちよつと考えた末に声をかけた。

「お嬢ちゃん、ここいらは魔物の数が少ないといっても、お嬢ちゃんのような可愛い子供が入って来ていい場所でもない。そっちの子と一緒に、早く帰りな」

…もうちよつと言い方を考えられないのだろうか…。

軽く頭を抱えつつ、それでも言いたい事はほぼ同じであるカイトは、黙って経過を見守る事にした。だが結果は様相道理…

「姫様になんて無礼な口を！一介の狩人が、ただ顔を合わせるだけでもありがたいと言うのに！」

「よい、あのものがいつていることもどうりじゃ。たしかにこのような森にかかるがるしくはいるべきではなかった」

…予想外に後ろの、恐らく同じくお嬢様を諫めるであろうと思つていた侍女に抗弁され驚く2人。そしてそれを逆に諫める“お姫様”

「しかし、命をたすけられて、なにもせぬままたちさるのも、れいぎにもとる。そのほうら、名前はなんともうす？」

「…俺の名はガゼット…こっちはカイトだ」

「そのほうらの名前はしかとおぼえた。いずれこたびのれいにまいろう。それではな」

そう言つて森を街道の方に歩いていく。その彼女を追い、不機嫌なまま付いていく侍女。

なんとなしに顔を見合わせ、どうしたもんかなあなどと考えつつ、とりあえず獲物を持って帰るのが先決と、どうして運ぶかを考える2人だった。

バラすと逆に大変だからと、2人がかついで屋敷に戻り、味のいい部位だけを選んで屋敷に持って行くカイト。

それでも一抱え以上の大きさになり、汗を流しながら厨房に持っていくと、ちょうど中からフィリップが出てくる所だった。

「おや、今回はなかなかいい獲物がとれたようだね」

「はい、だいぶ奥の方迄行っていたので」

あれからだいぶ時もたち、その間何度も顔を出してくれていたフィリップとも、だいぶ親しくなっていた。

「今回の獲物はなんだったんだい？」

「ガイルルベアです。端の方はよけてきました」

「なるほど…なら夕食が楽しみだな。お姫様もきつと満足するだろう」

普段なかなか出ない食材に満足そうに頷くフィリップ。だが、その言葉にふと、危機感を覚えた。

「お姫様…今日来られるので…？」

「ああ、どうやら少し早めに着くらしい。道中で何事があったようだな。お陰で大忙しだよ」

そう苦笑いで返したフィリップの言葉も半分ほどしか聞こえていなかった。

姫様

たしか、あの侍女もそう言っていた。
…変なことにならないければいいが…。

不意に、ぞくりと背筋を悪寒が走ったような気がした。

肉を運び終え、そういえば何故わざわざお姫様がここ迄くるんだろ
う？なんて事を考えながら屋敷を出ると、丁度正門の所に、きらび
やかな馬車が止まるのが目に付いた。

嫌な予感がして、足早に立ち去ろうと背を向けた瞬間：

「おお！そこのおぬし！もしやさきほど森で会ったものではないか
！？」

その喋り方と声に、思い当たるのは一人…
恐る恐る振り向いたその先には、この家の当主に迎えられる、一人
の小柄な少女がいた。

呼び止められたからには逃げるわけにはいかない。半ば諦めの境地
でそちらに向かうと、満面の笑みを浮かべた姫様と、訝しげな顔を
しているガイランド家のもの達が待っていた。

「やはりおぬしだったか！まさかこの家のものだったとは…さきほ
どは助かった！あらためてれいを言うぞ！」

「失礼ですが姫様…この者と知り合いで…？」

無礼を承知で話に割ってはいる当主。

それもそうだ、自分の家の奴隷が、まさか主君の姫君と知り合いであった等、笑い話にも出来ない。

「いや…来るとちゅうで馬車からペットがにげだしてな。それをつれもどすために森へ入ったら、巨大なまものにおそわれたのじゃ」

それを聞いて驚くアベル。姫君がいくらこちらに全く非がないとしても、任されている領地内で怪我でもしたとあらば一大事だ。

「そこへこのものと、もう1人ベアのようなものがあらわれてな、助けてもらったのじゃ」

「なるほど…」それならば納得。というより、家の危機を救われたようなもので、むしろ家からも何か褒賞を出さねばならない位の事でもあった。どうしたものかと考えていると、

「して、さきほどはきちんと聞きそびれたが、そなたのほうは何かほしいものはないか？わらわにできる事ならばなんでもよいぞ」

しかし、そう言われても特に何も出て来ない。そもそも、奴隷が何か望むという事自体がおかしい気がするし、ガゼットの方も「いらねえ」と一蹴しそうな気がする。

結局「私は奴隷ですから、褒美なんてとても…」と、ありきたりの言葉を告げて辞去させて貰おうと口に出すと、逆にその言葉を聞いて彼女の瞳が輝いた。

「ほう！おぬしはどれいなのか！？あれだけのうでを持ちながらどれいとは…もったいないのう…ならばどうじゃ、わらわの元に来ぬか？」

その言葉に至っては流石のアベルも黙っていられず、「お待ちください姫様」と、割ってはいる事を余儀なくされた。

流石に姫様でも、いきなり奴隷を持って帰り、さらにそれを側に置くなど考えられない。奴隷を所有する事すらあり得ないのだ。

切々と説こうとするアベルだが、なかなか姫は言う事を聞かない。拳句、

「ふむ、そういえばこのものはそなたの奴隷であったな。ならば、わらわがこのものをそなたから買えばよい。いくらじゃ？5エルムか？10エルムか？」などと言い始める始末。

どうしたらよいか…と頭を抱えていると…

「ありがたいお言葉なのですが、私などが姫様のお側にいても役に立てる事などないでしょう。アベル様にも、とてもよくしていただいております。ですから、もうそのお話はこれで…」

と、カイトが言った事で姫もようやく折れたのか、「ならばしかたないのう…」などと肩を落とし、心底残念そうに言った。

「ならば、後日またほうびの話をするでしょう。わらわの名前はアリシア・ローゼスハイトじゃ。おぬしのなまえはもうおぼえた。ゆえにわらわのなまえ、しかとおぼえておくのじゃぞ？」

そう言い残し、颯爽と屋敷の方へ去って行った。それを慌てて追うアベル他一同。そのほぼ全員が鋭い視線をカイトに投げて行き、なんと居心地の悪い思いをする事になった。

“ 奴隷 ” という名の存在価値 - 1

その日アリシアは、遅く迄物思いにふけていた。

あの奴隷の青年…カイトといったか…彼が、どうにも欲しくて堪らなかつたのだ。

彼の年齢は17と8といった所だろう。

その年で、ガイラルベアという、大人でも手こずる相手を軽々と倒してのけたのだ。

その才能は皇都でもなかなか見れない。

その上頭もしっかりしているようだし、今からきちんと鍛え上げれば、近衛になつてもいい所迄いくだろう。

欲しい…

あやつが欲しい…。

等とブツブツ呟きながら部屋を時折立ってはウロウロ歩き回り、ふと何かに気がついたように顔を上げた…かと思えば首を降り、また椅子に座る。

そんな怪しい皇女の姿を、「また始まつた…」だとか噂をする女中達。その上中には、「まさかあの年から男あさを…」等と、不敬罪とも取られかねない…むしろそうとしか思えぬ発言をするものもいた。

だが、当のアリシアはといえば、そんな事など全く気づかず、只々どうすればカイトを自分の元へ来させるか。それだけしか考えていなかった。

しかし、この事をカイトが知れば、そのあまりの突拍子も無さに額然としていただろう。

彼にしてみれば、あの戦いで手を出したのはただ一度。

しかもそれさえとどめを刺せず、あのまま腕が振り下ろされればただでは済まなかっただろう。

そんな戦いが評価されてもどうしようもない…。

しかし、アリシアからしてみれば、全くの謙遜…となる。

少なくともアリシアが立っていた位置からは、弓を射たガゼットの側へと向かっていたガイラルベアへ、勇猛果敢に飛びかかり、腕をかくぐって喉へ一突き！

ガゼットが魔法を使った事も、首から剣を生やし、なお襲いかかるうとした所に矢を額に突き立てる…などといった所は全く見えなかったのだから。

普通は剣を首に突き刺されたら生きてはいられない。

だからベアはあれで死んだのだ。

おまけに、髭の生えたむさくるし男より、顔のそこそこ整った若いものの方が…といった所でだいぶ美化されてもいたが。

結局のところ問題は、どうやってカイトを自分に側におく口実を作るか。

色々と頭を捻った挙句そう結論づけたアリシアは、翌日アベルにこの案をのませるために、あれやこれやと作戦を練るのだった。

翌日アリシアに「カイトの件について話がある」と言われたアベルは、どうしてくれるようかと途方に暮れていた。

と、いうのも、今回アリシアがガイランド家に来ている理由は、『社会勉強』という意味合いが強い。

どうしても世襲制の問題点となる、“限られた世界で過ごすうちに固定される視点”というのは、その制度からして避けては通れない。

皇族はどうしても狙われやすい。

だからこそ、万全な皇城に住むのであって、

決して権力を振りかざすためでも、贅沢をしたいからという訳でもない。

だが、そこで常に生活をする内に、どうしても考え方は歪んでしまう。

限られた場所で、限られた人にしか会わぬ生活。

それは歪んでいるとしか言えない。

価値観、考え方は、どうしても会う人間、生活する場所で変わってしまう。

皆が皆同じ生活をしているのならばそれでもいいのかもしれない。

だが、世界というものは違う。

目覚め

あるいは家事を

あるいは仕事を

人々はこなし、それによって生活していく。

その生活は千差万別。

ひとりとして同じものはない。

だからこそ法は、力無きもののためにあり、

その為に力を振るうのが、皇族たるものの義務でもある。

しかし、一部の者しか見えぬ場所においては、如何に賢者と言われようと、その目を曇らせてしまふ。

それが幼子ならば尚更に。

そして人は、自分が一度も見た事がないものは、想像すら出来ない。

だからこそ、このローゼスハイト王国の皇族には、各国にはない、とある義務が課せられている。

『齢10を数えた皇族は、その領地内にあるいずれかの家に赴き、1年間生活すべし。その間その者は皇族としてではなく、“1人の人間”として生活し、街に赴き、己の生活を支える人々の生活をよく目に焼き付けるように。そして皇族としての義務を、しかとその心に刻むべし』

それがローゼスハイト皇族に課せられる義務であり、それをもって、晴れて皇族として受け入れられる、ある種の試練でもあった。

この考えが根幹にあるからこそ、ローゼスハイト王国は、1000

年の長きに渡り、その国土を維持し、大国としてこの大陸の中央に位置し続ける事が出来たのだ。

そういう意味では、魔物に襲われ命の危険と、その尊さを知るきっかけになり、奴隷という社会の仕組みに触れるきっかけにもなった。それはきつち、彼女の得難い経験の一つになるだろう…とは思う。思うのだが…。

「奴隷を連れ帰る側に召し置くのは流石に…冗談としても笑えんな…」

“ 奴隸 ” という名の存在価値 - 1 (後書き)

社会見学システムは、以前から考えていた、専制君主、及び王権と民主主義政権との弊害その他を考えた時に、ぼんやりと考えていたものを使ってみました。

一応これだけでなく、他にもあれこれと制限などもあるんですが、それはいつか機会があれば晒そうかな…と。

それのお陰で、ローゼスハイト皇国は、多少のいざこざや問題はあ
るものの、他の国に比べれば、しっかりした土台と平和な生活が長
く続いている大国であり続けています。

専制君主は、意外と悪い事ばかりでもないのですよ。

“ 奴隷 ” という名の存在価値 - 2

アベルは、応接間にあるソファに深く身を沈め、驚きと、喜びを感じながら、その話を聞いていた。

「だから、わらわは、どれいかいほづの為の手段の一つとして、カイトを側におきたいのじゃ！」

強気に、はっきりと自分の意見を主張する目の前の幼子に、アベルは今はずきりと喜びを感じていたのである。

奴隷解放

その事になにか思い入れがある訳でもない。

カイトが欲しいから

ただその為だけに、彼女は理路整然と、奴隷解放という手段を使おうとしたのだ。

それも、そこらへんの大人なら考えもつかないほどに、きちんと、はっきりと“ただしさ”を全面に主張した、反論の余地が無くなるほどのものとしてまとめ上げたものを…だ。

これほどとは…

以前から聞かされてはいたが、ここまで賢いなどとは思ってもしなかった。

思いつきにすぎないにせよ、その思いつきを確かなものとすべく、自分の知識を使い、現実にする手段として作り上げられるとは…。

彼女が提案した事とは、簡単に言えば、

『奴隷制度とは間違っている。人はあくまで人なのだから、ちゃんと人として生きるべきだ。』

だから、その為にカイトをまず自分が召し抱え、その姿を国民に見せる事で、奴隷とて一国民である事を民衆に理解させ、それと同時に奴隷達にも希望を持たせ、しかるのち、きちんとした制度を決め、順々に奴隷を開放していく』

というものだった。

細かな制度等は考えていない。出世するカイトだけが特別…等と考えられる視点の問題もある。

しかし、自分の言葉を使い相手を説得するその力。

恐らくは上に立つものが振るう力の中で、一番大切でがなかるうかと思えるそれを、その資質を見せたのだ。

その知略をもつて、ローゼスハイトの重臣たる席をもつアベルにとつては、そこが戦場であり、その戦場でれば、どんな敵にも勝つ。

それ程の意思と力を持ったアベルを説得するのは難しい。

王からも、「お前を頷かせるのは骨が折れる」と言わせた程だ。

その自分が、ほんの少しでも良しと思えるものを、たかが10歳の
子供が持ってきた。

… 将来が楽しみだな…

しかし、この子は知らなければならぬ。
何故奴隷がいるのか…を。

「成る程、確かに言う事はごもっとも。しかし、奴隷制度をなくす
事は不可能なのです」

「なぜじゃ…？」

「第一に、奴隷制度が深く社会に浸透している事。

たとえば言うならば、貧しい民家が子供を売る事で生き延び、
それを買った奴隷商が売る。

売られた奴隷は働き手となり、それを所持する事が、財産とな
る事もある。

まずこれを無くすには、貧しい民家が、子供を売らずに生活し
ていけるようにしなければならぬ。

そして、仕事を失う奴隷商や、そもそも奴隷達にも、仕事を世
話しなければならぬ。

さらに、今迄奴隷達がして来た仕事を、だれかがせねばならず、
また、奴隷という財産を無くすもの達にも、なんらかの保証をせね

ばならないでしょう」

「むう…だが、それはおいおいとして…」

「そしてなにより、何故奴隷が生まれたか…と言う事です」

「…どういうことじゃ？」

「我が国…いや、この大陸は、長く、本当に長く、戦乱というものを続けて来ました。」

一年として、完全なる平和がこの大陸に訪れた事はありません。必ずどこかの国と国が争って来ました。

そして、敗者には必ずその責が問われる。それには色々な形がありますが、その一つとして、負けた国は勝利した国に、簡単に言えば、金を支払わなければならないのです。

しかし、必ずしも金がある訳ではない。

この世界の奴隷、その始まりは、敗戦国が支払えなかった対価…その代わりとして売られた、捕虜達だったので

「……！」

「今現在この大陸にいるほとんどの奴隷は、元捕虜達でしょう。以前は問題も無かった敗戦国の支払いも、度重なる出費と、一度売り払った人権という物に、抵抗を持たなくなっているということもあります」

「しかしそれは…自国の者達ではないのか!？」

「ええ、確かにそうです。ですが、今現在それを続けている各国の上層部は、人を、物として、駒としてしか考えていたおりません。」

それに、国自体が無くなる事もよくある話ですから

「しかしそれではあまりにも…」

「それが、今のこの世界のありようです。」

決して褒められた物ではない。しかし、それを正そうとすれば、根本より変えるしかない。

「貴女にそれが出来ますか？」

「……………」

俯き、悔しそうに顔をしかめるアリシア。

だが、問題はそれだけではない。

「それに、他国の事を置き、自国でだけ…などと考えても、不可能なのです

それは、人の感情によるもの。

人はだれしも、上へ上へと登りたがるものです。特に、一度上
下が決まった世界に身をおけば。

だからこそ、人は己を研磨し、鍛え上げる。

ですが、人は上だけを見て生きていけないものではない。

上・下とは、上があり、下がある事で初めて成立するのです。

そしてそこには…最底辺というものが必要になる」

「それが…奴隷…と？」

「一般市民…それが、1番多く、そして1番大切な、国を成す要。

しかし、その要の大半が、この国での最底辺だと、それより上
に上がるのが、困難な道程だと知れたら…人はどうなりますか？」

上にいけるとわかるから努力するのであって、それが大半の人
間には出来ない事だと理解されたら…

「人は、臆病で、我儘な生き物です。

確かに、最初から奴隷等存在しなければ、比べる事など考えもしなかったかもしれない。

上下で考えるところでも、きっと市民の中での富裕だけで考えていたでしょう。

それだけでなら、なんとかあったかもしれない。

ですが、今はもう、はっきりと決められているのです。

奴隷がいるから、市民は底辺ではないのだと

「それが、理由か？」

「はい。」

人は、己の地位が脅かされそうになると、脅かそうとするモノに対して、ひどく残酷になれる。

そして、己の地位が確かにある事によって、疑いもなく生きていけるのです」

「わかった…だが…わらわは、今の話を聞いて、より、なんとかしたいと思うようになった」

「で、あれば、なんとかできるように、考えてください。」

それが、皇族に連なるものの使命でもありません」

アリシアは、その言葉を聞いて、はっきりと目に強い力を秘め、部屋を出ていった。

…どうやら、今度のお守りは大変らしい…

ため息をつきつつ、確かにある胸の期待を感じながら、アベルは、彼女が出ていった扉を、ただ見続けていた。

“ 奴隷 ” という名の存在価値 - 2 (後書き)

奴隷に対して深く考えるきっかけを得たアリシア。今後はどうなっていくのでしょうか：楽しみですね。

ちなみに今回アベルがアリシアをこてんぱんにした理由としては、将来に期待していたというのもありんですが、

カイトをただ欲したからじゃなく、カイトを手段として、社会を変えたい事を望んだからです。

単なる思いつきでも、実際にそれをする力がある。だから、よく考えなさい、裏の裏迄。

そう言いたかったんですね。

ただの意地悪なオジサンではないのです

変わる日常変わらぬ平穩（前書き）

3000PV、ユニークアクセス6000突破しました！
これからも応援よろしくお願いします！

変わる日常変わらぬ平穩

あの日から、何かにつけあの少女がまわりついてくるようになった。

…というより、待ち伏せをされている感が否めない。

何がいけなかったのだろうか…というか、何故あの少女はこうも自分の居場所がわかるのだろうか？

見張られてでもいるのだろうか…

終わる事のない思考の螺旋に吞み込まれながら、カイトは始めてあったあの日からの事をなんとなく思い出していた。

わらわの奴隷になれ！…間違っではないはずだ…と言われたあの日。

偶然狩りの途中で出会い、図らずも命を助ける事となったあの少女。

もう二度と会う事はないだろうと思いつつ屋敷に帰れば、件の少女が訪れて、更に1年間屋敷に住まう事になるという。

おまけにその正体はこの国の姫だという。

…どこの御伽噺だ…

おまけに何をそんなに気に入ったのか、勉強の合間に暇を見つけては小屋に姿を現す。

お付きの侍従等も最初は穢れるだのなんだの言っつて小屋から遠ざけようとしていたようだが、1月経った今ではもう、諦めたのか

なんなのがよくわからないが、我関せず…といった態度を取るようになってしまった。

勉強さえちゃんとしていればいいのだろうか？よくわからない。ただ一つわかっているのは…この、背中に刺さる、ねちっこい視線から、どうにかして逃げなければならぬ…という事だけだった。

「あやつは今日もくんれんかのう…あきもせずよくやることじゃ…」
「同じ台詞をそっくりそのままお返しします」

目の前でそんな事を漏らす少女の姿を生温かい目で見守りながら、マリア・ルピスは溜息をついた。

この目の前の少女…自分が仕えるべき主、アリシア・ローゼスハイト…彼女は、このガイランド家の屋敷についた次の日から、暇を見つけては、せつせとこの屋敷に飼われている奴隷の元に足を運んでいる。

最高級の手触りを持つメルク系のような光沢を持つ豪華な金髪に、淡雪のような白さを持つ肌。整った顔だつを持つ彼女は、ローゼスハイト皇国の第2皇女として申し分のない器量を持っている。
将来はさぞかし美しくなるだろう…見た目は。

問題はこの性格…皇女というには余りに好奇心旺盛…というか、後先を考えない性格のおかげで、ここに来る前から何度も…そう、何度も何度も何度も煮え湯を飲まされている。

そして今回のこれだ。

皇族であるならば、確かに一度は奴隷に触れる機会を持つべきだろう。しかしこれは…

先程と寸分違わぬ姿で目の前の奴隷の姿をじーーーーー……
っと見続けるその姿は…

「あつ！姫様！また何かはじめるようですよ！」

ここ一ヶ月で確実に回数が増えた溜息を吐き、マリアは、そもそもこんな事の原因を作り出したきっかけ…を作り出した存在に目を移す。

ルビア・ルビニア…そっかしくてドジな、何故姫様の侍従に選ばれたのかさえわからない、この見習い侍従が、あの子を逃がしさえしなければ…

流れるような足運び…

鋭い呼気とともに突き出される剣先…

まるで剣舞のようなその動きを目で追いながら、私は何度めかの溜息を漏らした。

… かつこいいなあ…

あの日、姫様が飼っているルリムを逃がしてしましまい、森の中で大きな魔物に襲われた時から、彼の事が頭から離れなかった。

その日私は、アリシア様が1年間お過ごしになられるお屋敷にむかう馬車の中で、姫様が飼っているリルムの世話を任されていた。ふわふわの尻尾を持つ、そのとても愛らしい姿をした小さな生き物は、与えた餌を口いっぱい頬張って、カゴの中をぐるぐると走り回っていた。

かわいいなあ…撫でたいなあ…もふもふだよなあ…

なんて事を考えつつ、じーっとその愛らしい生き物を見つめ続け、例のあの森に近づいたあの時。

急にリルムが足を止め、じっと窓の外を見続け始めた。

どうしたんだろう？なにかあるのかな？

普通だったならその動きになんとも思わず…むしろ見てもいなかったのではないかとさえ思える…いただろう。だが、ルビアは気がついてしまった。

それが運の尽きだったのだろう。気がついてしまった彼女は、いつものように変わらず、楽観的に、かつ短絡的に考えてしまった。

窓の外が見たいのかな？

そう考えた彼女は、ちょっとだけなら大丈夫だよな？と考え、リルムを籠からだし、窓へと近付けたのだ。

一緒に乗っていた先輩侍従が注意した時にはもう遅く、彼女の手から一目散に駆け出した小動物は、あっという間に森の中に駆け込んですぐ姿が見えなくなった。

どうしようどうしようどうしようどうしよう

いきなりの事態に混乱した彼女は、「探してきます!」と言い放ち、森へと駆け込んだ。

姫様があの子を可愛がっていたのはよく知っている。なんとかして連れ帰らなきゃ…

それだけの思いで森の中に分け入り、ルリムを探してどの位が経っただろう。

一刻とも思えなし四半刻しか経ってないようにも思えた。

森の中を彷徨っていた彼女は、目の前の草叢がガサガサッと揺れる音を聞き、思わず「リリア!？」と、その子の名前を呼んでいた。

しかし、そこから現れたのは、そこらの大人よりも大きな巨体を持った、巨大なベアだった。

驚きと恐怖で身体が竦み、力無くへたり込んでしまう。

…どうしよう…逃げなきゃ…

なんとかそれだけ考えるも、どうやって逃げたらいいかなど考えられるはずもない。

どうしようどうしようと考えている間にも、一歩ずつ近づいてくる魔物に怯え、脚には全く力が入らない。

…私ここで死んじゃうのかな…?

不吉な考えが頭をよぎった瞬間、今度は背後の草叢が揺れ、何かが飛び出してきた。

また何かが出てきた！と、思わず首を竦め目を閉じる。

…怖い…怖い…誰か…

恐怖で塗りつぶされた心に、凜とした声が響く！

「退け！手を出すでない！」

反射的に目を開けた彼女が見たのは、己が仕える主。10にしかならぬ彼女が、自分の目の前に身体を晒し、大きく手を広げて自分を庇っている姿だった。

なんで！？なんで姫様がここに！！？？

驚きも束の間、今度は更なる恐怖が襲う。

自分の代わりに姫様が死んでしまう！

それでも力の抜けた四肢は動かず、魔物はどんどん近付いてくる！

誰か…助けて…！

先程とは違う祈りが天に通じたのか、どこからともなく飛来し

た矢が魔物の身体に突き刺さる！

突然の攻撃に怒った魔物はその身体を矢が飛んできた方向に向け走り出す。

その後状況についていけない思考が辛うじて見出せたのは、唐突に響く爆音と、脇から風のように飛び出し、かの魔物に剣を突き刺し仕留めた青年の姿だった…。

その後馬車に連れ戻され、激しく叱られたあと屋敷に向け再出発し、ついた彼女達を待っていたのは、先程命を助けてくれた青年だった。

運命…そう、運命なの！

奴隷だとかなんて関係ない、これは運命なのよ！

自己完結した頭のなかで幾度もつぶやき、反芻した言葉を再度つぶやきながら、彼にひたすら熱のこもった視線を向ける。

彼女の主と同じ、しかし、微妙に意味の違う

視線を、近くにある小屋に影から、ひっそりと…

変わる日常変わらぬ平穩（後書き）

ストーカーじゃん！

とかってツッコミは無しの方向で。

変わる日常変わらぬ平穩・2 (前書き)

なんだかアクセスがぽんつと跳ね上がって、嬉しいよりも怖ろしい
気持ち強い…

変わる日常変わらぬ平穩 - 2

きつと今日も何処かで見てくるんだらうな…

毎日の日課の鍛練を覗き見られるのは、正直あまりいい気分では無い。

というか、はつきり言うて恥ずかしいのだ。

最初の方は、隠れもせず堂々と、当たり前前の様にやってきて、ソレはなんだ、コレはどうするのだと引つ切り無しに聞いてきた。

仕方がないので、やんわりと、丁寧に、遠回しに、邪魔だから来るなと伝えてみた。

それもはじめは伝わらず「妾の事は気にせずともよい！」だの、「妾はただ見ておるだけじゃ！」等と言っていたが…そうじゃなかったから言ったのに…侍従さんの方に視線で訴え続けたらどうにか理解してもらえたようで、正面で居座る事はなくなった。…あの時は殺されるかと思っただけど…。

しかしそのおかげで、今度は何故か物陰から盗み見るようになってしまい、かえって面倒な状況になってしまっている。

どうしよう…いっその事森の中で…いや…もし森に中までついてきたら…

「相変わらず人気者だな」

いつしか手も止まり物思いに耽っていると、いつの間に来たのかフィリップが正面に立っていた。

「あ…こんにちわ、フィリップさん」

「で、どうしたんだ？ぼーっとして。」
「いや…集中できなくて…」

そう言っつて左手にあつた倉庫の陰に視線を移す。
その途端、顔を出していた2人の顔が慌てて引つ込んだ。

…いや…バレバレだから…

はー…っと溜息をつくカイトと、それを見て笑うフィリッ
プ。

「まあ、気にしていてもしょうがないんじゃないかな？…それより、
アベル様がお呼びだよ」

「旦那様が…？」

「ああ。いつでもいいから、執務室に顔を出して欲しいそうだ」
「…わかりました」

こんな状況じゃ鍛練にならない。先に話を聞きに行こう。
カイトは小屋に戻り剣をおくと、執務室へと向かった。

「失礼します」

「ん…カイトか、早かったな」

「ご用事があると聞いたのですが…」

「ん…まあ、座ってくれ」

そう言ってアベルはソファに身を沈めた。

慣れない状況にカイトは、身体を力チ力チに固めてアベルの言葉を待った。

「話というのはな、お前に何か褒美を出そうと思ってな」

「褒美…ですか？」

思わず首を傾げるカイト。何か褒められるような事をしただろうか？

「以前アリシア様を森で助けたといったな？あれの件だ」

「しかしあれは…」

「確かに、お前達の目的としても、あの獲物を狩る事だったから、結果…としてではないが、それでも結果は結果、事実として、お前達に助けられた。だから、何も無しではいかなだろう」

「それではガゼットの方に何かあげていただければ…」

「ガゼットには先に話した。しかし、あやつの方からもカイトになにかやってくれという事でな、お前が来てからだいぶ楽もさせてもらっているから…と言う事らしい」

「はあ…」

しかし、急に言われても、欲しいものなど何も無い。奴隷の身分なのに、お腹いっぱいご飯を食べられ、まともな寝床にありつける。それだけで十分だった。

「流石に…この時期に解放…というのは些か問題になりそうだから、それ以外で…何かないか？」

「望み…ですか…」

解放…は確かに嬉しいが、今更何処かに行く当てもない。それならばここで働いているほうがいいし…なに…か…

「もし…できたら…でいいのですが…」

「ふむ…？」

「妹と・友の行方が知りたいのです」

「ほう…」

それから、カイトは自分が奴隷となった顛末をアベルに語った。

村を襲った盗賊…それから逃げた村人…追手との戦闘…。

「なるほど…それで、生き別れになった妹の安否が知りたいと…」

「はい。場所も離れていますし、3年も前の事ですから、今どこにいるかも、何をしているか…生きているかもわかりませんが…」

カイトには、今、それだけが気がかりだった。あの日生き別れた妹…ちゃんと街に辿り着けたのか…今どこで何をしているか…。

「…わかった。時間はかかるかもしれないが、なんとかしよう」

「…あ…ありがとうございます！」

「あまり、期待はするなよ？」

「はい…探していただけのだけで…」

今までどうする事もできなかった事が、なんとかなるかもしれない。それだけで十分だった。

「ふうむ…なるほどのう…そんな事情があったとは…」

「姫様、流石にコレは如何なものかと…」

執務室の前、扉に身を寄せる2人の間者…ではなく、アリシアとルビアだった。

いつもよりも早く鍛練を終えた…既に時間などは調べ尽くしてある…カイトがどこに向かうのかと後をつけ、執務室に入った事から何かあったのではと、好奇心…いや、心配になって話を聞いていたのだった。

「そんな理由で奴隷になっていたとは…しかし、妹か…」

父に頼んで探してもらおうか等と考えていると、どうやらカイトが出て来るらしい。慌てて隣で泣いている…カイトの話聞いて感極まったのか…ルビアを引っ張ってなんとか隠れねば…と、慌てて去って行くアリシア。

その後ろを追いながら、どこでどう育て方を間違えたのだろうかと…と、本気で悩み始めるマリシアだった。

変わる日常変わらぬ平穩・2 (後書き)

はい、苦勞が耐えませんね、マリアは。

ルビアの天然ぶりがまたなんとも足を引っ張ります。

次回から少し加速していきます。

蠢くモノ（前書き）

微妙にランキングにひっかかっていたのですね、理解出来ました。

11/29*リルム ルリムに直しました。

晝くモノ

その日カイトはいつものように狩りに出かけていた。

流石に狩りの日では後ろをついてくる事もないようで、数少ない息抜きの日になっていた。

今日はガゼットが何か用事があるとかで1人で来ている。

どうもこの間森に来た時に、怪しい気配がした…という事で、街に話を聞きに行っているらしい。

しかし、1人で狩りに出る事も初めてではなく…というか、最近では1人で狩りに出るほうが多くなっていた。

また何か適当な口実でも作って遊びに出かけたんじゃないか？なんて事を考えつつ、カイトは森の奥を目指していた。

今日の目的は、前回来た時に仕掛けていた罠の確認と、矢羽用に見える大きな羽根を持つ、バーツという生き物だ。

バーツはあまり姿を見かけない生き物だったが、以前来た時にファームを見つけたので、そこへ行ってみるつもりだった。

ファームとは、人でいう部落や村と言った感じで、単一種で作られた集落…といった感じだ。

必ずファームが出来ている…という訳でもなく、モンスターや一定以上の知恵を持つ動物でなら珍しくもないが、バーツがファームを作っている事は珍しく、狙い目でもあった。

先ずはファームの方についてから…かな。

着いたファームでは、今もブーツの群れが羽根を休めているところだった。おそらくその数30以上…この森に生息するほぼ全てが集まっているんじゃないかという位の数だ。

…おかしいな…本来ブーツは渡る習性も無いはずだ。卵を産む時期でもないし…何があった…？

ちよつとした異常事態に頭を捻らせるも、ここで1人で悩んでいても仕方がない。今は獲物をとるのが先決。かえってガゼットに相談しよう…。

そう結論付けると、カイトは肩に背負っていた弓をおろし、静かに近寄っていった…。

目標は…3羽…いくぞ…！

手の弓を握りしめ、背負っていた矢筒から矢を引き抜き、限界まで引き絞った弦から矢を撃ち出した！

街に来ていたガゼットは、いつも顔馴染みの店に顔を出しては、世間話をするともに情報を集めていた。

「ようガゼット！久し振りだな。今日はどうした？」
「おう、グラッツ。ちよつと武器の整備と、調達にな」

ここはガイラムの街で一番腕のいい鍛冶師のいる工房…といつても二つしかないが。それでも腕は確かだ。ここはよく冒険者も利用しており、出る武器などで何があつたかもおおよそわかる。

「ほー…お前もか」

「ん？他にも来てる人間がいるのか？」

ここらへんのモンスターは以前、粗方始末したはずだ、一度掃除したらそう簡単には再発生はしないはずだ。

「ああ、なんでも、ここ最近近くの街道でよくモンスターが出るらしい。といつても、あまり強いヤツはいないようだが。それでも危険には違いないから…と、駆除の依頼が多くなっているらしい」

「それは…いつ頃からだ？」

「ん…確か…一月前位…だったか？詳しい事が知りたけりゃ、ギルドに行つてみたらどうだ？」

「ギルド…か…」

「まあ、お前が好きじゃないつてのもわかるが、それが手っ取り早いだろ。・・・気になるんだろ？」

「そう…だな…」

ここ何年も近づいていない場所だったが、仕方がない。整備をしている間に顔を出すとするか…。

結果は5羽：数が数とは言え、単独での狩りならば上場の結果だった。

本来ならば2射目辺りで大体のものが逃げ出す筈だったが、今回に限っては何故か動きが鈍く、遠くへと逃げないものを優先的に撃ち落とした結果だった。

それでも流石に5羽も落とせば踏ん切りがついたのか、全てのバーツが去っていったが…。

しかし…何かがおかしい…。

森自体が奇妙な静けさで包まれていて、普段ならばそこらを駆け回って入る小動物の姿もない。いったい何が…。

そんな事を考えつつ、畏の方へと足を運ぶカイト。見回り次第、すぐに戻ろう…などと考え、めぐる事半刻程。畏の一つでガサガサと揺れる音がしていた。

…あたりかな？

などと考え歩み寄ると、そこにかかっていたのは、一匹のルリムだった。

珍しいな。こんなところでルリムを見かけるなんて。

本来ルリムはもつと南の方で生息している筈だ。この辺りではまず見ないし、罨にかかるような事もないはずなんだが…。

などと考えつつ、罨を外してやるカイト。正直ルリムを食べる気にもなれず、きつとどこかの家から逃げ出したのが住み着いたんだろう…戻ってから薬を塗ってやろう…。

罨を外し、丁寧に布を巻いて、怪我をしないようにバツクパックへと入れたその時、と遠くの茂みがガサガサと揺れ始めた。

…獲物か…？

バツクパックを下ろし、身構えた瞬間、その茂みから何か飛び出して来た！

咄嗟に回避したカイトが見たモノは、自分の身長半分程の大きさの、緑がかった体表をした、気味の悪い小人のようなモノだった。

片手にナイフの様なものを持ち飛び出して来たソレは、ゴツゴツとした顔に醜悪な笑みを浮かべ、カイトのバックパックを手にしている。

慌てて詰め寄り、腰の剣を引き抜き斬りかかるカイト。出て来た時は遅れをとったが、正面にいるならば別だ。

数歩の距離を一呼吸で詰め寄り、右手の剣を一閃！目の前のイキモノの首を斬り落とした！

崩れ落ちる身体からバックパックを取り返し、その身体を見やる。

…この森でこんなイキモノを見た事はない…まさか…モンスター…？

不吉な予感に襲われたカイト。だが次の瞬間、このモンスターらしきものが現れた茂みから、同じ様な格好をしたイキモノが4体、飛びかかって来た！

…ッ！？まさか、血の匂いに…っ！？

急な展開に驚きを隠せず、しかしこのままではいけないと、バックパックを肩に担ぎ、なんとか退路を確保するために、カイト

はそのモンスター達へと剣を向けた。

降りかかる猛威

最近モンスターが大量発生している。どうやら発生源はあの森らしい。以前駆逐した巢に新たな種が住み着き繁殖した様だ。

ギルドに赴き聞いた話を纏めると、こういう事だった。

確か今日は、カイトが1人で狩りに出ているはずだ。あいつはまだモンスターとの交戦経験が無いし、巢の場所を教えた事も無い。まかり間違つてあの場所に近づいてしまったら…。

慌てて屋敷まで戻り、小屋まで駆けつけると、丁度森の中からカイトが出てくるところだった。

着ていた服はボロボロになり、ところどころ血が滲んでいる。しかし、疲れてはいるものの、致命傷という訳ではないようだ。それだけ理解したところで、ガゼットは安堵の息を漏らした。

「あ…ガゼットさん…」

どうやらこちらに気がついたらしい。

「無事だったみてえだな。よかった」

「はい…森の中で、緑色の小人のようなものに襲われて…」

緑の小人…ゴブリンだろうか…？以前駆逐したモンスター

もゴブリンだった。

「何匹いた？」

「畏をしかけたあたりに…最初は1匹だけだったんですが、どんどん増えてきて、最後は20匹位に…」

まず間違いないだろう。あいつの一番厄介なところは、その繁殖力と、数で押し包んでくる所だ。

「よく無事だったな」

「とにかく隙をみて脱出しようと考えていたので…」

「そうか…とりあえず、小屋で休んでいる。俺はアベル様と話をしてくる」

そう言うと、俺は執務室へと向かった。…しかし、思ったよりも数が多いな…ここまで増えてるとは…怠け過ぎたか…。

己の失態に舌打ちをしつつ、しかし、カイトの成長にも驚いていた。

並の大人ならば、20匹のゴブリンに囲まれれば、逃げ出すのも容易ではない。手練れの冒険者でも1人では苦勞する。

…2年の間にそれだけ成長したって事が…

弟子とも言える存在の成長を嬉しく思いながら、足早に屋敷へと向かうアベルだった。

小屋に戻り、自身とルリムの治療を終えたカイトは、そのまま横になっていた。

あのモンスター…いつからこの森にいたんだろうか…。

ここ最近ではあまり無かった『戦闘』とも呼べる行為に、カイトは身体を震わせていた。それは、あのモンスターだけによる恐怖ではない。3年前の、あの日の恐怖を思い出していたからだっ

た。

自分の実力は、あの時よりも上がっただろう。だが、あの時よりも多い数、そして人間とは違う存在。それが、こも屋敷や近隣の街を襲う…。

そう考えただけで、身体が震えた。

簡単ではないだろう。だが…あのモンスター達を、根絶やしにしなければならぬ。

心の中で覚悟を決めたカイトは、倉庫の奥にあった防具類などを点検する事にした。きっとガゼットは行くだろう。ならば、自分もそれについて行く。そう、固く心に決めて。

主人に事情を話し、これからの行動を相談し終えたガゼットは、小屋にいるだろうカイトをどうするか、決めかねていた。

近隣の街の脅威にもなる。森や周辺には、街で依頼をだして冒険者に駆逐させ、巣には自分1人で殲滅する予定だった。

おそらくこの分では、巣の中には100匹以上…そして、周辺にもそれなりの数が出ているだろう。以前よりも数を増したモンスター相手になれば、足でまといは要らない。

一体一体の脅威はそれ程でもない。囲まれないようにさえ気をつけさえすれば、どうとでもなる相手だった。

だが…カイトは…きつとついて来ると言うだろうな…。

ある意味実力でいえば問題はないだろうが、集団相手の戦闘ともなれば勝手は違ってくる。今更教えても付け焼刃であれば…。

そうこうしているうちに小屋にたどり着いたガゼットは、

扉を開けるなり目に入って来た光景に驚きを隠せなかった。

そこにあっただのは、倉庫の奥にしまっていた筈の、自分の装備一式と、おそらく自分で作ったであろう装備を身につける、カイトの姿だった。

綺麗になめした革を幾重にも重ね合わせたであろう、身体の急所を覆うレザーアーマーを身につけたカイトは、ガゼットの姿を見るなり、「俺も行きますよ」と言わんばかりの視線を投げつけて来た。

…これは…置いてはいけないな…。

苦笑と共に、覚悟を決めたガゼットはカイトに、対モンスタ―戦の心得を教えていった。

降りかかる猛威（後書き）

いよいよまともな戦闘シーンとなります。

これまでではちょっとづつしか出て来ませんでしたしね。

グロ系好きでない方は、飛ばすほうがいいかもしれません…

仄暗い廃坑の奥で

「よし、それじゃあもう一度確認するぞ！」

ガゼットの戦闘講座が終わり、今は巣があるであろう廃坑の前に来ていた。

「まず、基本は狭い通路で、挟まれない様に気をつけながら、出来るだけ少ない数の敵と戦う事。特に今回の様に、繁殖力が高いモンスターや、連携がうまい相手には有効だな」

「はい」

内容自体は出てくる前に聞いていたので、新しく覚える事はない。しっかりと頭の中で思い出せている。

「それから、戦っている最中、疲労が溜まったり、大きな怪我をして治療がしたかったりする時は、大声で『スイッチ！』と叫ぶ。これが出るのと出来ないのでは大違いだぞ。無理をせず、余裕を持って事に当たる事」

「はい」

狭い通路や単体の敵と戦う時等は、基本的に正面の人間しか戦えない。だからこそそのスイッチだ。

「死んでしまえば元も子もない。どうやって倒すかじゃなく、どうすれば生き残れるかを考える。いいな？」

「…はい！」

「…よし…いくぞ！」

「ギャツギャツ！ギャギャツ！」

「…チ…ッ！キリがねえな！」

肩に担いだロングソードを斜めに振り下ろし、ゴブリンの一匹を両断しながら、ガゼットは奇立ちを隠せずに行った。

まだ、廃坑に入ってそれ程進んでいる訳でもないのにこの数…既に30は既に超えている。これは、100どころではないかもしれない。

参ったな…こりゃ…どうやって数を減らす…？

そんな事を考えつつも、身体は止まる事は無い。既に辺りは屍の山となっている。

チマチマやるのは症に合わんが、仕方ない…か。

しかし、イラつくものは仕方ない。と言わんばかりに、右手のロングソードを右に、左に、閃かせることに、一つ、また一つと屍が増えていく。濃い血の匂いが、まるでゴブリンを誘う媚薬の様さに辺りに充満していた。

…凄いな…。

後ろから見ていただけで、その凄さがわかる。

まるで無造作に振っているかの様に見えるが、きちんと計算され、確実に致命傷になる様に剣を振るっている。

それは舞の様に美しいわけではない。しかし、剣を操る者の一つの到達点とも言える姿だった。

…俺もまだまだだな…

自惚れていた訳では無い。しかし、それなりに実力はついた…と思っていた自分が、まだまだ足元にも及ばない事を、肌で実感させられていた。

…負けていられないっ！

「スイッチ！」

ガゼットの声に反射的に飛び出し、モンスターの群れの眼前へ飛び出していった。

右払い…右袈裟…左逆袈裟…身体を返し体重を載せた右払い…

一時も止まる事もなく続く剣閃の嵐に、ゴブリン達がなす術もなく次々と倒れていく。

ガゼットとカイトのコンビは、大量に現れるゴブリンの群れに怯む事なく立ち向かい、その殆どを斃していった。

それは本来ならば恐れを知らず、只々殺戮のみを本能に宿すモンスター達にさえ恐怖を覚えさせる程のものだった。

今まで尽きる事なく湧いて出て来たゴブリンの姿も無く、気がつけばそれまでとは少し違う、ひらけた広場のような場所に出ていた。

…嫌な予感がしやがる…ここに来るまでのゴブリンの数とい…この場所…前に来た時は無かった筈だ…。

油断無く辺りを伺っていたガゼットは、奥にあった通路から、何か得体の知れないモノが出てくる気配に気がついた。

「ゲルルルルルルルル……」

不気味な唸り声と共に姿を表したソレは、

黒い毛皮に全身を覆われた獣、ブラックウルフと、今までのゴブリ
ンとは遥かに違う、軽く見上げるような体躯を持った…恐らくこの
巢の主だろう…赤い体表をもったオーガの姿だった！

…ッ！？何故こんな所に、オーガやブラックウルフが！？
しかもありゃあ…希少種じゃねえかッ！！

舌打ちをしつつ油断無く辺りの気配を伺うガゼット。だが、
それ以上のモンスターの存在は無いようだ。しかしそれでも…この
2体を同時に相手するのは、今の状況では無謀でしかなかった。

…どうする…ここは一旦引くか…？

この情報はギルドに届ける必要がある。何故、この大陸中央
部…それも、迷宮やダンジョンでもない場所に、オーガやブラック
ウルフがいるのか…それは、ギルドの総力をあげても調べる必要
のある事柄だ。

…しかし…簡単には帰らせてくれそうにねえな…こりゃ…。

既に敵は臨戦体制を整えており、今すぐにも飛びかかって来そうだった。せめてカイトだけでも逃がさなきゃならんか？

「逃げヨウとしても無駄だ。お前達八多くノ同胞を殺シ過ぎタ」

…！！喋れるのか！？このオーガは！？

ガゼットは、モンスターが発した言葉に戦慄を覚えていた。言葉を発する事が出来るモンスターは、西の外れの小大陸にしかない筈。先程からのあり得ない事態の連続に、ガゼットの思考は混乱の極みに達していた。

どうする…どうするどうする…！？

しかし、そんなガゼットを落ち着かせる暇を、モンスターが与える筈も無く、「やレ」という一言と共に、ブラックウルフが襲いかかって来た！

ウルフと言う名に恥じぬ、圧倒的な速度で襲いかかって来たソレは、一瞬の躊躇も無く隙が出来たガゼットの首筋へと飛びかかった！

風のように飛びかかって来るブラックウルフを呆然と…しかし、なんとか反撃しようと身体が勝手に動くのを、まるで他人事のように

考えながら、まるでスローモーションになったかのような視界で敵の姿を見つめる。

間に合わない…

長年の戦士としての勘が、その先の自分の姿を予見の様に映し出す。

なんとか…カイトだけでも…

しかし、次の瞬間。

唐突に横合いから飛び出して来た人影が、飛びかかって来たウルフに剣一閃！

その剣線はブラックウルフの身体に吸い込まれるように奔っっていく、獣の身体を真横に切り裂いていた！

その衝撃から吹き飛ばされ、地に転がった身体に尚も力を入れ、立ち上がるうとするブラックウルフに、そのまま駆け寄り頭蓋へと垂直に剣を振り下ろすカイト。

その剣は見事にブラックウルフの頭を二つに両断し、獣の息を止めていた。

「大丈夫ですか！？ガゼットさん！！」

かけられた言葉にふっと我に帰り、こちらを見やるカイトの姿を確かめ、ふっ…と自嘲的に唇を歪める。

「まさかお前に助けられるとはな…！随分腕を上げやがった」

素直に口をついた言葉は、ガゼットの本心からの言葉だった。手馴れた冒険者でも簡単に餌食にするブラックウルフを、一頭だけ横合いからの隙をついたとしても、こつもあつさり倒すとは…俺も歳かね…。

「ふム、あいつをこつも簡単二退けルトは。中々ノ腕をモツようだな」

「てめえに褒められてもカイトは嬉しくないだろうさ。…カイト！気合入れるよ！こいつは今までのとはちいっと違うぜ…！」

尚も不敵に呟くオーガに視線を向け、
気概を取り戻したガゼ
ットは、猛然と飛びかかっていった！

仄暗い廃坑の奥で（後書き）

ダンジョン、迷宮やその他の違いは後日作中にて説明しますですは
い。

死闘の果てに

既にこの巢へと入り込んでからの位経っただろうか：幾重にも襲いかかるゴブリンの群れに立ち向かい、そしてこの赤い体表を持ったオーガと切り結んでからは、もう半刻は経とうかとしている。

今までに無い強敵だった。

片手に握る大柄の斧を自在に降り、果ての無い体力と、口から火を吹くバケモノは、ガゼットと前後で挟み込んで戦うカイトの攻撃をもともせず、今尚衰えぬ勢いで苛烈に攻め立てていた。

「カイト！来るぞ！」

既に攻撃のパターンは出尽くしているようだ。最初は幾度も身体をかすり、それだけで恐ろしい衝撃を与えて来た攻撃も、癖さえわかればかわす事は出来る。

オーガの巨体から繰り出された斧による全周囲の薙ぎ払いをバックステップでかわしながら、攻撃に転じるための隙を伺っていた。

流石のオーガも挟み込まれてしまえば一人づつとしか戦えず、片方を攻めようとすればもう片方が…と、入れ替わり立ち替わ

り攻めて来るカイト達には苛立ちを隠せないようだ。

次に、大降りの攻撃が出た時がチャンス…と、オーガの攻撃をかわしながら、カイトとガゼットは無言の意思疎通を行いその時を待つ。

するとしびれを切らしたのか、オーガが一際大きな雄叫びをあげた！

「グウウオオオオオオオオオオ！！！！」

そのあまりの大音量につい足を止めたカイトに、降りかぶられた拳思い切り叩きつけられた！

思い切り身体を弾き飛ばされたカイト。
辛うじてガードはしたものの、左腕はもう使い物にならないだろう、有らぬ方向に曲がっていた。

激痛に耐えながら、全力で振り下ろして来たオーガの斧を、なんとか剣で受け流す！

全身に響く重たい攻撃をなんとかいなしたカイトは、その瞬間に隠せない程身体をよろめかせた！

今しかないっ！！！！

「ガゼットさん！」

「任せろ！！」

ガゼットは背後から襲いかかると、オーガの身体を支える足へと剣を閃かせた！

その一撃は、体制を崩し片足で支えていたオーガのその足を、見事に両断していた。

支えを失い、その激痛に叫ぶオーガ。

それでも反撃しようと斧を振りかぶり、カイトめがけて振り下ろす！
それを間一髪転がって躲したカイトは、片足をついたオーガのその身体を膝から駆け上がり、上から首に剣を突き刺した！

痛みにもがいたオーガの身体からカイトは身を投げ出し、握りしめ続けた剣をその力に逆らう事無く回転させた。

車輪のように回転した刃は、その強靱な筋肉に守られた首を、綺麗に斬り落とし、オーガの息の根を止めるのだった。

あのオーガとの死闘からどれ位時間が経っただろうか。動けぬカイトを置いて、奥の通路へと進んだガゼットは、その奥から、捉えられた女性を連れて戻って来た。

自身のみで繁殖する事が叶わぬゴブリンは、他種族の雌を捉え、それに子を産ませる。この女性も例外では無く、意識の半ばを狂気に侵されながら、辛うじて生き残っていたようだ。

…既に他の女性達は狂気に侵され、意思を手放してしまっていたようで、そのまま生きて行くよりも…と、ガゼットが眠らせたようだ。

なんとか歩けるようになったカイトとその女性を連れ、屋敷へと戻ったガゼットは、主人へと事の顛末を話し、女性の保護を訴えたようだ。

一度ゴブリンに捉えられた者は、意識の有無に関わらず迫害される。いつ魔性を産むかわからないのでは無理もないが…。

その訴えを聞き入れたアベルは女性を屋敷で保護すると共に、ガゼットへとギルドへの報告、巢に舞い戻る残党の殲滅を言い渡すのだった。

カイトの傷が治り切るまではそれから2月程かかり、その間毎日顔を出したアリシアとルビアに、延々と巢での話を強要されていたのは笑い話ではない。

最も、最初に訪れた時には、ルビアはその怪我の酷さに顔を青白く染め、1月程の間ずっとつきつきりで看病していたのだが。

…何故その許可が降りたのかは、今でも謎だ。

怪我が治ったカイトは、此度の功績で晴れて奴隷から解放され、一人の使用人としてアベルに雇われる事となった。

そのおかげで、また更にアリシアからの勧誘が酷くなったのは…笑い話にはできない…。

死闘の果てに（後書き）

いやー、やっと奴隷から昇格ですね。

まともなバトルって事でだいぶノリノリで書いてしまいました。

…頭蓋骨叩き割っちゃったのはいき過ぎたかもしれません…

旅立ちの日

あれからだいぶ時が立ち、アリシアが城に戻る時がきた。

散々帰らぬ！と駄々を捏ね、屋敷の皆を困らせた姫君は、それでも来た時から様々な物を吸収し、得ていた様で、いざ帰る日になればきちんと身なりを整え馬車に乗っていた。

…マリアさんも心底ホツとしている様だ。

一度はカイトへの勧誘も落ち着いたものの、帰る10日も前になるとまた再燃した様で、カイトにひっきりなしに「一緒に来い」と連呼していた様だが、「妹を探しに行くから、一緒に行く事は出来ない」と伝えると、諦めた様だった。

そう、妹の居場所がわかったのだ。

あの日村から逃れたリース達は、その後バラバラになりながらも色々な街を転々とし、今は隣国の外れにある街で暮らしているらしい。

奴隷になる事も無く、飢えてしまつ事も無くここまで生きていてくれた。

それだけで有難かった。

それがわかつた2月前程から、カイトはアベルに許可を貰い、妹の元へ赴く事になっていた。場合によっては、連れて帰ってきてもいい…との事だ。

そして、どうせ出るなら途中まで一緒に来ればいい…との有難い？言葉により、カイトは途中の街まで載せてもらう事になっている。護衛としての意味もある様だ。

そして今カイトは、屋敷の門の前で、別れの挨拶をしている。

「まあ、お前の事だからなんとかやっていくだろうが、気を付けていけよ」

「ガゼットさんも、無茶はしないで、俺が帰って来る時には子供の顔、見せてくださいなね」

そう言ってくれたガゼットの隣には、あの日助けた女性…
シエラというらしい…がいた。

あの恐怖の日々に手を差し伸べてくれたガゼットに好意を抱き、ようやく日常に戻れた彼女は、ガゼットと共に生きる事を選んだらしい。

「はっはっは、言われてますね、ガゼット」

「うるせえフィリップ！てめえこそ早く相手見つける！」

「はあ…まさかあなたにそんな事を言われる事になるとは…」

確実に自分の方が先に家庭を築くだろうと考えていたフィリップには、だいぶショックだったらしい。…ある意味納得してしまっような…。

「まあ、それはともかく、カイトくん、これを持っていきなさい」

フィリップが差し出したのは、手の要所を覆う硬いレザーの手袋だった。

「解放の印があるとは言え、奴隷の印は目立ちます。これをつけて行けば、無用の争いに巻き込まれる事もないでしょう」

そこまで考えていなかったカイトは、礼を言うと早速身につける事にした。指の先が出る様に作られたそれは、長時間はめてい

ても気にならず、湿気がこもる事が無いように考えられたもので、剣の感覚にも影響を及ぼさないものだった。

「それからこれは、アベル様からだ。旅の資金にするといい」

どうしても外せない用事が出来た…といい今この場所に居ないアベルからは、革袋いっぱい詰まったエルム金貨やレルム銀貨だった。

「どうしても受け取りたくないと言うのであれば、いずれ帰ってきた時にでも返せばいい。今は素直に受け取っておきなさい」

「…はい。アベル様にも、よろしくお伝えください」

「…で、お前からは何も無いのかい？ガゼット？」

「俺はもう渡してある」

少し意地悪げに笑いながら見るフィリップからの視線を受け流し、そう言ったガゼットが向けた視線の先…そう、今カイトが腰に履いている剣は、あの日ガゼットと共に潰した、モンスターの巣にあったものだった。

あの後、生き残りが居ないか調べに行ったガゼットが、洞窟の中にあつた略奪品の中に埋もれていたこの剣を整備し、持たせてくれたのだ。

只の鉄で出来た剣とはまるで違う、精緻な装飾を施されたそれは、今はもうほとんど居ない種族…エルフのみが創り出せる、精霊の祝福を得た聖銀鋼^{ミスリル}という物質で出来た物らしい。鋼よりも強

く、鋼よりも軽いと言う物で作られたソレが何故あそこにあつたかはわからないが、あつても必要の無いガゼットが持っていても仕方が無いから…と、カイトに渡してくれたのだ。

準備を整えたカイトは、見送りにきてくれた人たちに別れを告げ、馬車に乗り込んだ。

いずれまた帰ってこよう。

進み出した馬車から屋敷を眺め、カイトはそう心に決めるのだった。

「のう、このまま一旦城まで来ぬか？」

…前途は多難らしい。

旅立ちの日（後書き）

…はい、これで一章が終わりとなります。

今の所PCが手元に無いので章設定ができないんですがね・・・

兎に角、やっとこ旅に出たカイト君は、これから妹に会うべく旅を続けます。

そこには、どんな試練が待ち受けるのでしょうか…

アリシアはカイトを手にする事が出来るのでしょうか…

ルビアの恋や如何に…

これからもどうぞ、蒼穹の竜騎士を、応援よろしく願います。

まだ竜の字も出てないけどね…

人物紹介【1章終了時点】（前書き）

ある程度区切りがついたので、人物設定詳細を載せておきます。

作中で説明が足りなかった部分や、疑問がこれで解消されればなあ…なんて考えています。

順番等は特に意味はありませんのであしからず…。

もしも気になり事などがあれば、メッセージや感想で聞かせていただければ幸いです。

先の長い話になりそうですが、最後までお付き合い頂ければ…と思います。

どうかこれからも、蒼穹の竜騎士をよろしくお願いします。

人物紹介【1章終了時点】

カイト

普通の農村生まれの平凡な少年だったが、盗賊に村を襲われ変えるべき場所を失う。狩りが得意で弓とダガーを使う。

アリシア・ローゼスハイト

ローゼスハイト皇国代2皇女。年齢の割によく回る頭を持つが、偏った知識と経験から、突拍子もない行動をする。しかし、決して単純なのではなく、きちんと考えた上での行動であるから、父皇からの期待は高い。決して親バカではない…はず

マリア・ルピス

幼少の頃からアリシアの侍従を務めてきた。そのお陰か、アリシアにも姉の様に懐かれ、本人も妹の様に可愛がっている。

普段はきちんとした従卒として振る舞うものの、アリシアと2人きりになった時や、余りにおイタが過ぎた時等は、遠慮無い物言いと態度で彼女を諫める。

アリシアが心底恐るただ1人の人。

ルビア・ルビニア

アリシアの侍従の1人。見習いとして入っている。仕事も手を抜かず、仕事に対しての姿勢も良かったため、将来を期待されてアリシアの元に送られたが、かえって緊張してミスばかりしている。

カイトに命を救われて憧れにも似た感情を抱き、アリシアと一緒に彼の後をつけ回し…もとい、追いかけている。

リース

カイトの妹。いつも自分達のために頑張っている兄が大好き。自分達のために平気で無茶をする兄をなんとかしたいと考えている。盗賊に村を襲われ、一緒に逃げ出した人達と一緒に街へと移り住む事になる。

デイルケン

奴隷商人。街道沿いで行き倒れていたカイトを拾い、奴隷として売り出す。

ベルク

隻腕の元冒険者。カイトの村の前で倒れていた所を助けられ、以後その村に住み着く。元はそこそこの名手な冒険者だったようだが、隻腕となった事で冒険者である事をやめることとなる。盗賊の襲撃から皆を守る為に立ち向かい、行方不明となる。

トリス

カイトの幼馴染。両親を早くになくすが、病弱な妹を守る為に、父が残した畑を使い農業をして暮らしていた。盗賊の襲撃時、妹やリース等が弱いものを連れ村を脱出。以後街で暮らし始める。

フィリップ

ガイランド家の使用人。家でも1・2を争う程優秀な人物。

ガゼット

ガイランド家の使用人。元冒険者。かなりの腕前を持つが、何故冒険者を辞めたのか、アベル家で働いているのかは不明。カイトを気に入りに入り、武術を仕込む。

アベル・ガイランド

ガイランド家6代目党首。武術の才はからきしだが、穩健であり、巧みな政治手腕と商人としての才を持つ。ディルケンとは何かしらつながりがあるようだか…

人物紹介【1章終了時点】（後書き）

尚、2章以降に増えた人物は、その章終了後に纏めて載せるつもりです。

皆様の感想、応援のメッセージ等、お待ちしております。

設定資料

通過単位

エルム金貨 > レルム銀貨 > ルム銅貨
1エルム 10万円 ≡ 100レルム
1レルム 1000円 ≡ 100ルム
1ルム 10円

距離、サイズ

ガリルム > ガリム > リルム > リム
1ガリルム ≡ 180km
1ガリム ≡ 1.8km
1リルム ≡ 1m80
1リム ≡ 18cm

重さ

ガグルム > ドグルム > グルム
ガグルム ≡ 100kg
ドグルム ≡ 1kg
グルム ≡ 10g

ローゼスハイト皇国

豊かな土壌に恵まれた、大陸中央部に位置する大国。歴史は

既に1000年を数えており、その力は未だ衰えを見せていない。

国の基本方針として、他国不干渉の中立を保っている事もあり、今のところ至って平穩でもある。

しかし最近、なにやら魔物の活動が活発であるとの噂があり、不穏な空気が渦巻いて来ている。

デイスカタル王国

ローゼスハイトの西に位置し、そこそこ豊かな土壌と、西方とローゼスハイトとの交易を一手に担っている事から、商業王国として名を馳せている。

そのおかげか、街にはあらゆる国からの情報が行き来し、ある意味での不緩衝地帯となっている。

最近は中枢での腐敗が広がり、貴族達の軋轢に民が苦しんでいる…といわれているが…

閑話・とある皇女と侍女の日常（前書き）

シリアスパートが落ち着いた所で、今回は

何気ない？日常を書いてみました。あまり本編では触れてない、彼女達の生活をお楽しみ下さい。

閑話・とある皇女と侍女の日常

「街に行くぞ！」

「いけません」

その一声が出たのは、ガイランド家に着いて2週間後の事だった。

むしろ、2週間良く持ったな…と言いたい。

恐らくは、かの奴隷の事が頭にあつたからだろうか。城を出る前から、着いたらすぐに街に出ると豪語して…その度に私に却下されていたが…いた彼女が、2週間もの間、その事に触れなかつたのは意外でもあつた。

…しかし、だからといって許可は出来ない。まだ街の者にとつても、「皇女が来た」という事実は大きな意味を持っている。…不貞を働くような輩は居ないだろうが、それでも、街にることですぐに住民の話題の的になる事は確かだった。

だがそれで退くアリシアではない。幼少の頃から世話をしていた私にはわかる。

このままではお屋敷を抜け出しかねない…

流石にそれはまずい。だから、マリアは幾つかの約束を守らせる事で、彼女に街に出る許可を与えたのだった。

「ふ…ふ…ふ…ふ…ふ…ふ…ふ…ふ…」

ついに来た…ついに…憧れの街へと…ッ！

城から出られず、本で読む話から想像するだけだったこの“街”と言つ物に憧れてから幾星霜…妾はついに！ここに来たのであるッ！

ああ…きっとこの街の中では、きっと商人の娘と農家の息子が恋に落ちていたり、悪人に連れ去られそうになった娘が冒険者に助けられたり…夜な夜な大商人が裏で悪事をおこなっていたりするんだろっなあ…。

「うへ…うへへへへ…」

「汚いわよアイリス。よだねが垂れているわ」

…おっといかん…

「教えてくださってありがとうございますおねえさま！」

…そうっ！今の私はとある商家の末娘！お姉様が街へ買い付けに行くのを、無理矢理ついて来た箱入り娘なのだ！

普段使わない敬語を、侍従のマリアへ使い、付き従っているのもそれが理由。これが、アリシアが街に出る為の条件だった。

もちろんそれだけではない。

街での自由行動は無く、買った品物…：ガイランド家で使う食材等で、すぐに持ち帰る物は優先的に持つとし、街にいる間はマリアという言葉に絶対に従う事。

それら全てに承諾したからこそ、アリシアはここに来れたのだ。

だからわらわは…いや、私は、街を楽しむ為に…この全ての任務を全うする所存であるっ！

「おねえさま、はやくいきましょ？はやくかえらないと、お父様が心配なされるわ！」

気合を新たにアリシアは、“自分が完璧と思う妹像”を守る為に、演技を再開した。

「ぐ…ぬぬぬ…お…重い…ですわ…おねえさま…！」
「我慢しなさい。それが約束だったはずよ？」

アリシアの両手には、先程買ったイモの山がぶら下がっていた。

買い物袋に入っているイモの数は50個程。普段から家事の手伝いなどをしていれば、そう重い物ではないが、10歳の、それも、今まで手伝いなどを何もしてこなかったアリシアには、拷問に近い重さだった。

…マリアの方は、それよりもさらに100個程多く詰まった箱を運んでいた訳だが。

何故…何故あも軽々と大量のイモを運べるのか…ッ!? ヤツは…ヤツは化け物かッ!?

勿論、幼い頃から家事の手伝いをし、年齢も今19ともなるうマリアには、イモの10ドグルム程度などは造作も無く運べるものだった。

だが、その3分の1程でも必死になっているアリシアにとってみれば化け物と感ずいてもおかしくはない…マリアは少なくとも、街を歩けばそのほとんどの男が振り向く程、可憐な容姿をしているのだから。

「私は化け物じゃありません」

「ヒッ!?!」

何故わかったのだろうか…頭の中の化け物の単語に反応したマリアの視線は絶対零度…見た物全てを凍らせる、絶対零度の輝きを持って、アリシアを襲った。

「ぜ…ぜぜぜんぜんそそんなことおおおおもってもないですわーい、いやだなあおねえさまっいたら…お…お…おほほほほほ」

…あ…あぶねえ…あの目はマジだった…あの目を見た瞬間わかった…あれは、やる時の目だった…。

必死に体の震えを止め、体に鞭打ち、手の中にある物を、只々必死に、馬車庫へと運ぶアリシアは、二度とマリアに軽率な言葉は…頭の中でも使わない…そう心に決めた。

…ふう…まったくしょうがない子。

前を必死に歩く、その体には不釣り合いな重さの袋を必死に運ぶ少女に、マリアは呆れつつ…しかし、どこか優しい姉そのものの表情を浮かべながら、後について行った。

普段であればこんな事は絶対にさせない。しかし、今日は良い機会だと、普通の市民が送る生活を体験させようと思っていたのだ。

彼女が思う普通とは、明らかに違っだろう。でも、これが“普通の日常”なのだ。

家の手伝いをし、街の人と顔を合わせ、他愛無い話に興じ、家族と共に平和な日常を送る。

その一端でも触れさせてあげたい。

それはマリアの願いでもあった。

マリアの家は、それなりに大きな貴族の家でもある。しかし、貴族の子女は普通王家の侍従にはならない。

それが何故マリアはアリシアの侍従となったのか。

それは、彼女の生まれに問題があったからだ。

彼女は、言ってしまえば、ルピス家の主人の“妾の子”だった。

マリアの母は当時、ルピス家に使える侍従の一人だった。ごく普通の家庭に産まれたルピスの母は、類稀な容姿と、穏やかな気性を持っていた結果、ルピス家の主人の目に留まり、侍従として召抱えられ、愛人となった。

しかし、あくまで妾は妾であり、公然として人前に出る事も無く、ただ侍従として働き続けた。彼女の優しい人柄のおかげか、屋敷の者にも邪険にされず、幸せな日々を送ってもいた。

しかし、やはり正妻はいい気分では無かったのであろう。事あるごとに嫌味をいい、それは、彼女が身ごもる事で限度を超えた。

今迄の生活を送る為には、お腹の子をおろすしかない。

しかし、愛した人の子をおろすことは出来ず、母は家を出た。
とっし。

そしてマリアを産み、ただ一人で育て続けたのだ。

しかしその苦勞は並大抵では無く、子育ての傍、仕事をしていた母は、体を崩し亡くなってしまった。

そしてそれを知った父が、マリアを呼び寄せたのだった。

その頃には、既に正妻も亡くなっており…あまり体は丈夫では無かつたらしい…その正妻との間に産まれた3人の子供と一緒に暮らしていた父は、ずっと母の事を気にかけていたそうだ。何度も援助を申し入れたが、断られたらしい。

それから過ごした数年間は、とても幸せだった。

しかしその後、マリアが13になった時に父が亡くなってよ
り、兄妹の間で争いが耐えなかった。

家督を次いだ長男と次男が争い、それに長女が油を注ぐ。

そんな中、妾との間に産まれたマリアは、邪魔でしか無かつた。

居心地の悪い家での生活を送っていたマリアは、以前母がいた頃よくして貰ったという一人の女性から、私の所にこないか…と言っ誘いをもらった。

私は今、皇城にいる、4歳の末姫の乳母をしている。まがいにりにも貴族であるマリアがする仕事ではないかもしれないが、ここにいるよりは大分マシだろう。ここでは云われ無い中傷を受ける事も無いからと。

そして、マリアはその誘いを受ける事にした。

兄達はそんなマリアを蔑んだ目で見るとはあっても、それ以上何かを言う事も無かった。厄介者が一人消えた事だけを喜んでいたのである。

それからマリアは、アリシアの事を実の妹の様に可愛がっている。

大きくなってからは侍従としての態度を崩さず接しているが、たまにいきすぎた時は容赦の無い言葉が出てしまうが…。

アリシアはアリシアで、やはり自分の事を姉と思って親しん

でくれている様でもあるし、今日みたいな日もたまにはいいか…等
と考えてもいるが。

しかし…

さつきから度々声をかけて来るこの男達は何とかならないの
だろうか？

軽々しく声をかけ、「そんな物置いて一緒にお茶でも…」何
て行つて来る男もいる始末。

ほら…また一人…。

「こんにちは！今お仕事中？よかったら終わってからでも俺……ヒッ……!?？」

…目を合わせただけで逃げ帰る位なら来なければいいのに…

はぁ…と溜息をつきつつ、せめてあの奴隷位の度胸は無いと…等と考えてしまった。

あの奴隷…カイトと言ったか…姫様を襲おうとした魔物を一刃で斬り伏せたと聞いたが…それだけの度胸があれば、せめて話し位は聞いたのに…。

最も、仕事をしていない時だけ…等と考えながら、いけないいけない、奴隷相手にこんな事考えるなんて、毒され過ぎたかしら…等と自嘲してしまふ。

今はただ、“妹と姉”である事を楽しもう。気分を変え、馬車庫へと向かいながら、後は何があったかしら？と考え込むマリアだった。

閑話・とある皇女と侍女の日常（後書き）

はい、今回はマリア嬢の過去話がメインでしたね…日常エッセンスは少なめでした？

もっと欲しかったですかね…。

毎回書き下ろしでやってるもので、ざーっと頭の中で書きたい物を整理した後、流れに任せて書いてしまう物で…スイマセン。

いずれ落ち着いた時に整理をするつもりですが、たまにはこんな話をのっけていこうかと思っています。

ご意見ご感想などお待ちしております。

旅路の途中で（前書き）

日間ランキング23位

40000PV

5000ユニークアクセス

お気に入り250件到達しました！

感謝してもしきれません。

これからもどうぞよろしく願います！

旅路の途中で

今日もカイトは森へはいつていた。

馬車の旅で何故森にはいる必要があるのか…それは、野営の時の食料確保に為である。

しかし、何故こつも野営を繰り返すのか…それは未だにわからなかった。

この旅の…と言うか、馬車の主の目的は、“皇女に旅を通じて世間の理等を理解させ、市民の暮らしを理解させること”であるのは、以前聞いていた。

…が、わざわざ危険な野営をする必要は無く、毎回必ず側を通るそれなりの規模の街の宿に泊まればいいのではないか？

と聞いたら、「伝統です」と簡潔に答えられてしまった。

…どんな伝統なんだ…と言うか、来た時はどうしていたんだろ…。

疑問は尽きない。

しかし、野営をしないという選択肢は無いらしく、それならば自分の食事にも関わる。

こうしてカイトは、屋敷を出てから幾度目かの狩りに訪れるのだった。

「この森はお屋敷の周りとは少し雰囲気が違うな……」。

今回はいった場所は、どうもはいり慣れた“いつもの森”とは違い、感じる気配が少なかった。

と言っても、皆無と言う訳では無く、小動物などの姿もあったが、どうにも生き物全てが“息を殺して”いる感じがするのだ。

何か強い存在がいるのだろうか？

流石にモンスターが現れた時とは違っが、それに近い気配を感じ、気を引き締めたカイト。

すると前方に獲物がいるような気配を感じた。

気配を殺して近付いたカイト。その先にいたのは、数頭のピツクルだった。

丸々と肥えた身体を持ったそれは、普段森では無く、崖の側等に生息する、大きな角を持った生き物だった。

この辺りでは珍しい生き物で、それなりに食べがいのある獲物との遭遇に心を弾ませたカイトはが弓を構えた瞬間、横合いの茂みから何かが飛び出してきた！

その生き物はピツクルの中の一際大きな一体に飛びかかると、その首筋に鋭い牙を突き立てた。

それは明らかに致命傷になる物だったが、噛み付かれたピツクルは、仲間を逃がそうとしたのか尚抵抗し、無理矢理に身体を暴れさせると噛み付いていた物を振り払った。

一頭だけ残ったそのピツクルは、もう命は長くない事を悟っているのか、自分にその傷をつけた者にも一矢報いようとその身体を走らせ、意外と小柄だった相手へと体当たりした。

しかし、それで力尽きたのか、体当たりをくらい横転した相手の上へと覆いかぶさる様に倒れていく。

その小柄な身体ではひとたまりもないようで、下敷きにさ

れた相手はギャンギャン！と喚くと、なんとか下から抜け出そうともがいている。

だが、力の抜けた身体の重みは半端では無く、どうにも脱出出来ぬようで、次第にその動きを小さな物にしていった。

…んー…可哀想だから助けてあげてもいいけど…助けて襲われてもなあ…。

などと迷っていると、とうとう力尽きたのか、暴れていた四肢が動かなくなってしまった。

見捨てるのもなんだか忍びない…と、奇妙な感覚に囚われて、倒れたピックルの身体をどかすと、その下にあったのは、紛れも無く先日その身体を打ち倒した、ブラックウルフの身体に良く似た、子犬の様なものだった。

倒れたピックルとその子犬…おそらく、あのブラックウルフの子供ではないだろうか…を持って帰還したカイトは、獲物を調理

係へと渡し…今日の係りはマリアだった…ウルフの傷に薬を塗っていた。

といっても、死にかけたピクルの体当たりだったので、特に外傷は無く、下敷にされた時に負った打撲が精々で、後は重みに耐え兼ねて意識を失っただけだったろうから、これといった治療もせず、目を覚ますのを待っていただけだったが。

しかし、自分は何故この子を助けたのだろうか？

自分が殺した相手の子を助けたからといって、感謝されるはずもないだろう。むしろ、その事を知れば、襲いかかって来る確率の方が高い。

しかし…それでも何故か、見捨てる事が出来なかった。

甘いのかな…いや、甘いんだろうな…。

「まーったくお前ってやつは…そんなんじゃ、いくつ命があっても足りねえぞ？」

…という、ガゼットの声を聞いた気がした。

…と、どうやら狼の子供が目を覚ましたようだ。

微かに緊張し、腰の剣にそっと手を添わせる。

…にいちちゃんがたすけてくれたの？

頭の中に直接響いたようなその声にぎよっとし、カイトは自分を見上げる無垢な瞳を見返した。

「…今のは…お前か…？」

…うん、そうだよ。

会話が通じた事に驚くも、嬉しそうに尻尾をぱたぱたと降るその生き物をどうしたものかと考える。

「お前は、ひとり…なのか？」

…おとうさんをおいにかけてきたんだけど、どこにいったかわからなくなったの。

なんとなくひとり…という言葉を使い尋ねたカイトは、ある意味予想道理な言葉を聞き、少し気を落としてしまった。

…やはり、あいつの子か…。

…なんかね、へんなにんげんがすんでたもりにやってきてね、おとうさんをつれてっちゃったの。

悲しそうに目を伏せるその子犬…子狼？…の姿に、心がいたんでしまう。

話を聞いていると、どうやらブラックウルフが作っていたファームに、ある日突然黒いローブを羽織った人間が現れ、リーダーであったブラックウルフ…おとうさんへと魔法を使い、その身体を操ってファームの狼を倒した後、そのまま何処かへと連れ去ったようだ。

ただ一人、物陰に隠れて生き残ったこの子は、いなくなった父親の匂いを頼りに後をつけ、ここまできたらしい。

カイトはその事実に関心を痛めた。

心無い人間に住処を荒らされ、その後を必死に追いかける長い距離を旅し、たどり着いた先で死にかけ、命を救われた相手は、追いかけた相手の仇だった。

なんとやるせない事か…。

カイト自身は、あの時の事に後悔は無い。あの時倒さねば、やられていたのは自分の方かもしれなかったからだ。だが、それでも…と思わざるを得ない。

…ねえ、おにいちゃんは、おとうさんのことしらない？

無垢に見上げるその身に、果たして真実を教えるべきか…。

必死に考えた拳句、カイトはその全てを話す事にした。

自分たちを襲った魔物、その中に父の姿があり、災いをもたらすものとして討った事を。

…最初、その狼は知っているという事実に嬉しそうだった。しかし、死んだ、殺したのは自分だ。と言った所で、悲しみ、次いで怒りの表情を浮かべた。

無理も無いだろうと思う。

だが、それをした理由、戦った時の事を話すうちに、どうやら怒りの感情は薄れていったようだった。

…おとうさんは、わるいことしたの？

「いや…俺は、君のお父さんが何をしたのかは知らない。ただ、村や街の人を襲っていたモンスターの巢にいて、俺達に襲いかかってきた。その事しか知らない」

子犬は、そう…という返事と共に、その身体を伏せ、悲しそうに目を閉じた。

カイトは飛びかかって来なかった事に安堵しつつ、しかしその姿を見てもいられず、「少し外に出る。後でご飯を持って来るから、それまでにどうするか決めておいてくれ」と言い残し、馬車から降りた。

何時の間にか薄暗くなっていた外の風景に、より一層なんとも言われぬ悲しみに身を包まれたまま、みんなの元へと歩いていった。

夕食を済ませたカイトは、あの子犬の分の器を持ち、馬車へと向かった。

馬車の前で深呼吸をし、覚悟を決めて扉を開けると、そこには…只々餌を待ち望む子犬の姿があった。

…それっ！たべていいのっ！？

…どうやら、外の香りが車内にまで届いていたらしい。しかし飛び出していく訳にもいかず、只々持ってきてくれるのを待っていたらしい。

食べてる姿はただの子犬なだけどなあ…

その可愛らしい姿と、昼間の姿とのギャップに苦笑しつつ、食べ終わるのを待った。

「どうするか、決めたか？」

いっぱいだけでは足りなかったらしく、その後何度かお代わりをして満足したのか、目の前でだらけている子犬に今後の事を聞いて見た。

…もし、戦いたいと言われれば…受けるしか無いよな…。

正直戦いたいとは思わないし、若干の愛着を持ちつつもある。しかし、彼がそれを望むなら…。

だが、その心配は杞憂だったようだ。

目の前の子犬は姿勢を正し、連れていってくれと、願い出たのだ。

…曰く…ここから戻ろうにも元の巢は遠い。そして、戻った所ですでに仲間はいない。

他のファームに混ざろうにも、他所から来た自分を受け入れないだろうし、このままここに居ても、おそらく人間の討伐隊が組まれ、襲われるだろうと。

そこまでは、カイトの想像どおりでもあった。

しかし、何故自分と？と聞くと、

…要は、父親を殺した責任をとって、自分を養え…という事だった。

しかし、その瞳に宿るものは少し様子が違つようだった。

…おそらく、もう一人でいるのは嫌なんだろう。捨てないでくれ…そんな心の内を聞いた気がした。

「…わかった。正し、一緒に来るなら、他の人間がいる時は、普通の犬の振りをするんだ。お前は世間ではモンスターと言われる存在。ばれたら、俺の力だけでは守れないから」

…わかった。

こうして、旅の仲間が1人？増える事になった。

後に聞いた話では、こうやって話せるのは、来たの方にある“黒狼の森”という場所に住む一族だけであり、他の場所に住む物達には出来ないらしいという事。

そして、そこに住む者達は黒狼と呼ばれ、他の種より長命で力があり、その中でも一際大きな黒狼達の長は黒狼王と呼ばれ、一種の信仰の様な対象にもなっているとの事だった。

おそらくあの時倒せたのは、隙をついた事も大きかったが、操られて意識を失っていた事が大きかったのだろう。

操られずに戦っていたら負けていたかもしれない…と思いつつ、そうであれば戦ってもいなかっただかもしれないな…とも思うの

であった。

それから暫く、一緒に旅をする事になった黒狼…クルトと名付けた…の姿を一目みるなり

「きゃー！もふもふー！！」

といきなり叫び飛びかかったルビアやアリシアにこねくり回され、「たすけてー」と涙ながらに訴えて来た事は…うん、目を逸らす事にした。

…おかげで足を噛まれたけど。

旅路の途中で（後書き）

って事で、旅の仲間が増えました。

マスコットキャラの登場です！もふもふ！

彼には今後のカイト君を癒すという大きな大きな役割があります。

当然読者様を癒してくれるような事も期待しつつ…成長を祈り…小さいままのがいいのか…？

メロキヤラン（前書き）

日間ランキング9位！

まさかの一桁台へのランクインで、嬉しいやら恐れ多いやら

…。

ほんとうにありがとうございます！

メロキヤラン

「兄様！あっちに行きましょう！」

今日はとある用事で街へと出向いている。

本来なら遠回りになる道だったから、その前で別れよう…
と思っていたんだが、アリシアの「わらわも行く！」という鶴の
声で何故か順路まで変更し、このメロキヤランの街へと来ていた。

「ほら！あっちにある屋台で何か食べましょうよ！お兄様！」

どうやら帰るまでもできるだけいろんな物を見せたいという
事らしいが…。

「おいしいーあ、あっちの露店もよさげですわ！」

…何故…こうなったんだろう…。

以前から、街に行く時は身分を隠し、一緒に行く人間の妹として同行していた“彼女”。

今回も当たり前のようにマリアさんやルビアなんかと一緒にいくと思っていたんだけど……だけ…。

「なにをしておるカイト！あまり不自然にするとわらわが変装している事がわかってしまうではないか！」

「いや…そもそも俺と姫様が兄妹というのは無理が…何をいう！完璧な変装ではないか！そして姫と言うでない！……はい…。」

どうやらこのお姫様は自分が完璧な妹を演じられていると思っ
っているようだ…。

…無理がある…！

余りにも平凡な容姿をし、くすんだ茶色の髪と目を持つカイトと、丁寧に整えられた豪華な金髪と、将来有望な容姿を持つアリスアとでは、どうあがいても“使用人とお嬢様”が限度だ…。

なんでこんな組み合わせにしたんだよう…

「あ、あつちに面白そうな物が！」

「ま、まってください」敬語！「…待つんだアイリス…」

ああ…これじゃ用事が済ませられない…。

途方に暮れるカイトとそれを連れ回すアイリス。しかしその2人は、“わがままな妹に振り回される優しい兄”の図に、意外なほどピツタリとはまっていた事には気がついてないカイトだった。

…ギー…バタン…

「誰かいらつしゃいませんか…?」

あの後なんとかアリシアをなだめすかし、最初の目的地である
“ロンドン武具店”へとついた。

「いらつしゃい。何かお探しかね?」

奥から出て来た禿頭の大柄な男が、意外と…といったら失礼
だろうか?愛想のいい笑顔で迎えてくれた。

「ちよつとこれを見て欲しいんですが…」

そう言つてカイトは、背負っていた弓を差し出した。

「ふむ…しつかりした作りの、いい弓だね…だが、だいぶ傷んで
きているようだ」

「はい…なので、修理か、新しい弓が欲しくて来たんですが…」

新しい弓の調達。それがカイトの目的の一つだった。

今まで使っていた弓は、いくつかの素材を組み合わせた合成^{コンパウンド}
弓^{・ボウ}で、小柄な割りに高い威力と耐久力を持つ、なかなかの物だった。

使い勝手を良く、ずっと整備しながら使つて来たが、もう使
い始めて3年程…自分が使う前は他の誰かが使っていたようだし、
いい加減寿命なのではないだろうか?と、最近思い始めていた所だ
った。

「んー…確かに、もう芯材に細かい亀裂が入っているようだ。サイ

ズもどうやら少し小さめのようにだし、新しい物に変えてみては？」「
…そうですか…わかりました」

屋敷に務めてからずっとお世話になっていた物だったが、しようがない。愛着は持っているが、武器の質は命に関わる。

「とりあえず、そこにある弓をためしてみないか？」

飾り棚の弓を指す店主。

その、同じ合成弓の並ぶ列から、一番使いやすそうなサイズの物を手にとって試しに引いてみる。

「ん…ちよつと軽い…かな…」

「ほう…それが軽いか。なら、その上の物はどうだい？」

今度は強さはちょうどいいが、サイズが大き過ぎるような気がした。

よく森に入るカイトには、もっと取り回しのきく小さな物がよかった。

そうカイトが告げると、「もしかしたらアレがちょうどいいかもしれない」と言い、裏をゴソゴソと漁りだした。

これじゃない、あれでもない、ぶつぶつ言いながら探していた店主が持って来たのは、一見何の変哲もない、無骨な弓だった。

大きさは以前使っていた物よりちょっと大きいだろうか？だが、それくらいしか違いがないようなその弓を手に取り、試しに軽く引いてみる。

…！…お、重い…！

まるで今まで使っていた物の2倍近くかかるその弦の負荷に驚きつつ、「流石にこれは使えない…！」と店主に言つと、

「いいから、最後まで引いてみてくれないか？」

と言われた。不思議に思いつつも、言われた通りに普段の様に引き絞つていく…と、

…！引けば引くだけ軽くなっていく！？

おおよその弓は、引けば引くだけ徐々に…ではあるが、重みが増していく。それはより遠くに、強い威力で飛ばす為に加重をかけるのだから当たり前前の事もしれない。

引けば引く程重くなり、限界に達した所で狙いを定め、射る。

それが弓だ。

だが、引ける限界の力で引いてしまうと、引き絞った場所で保つ事が難しくなり、狙いを定める事もまた困難となる。

だから殆どの人は、自分に余裕のできる加減の力で引ける弓を選ぶのだが…

「驚いたな、そこ迄綺麗に引けるなんてな」

「これは、なんですか？」

笑ながらこちらを見る店主に驚きつつ聞いてみる。

「それはな、最新式の複合弓で、知り合いの工房と作ったもんだ。より強い力で引けないか…という考えに沿って作った物で…まあ、発想の転換に近いな。引けばそれだけ軽くなる。だから、強い力で引かなければならない弓でも扱える様になる」

だがなあ…と、困った様に苦笑いをする店主。

「発想は良かった。予算も…まあ、研究を重ねればそれなりに安くなっていっただろう。だが、どれだけ考えても、それ以上軽く引けるような弓を作れなかったんだ。構造の問題で、それが限界だったんだよ」

…確かに、強い力を、特に最初の引き始めで使う。

ずっと弓を使って来た人間なら、何とか引ける位だが、慣れてない人間や、力だけで引こうとすれば、使える様な物では無いのかも知れない。

「新しい材料なんかがあればなんとかなるかもしれないが、そんなものそう簡単に見つかるわけでもないしな。だから開発もそれが出来た所で終わってしまったんだ。その弓は、記念にとっておいたんだよ」

なるほど…と頷き、しかしもつたいないな…と考えてしまった。おそらく研究を続ければ、世に出回る殆どの弓がこれにとって変わるかもしれないのに…。

「で…どうする？そこそこ値が張る弓だが…今の所理想に一番近いんじゃないか？」

「お幾らでしょうか…？」

「エルム金貨5枚…は欲しいとこだが…特別に3枚にしたいてやるよ。いつ迄も置いててもしょうがないしな」

3枚…買えない訳ではないけれど…簡単に出すには考えられる金額だ…。

どうしようか…と悩んでいると、じつと後ろで話を聞いていたアリシアが、そっと服の裾を引いてきた。

ん？と、顔を寄せると「わらわが払ってやろうか…？」と、何かを企んでいる様な顔で言ってきた。

「いや…そんな事をしてもらう訳には…」

「よい。いいものと巡り合えた時には、金を惜しまず手に入れる事だ。それが、自分の懐が痛まぬのであれば余計にな」

でも…とまだ渋るカイトに、彼女はニヤリと笑うと告げる。

「それに、ただ買ってやる訳でもない。お主には金貨3枚を貸しておく。いずれ、旅を終えたら城に返しにこい。それまでの貸しだ」

そう言つと、一方的に話を切り上げ店主と向き合つアリスア。

「その弓、金貨10枚で買い取ろう。その代わり、研究を再開し、その成果を王城へと報告する事。出来るか？」

などと言つアリスア。あれ？金額違つ…と言つか、変装は？などと呆気にとられているカイト。

どうやら店主の方も、いきなり金貨10枚出すと言い、城に…などと言い出した少女に疑いを持っている様だ。

「お嬢ちゃん、そいつは流石に冗談が過ぎるつてもんじゃないか？」
「冗談ではない。ほれ、金貨もこの通り出そう」

腰の袋から金貨を取り出しカウンターへと出すアリスア。
何時の間に…なんて考えていると、「マリアが小遣いとして持たせてくれた」
とこっさり話してくれた。

…額がおかしくくないですかマリアさん…。

金貨を調べ、本物だとわかると、違う意味で疑いぶかそうにこちらを見てくる。

「…お前さんら、何もんだ？」
「ふむ…わらわはアリスア。アリスア・ローゼスハイト。第2皇女
といえはわかるか？」

その言葉に驚愕し、まじまじと見てくる店主。

「…確かに、今はこの近くで就学なさっていると聞いたが…本物か…?」

「わざわざわらわを騙るような物好きもおらんじやろうが、気になるならば、城へ問いただせばよかるう。金貨も本物とわかつたんじやろつ?」

「いや、いい、わかつた。…いや、わかりました。そのお申し出、受け入れましょう。研究を再開し、その結果を後日城へお届けします」

うむ、よろしくたのむ。と、言い、行くぞ!とカイトを促し店を出るアリシア。

こうしてカイトは、新たな相棒と、アリシアに大きな借りができる事になった。

「くふふ…これでカイトはわらわの…」

…何だか取り返しのつかない事をしてしまったようだが…。

メロキヤラン（後書き）

今回出てきた弓の構造は、現代のアーチェリーに使われているコンパウンドボウ：複合弓ですね。と、似たような構造を持っています。

まあ、たどり着く先は自然と似通ってくるものと思っていますし。

気になる方は、アーチェリーWikipediaに載っているので読んで見るのもいいかも？

W i k i 面白いよW i k i 。

あW i k i p e d i a とかあるし。

身分証明（前書き）

ちよこちよここと誤字等を直していきたいと思えます。

見つけられましたら、メッセージや感想などでお知らせください。

身分証明

「はい、これでカイト様の登録は完了しました。お疲れ様でした！」

その言葉と共に、一枚の薄い鉄の板が差し出される。

「これが、世界共通となる、カイト様の身分証となります。これがある限り、いつ、いかなる場所、いかなる時でも、そのご自身の身分に相応した対応が取られる事となります。

このギルド票は、いかなる手段によっても偽造する事は出来ず、表記事項に干渉する事も出来ません。

よって、犯罪歴等も全て表記される事となりますので、十分ご注意ください。

何かしら変化があった場合は全て自動で更新されます。ですが、生死確認の意味も込めて、最低一年毎に更新に来ていただく事となります。

これが無い場合、亡くなったものとされ、登録が抹消される事もありますので、こちらもご注意ください。

尚、登録がお済みの方には、各地にあるギルドにて、お仕事の斡旋もさせていただきます。

詳しくは、お渡しした”冒険者ノ心得”をお読みください。

何かご質問などはございますか？」

「いえ、ありません」

「それでは、良い人生を」

晴れて冒険者としての登録が終わったカイトは、長時間の検査や説明で強張った身体を伸ばし、深々とため息をついた。

これでようやくちゃんとした身分証が出来たな。

先ほど渡されたギルド票を片手に、懸案事項の一つが晴れた事に安堵していた。

おおよそこの世界において、身分を証明するものは無いと言える。

全ては誰か、他人が証明する事によってでしか、それを保証するものは無い。

しかし、ただ一つの例外がこの“ギルド票”だ。

各地に点在する精霊の力を借り、その力によって情報を集め、このギルド票に記載する。

“他者”となる人間の代わりに“精霊”がその身分を保証するというものだ。

細かい技術などはわからないが、“そういうもの”として受け入れられている。

それは、この世界全てにおいて有効であるとされている。

だから本来国からの通行許可証が必要な越境等も、これがあれば問題無く通り抜けられるのだ。

犯罪歴が無い限りは…だが。

隣国へ赴くにあたって、どうしても必要なこれを貰うために、カイトはこうしてギルドへと来ていたのだった。

さて…出来たらこれはどうにかしておきたかったんだけど…。

ちらと見た見たギルド票には、こう書いてあった。

職業：狩人

経歴：元奴隷 黒狼の主

まあ、今更言った所でしょうがないのか。

考えてもしようがないと気分を変え、背後で待っていたアリシアに声をかける。

「ごめん、お待たせ」

「気にしないで。面白かったから」

「じゃあ行こうか」

「依頼は受けていかないの？」

不思議そうに聞くアリシア。

「今回は越境の為の身分証名として貰いに来ただけだからね。お金が必要になったらまた来るさ」

それに納得したアリシアは、そう。と言うと、おとなしく後をついて来た。

早めに帰る理由の一つが、これ以上アリシアと兄妹ごっこを続ける事が出来そうに無いから…という事を、あえて伏せておいたのは間違いじゃ無いはずだ。

「おまえさん、すこし時間はあるかね？」

買い物と用事を済ませ、馬車に戻るかとアリシアを連れ街の中央広場から離れた時、物陰に居た老婆に声をかけられた。

目深にフードをかぶり、あまり日が当たらぬ場所に居たその老婆は、どう見ても怪しい人間にしか見えず、アリシアと顔を見合わせたカイトは、用事があるから…と立ち去ろうとした。

「なに、そう時間はかからぬ。あまり良くない気がまとわりついてるように見えたものでな、占ってやろうと思っておったのだが…」

その言葉に反応したのはアリシアだった。あまり占い等に縁のなかったアリシアは、

「いいじゃありませんかお兄様」とカイトをたきつけると、彼を老婆の所へと引っ張っていつてしまった。

正直こつこつというのは好きじゃ無いんだけど…

あまり運命とかいった類を信じていないカイトには、占いを聞きたいとは思っていなかった。

起こる事は全て必然で、必ず理由があるとは思っているが、それをどんな道具を使ったとしても、人間が未来を見通せるとは思っていない。

何かしらの指針には使えるかもしれないが、それを意識しすぎて、かえって悪い事が起きる可能性もある。

だが、楽しそうに話を聞いているアリシアの気分には水をさすつもりもない。

仕方ない、今日位は付き合おうか…と考え、アリシアの話が終わるのを待った。

「んん…お前さんはなかなか面白い人生を送るようじゃな。随分と良い所に住んでおるようじゃが…ふむ…嫁いだ後も幸せに暮らせるようじゃ。少し、時期は遅くなるかもしれぬがな」

「ふむふむ…子供は何人できるかのう？」

「それはその時まで楽しみにしておれ。それも人生の楽しみの一つじゃぞ？」

「むう…わかった…」

アリシアは特に目立って悪い事も言われてないようだ。ならば、きつと幸せな人生を送れるのだろうか。

「さて…お前さんじゃな」

そう言つと、老婆は背後に置いていた袋の中から、小さな箱を取り出した。

「それは…？」

「竜符…という物じゃ。お前さんの場合は占うのも大変そうじゃから」

そう言って開けた箱の中には、幾つかの小さな骨の欠片が入っていた。

「これはな、古き竜がその命を終えた後、長い年月をかけて骨になったものじゃ。その骨の中でも魂が宿ると言われる場所に最も近い骨を砕き作られた、竜の魔力が宿るもの…と言われておる」

そう言うのと老婆は、その骨を全て取り出し、同じく袋から取り出した紙の上に広げた。

「よく、見ておれ」

そして老婆がぶつぶつと何事か唱え始めると、その竜符とやらが一斉に震え始めた！

カタカタと小刻みに揺れるもの、コロコロと勝手に転がりだすもの、かと思えば、一瞬震えたかと思えばその後微動だにしない物もあった。

余りにも不思議なその光景にアリシアと2人魅入っていると、動きを止めたいいくつかの竜符がキラキラと輝き始めた。

「むむむ…まだ揺れておる物も多い…それだけ、多様な未来があると言う事か…そしてこの光は…」

それを見ながらさらにぶつぶつと呟くと、今度はそれぞれが集まりだし、やがて一枚の板となった。

老婆は、所々光っているその板を手に持つと、両手で優しく包み込み目を閉じた。

しばらくじつとしていた老婆だったが、ふっと体の力を抜き目を開いてカイトを見て来た。

その余りに澄んだ瞳に、己の全てを見透かされる様な、得体のしれない怖気を味わいながら待っていたカイトに、老婆がぼつぽつと喋り始めた。

「随分…数奇な…運命を持つようじゃな…」

今はまだ…その入り口にさえ…立っておらぬ…。

…しかし…その時は…すぐにやってくる…気を抜くでない…お主の決めた…様々な事が…様々な者の…定めを変えるじゃろ…。

迷った時は…神樹の森に…力欲しくば…北の名を忘れられし祠へと…向かうが良い…。

忘れるな…お主には…聖霊の加護が宿っておる…」

不思議な雰囲気に含まれながら、老婆が紡いだ言葉に心を震わせられつつ、カイトはその言葉を深く心に刻み込んだ。

「…こんなに疲れたのは久方振りじゃ…。もし、この先特に急ぎでないなら、国境を越える前に、北にある迷宮を訪れるがよかるう。きつとお主の助けとなる筈じゃ」

そう言って、老婆は荷物を纏め去っていった。「また会う事

になるじやうじう。それまで元気でな…」と、言い残し…。

身分証明（後書き）

謎の老婆と出会ったカイトは、不思議な体験をしました。

いずれまた出てくる老婆ですが、今はまだその存在は謎であり、やがて忘れるカイトですが、ふとした時に竜符のお告げが出てくる事となります。

別れた青年の行く先は（前書き）

修正をしている時に気がついたんですが、
どうもスペースを開けている部分が上手く表示されていないみたい
ですね……。

いずれPCで編集する際に手直しをする事になりますが、今暫くお
待ちください。。。

別れた青年の行く先は

もう既にその姿が見えなくなっている。

一年間、命を救われた出会いから、たった一年。

あつという間だったな……と思う反面、いろいろな事があり過ぎて、とても一年間で起こった事とは信じられない様な気分にもなる。

馬車から見た、もう遠く離れ、姿の見えない青年を思い、少しだけアリシアはため息をついた。

……キキッ！

「ん……お前も寂しいか？よく懐いていたものな……」

腕の中にいる小さな生き物ールリムは、まるで慰める様にアリシアの頬に体を寄せ、こすりつけて来た。

馬車から飛び出たこの子を、何時の間にかカイトが拾って来て、世話をしていたと聞かされた時は驚いた。

おかげで自分よりも懐いてしまったカイトの元から離れようとせず、向こうにいた間の世話は、ほぼカイトに任せてしまった。た。

しかし、危険な場所に向かう事もあるかもしれないし、元々

の飼い主だったんだから……と言われ、今はこうしてアリシアの手の中に収まっている。

「変な事に首を突っ込んで、怪我などするでないぞ……。お前はいずれ、わらわの元に仕えるのじゃからな……」

もう一度、姿の見えない彼方にいるカイトを思い、その無事を祈った。

身分証となる物を手に入れたカイトは、あまり帰る時期が遅れるのも問題だろうと切り出し、アリシア達と別れる事にした。

実際は、あの老婆が言っていた事が気になったからではあるが……。

もし自分が一緒に居続ければ、自分を待ち受ける“数奇な運命”とやらに巻き込まれてしまつかもしれない……と思ったからだ。

未だに占いを信じようとは思っていなかったが、あの老婆の

言葉は信じた方が良さそうだ、と思わせる何かがあった。

と、いつても、神樹の森や、名も忘れられてしまった祠など分かる筈もなく、いずれ何か必要な時に出て来るだろう……などと軽く考えてはいたが。

…カイト、これからどうするの？

「西に行くよ」

話しかけてきたクルトにそう告げると、カイトは歩き始めた。

これから途方もない距離を旅する事となる青年が、初めてその一歩を踏み出した瞬間だった。

あれから真っ直ぐ西へと歩き、日が落ちる前には野営の準

備を……と、繰り返し、カイト達は西の国境付近へと辿り着いていた。

クルトと一緒にであれば簡単に獲物が見つかり、新たに手に入れた弓の調子も良く、食料に事欠かなかったカイト達は、今日も大きなボアを1頭仕留め、その肉が焼けるのを待っていた。

すこし干し肉にしておこうかな……などと考えながら肉の火加減を見ていたカイト。

クルトはよだれを垂らしながら必死に我慢している。

どうやら拾った日にあげたシチューで、調理された物の方が美味しいと理解した様だが、目の前にある大きな肉の塊に我慢ができそうにないらしい……。

既に焼けていた部位を先に切り取り差し出すと、キラキラした目で飛びかかってきた。

「俺の手ごと食べないでくれよ」

苦笑しつつそう告げても返事をしない。

どうやら肉に夢中になっている様だ。

こうして見るとただの子犬にしか見えないんだけどなあ……

などと思いつつ、焼けた肉を口に運び、カイトはふと夜空を見上げた。

——漆黒の夜空に瞬く無数の星。

妹も、この星空の下暮らしている。

もうすぐ会いに行くから……。

そんな風に夜空を見上げる視界の隅で、黒い影がよぎったが、カイトが気がつく事はなかった。

別れた青年の行く先は（後書き）

知人からの要望もあり、アリシアの過ごした1年間は、サイドストーリーとして後日掲載する予定です。

他にも、あの時なにしてたのー？なんて疑問等がありましたらお送り下さい。

出来るだけご要望に添いたいと思っています。

国境の砦を護るモノ

更に二日程歩いたカイトは、国境にある砦へと辿り着いた。

この砦の先にある川を越えたら、隣国デイスカタル王国だ。

首都が山と山の谷間に位置し、堅牢な守備を誇るこの王国は、ローゼスハイト皇国と長い間和平を結び、商人達の行き来も活発だった。

お陰でこの砦も、戦闘に使われたのは随分昔で、今は通行を取り締まるだけの物になっているようだが……。

しかし、今こうしてギルド票を出し、出国手続きを行っていたカイトから見ても、砦の衛兵は一切気分が緩みが無いようだった。

本来戦いが必要ならば、すぐに緩んでしまうのが人の心だというのに、よく鍛えられているんだなーと考えていると、窓の外を一頭の獣が飛び去って行った。

まるで、大きな蜥蜴とかけに翼を生やしたようなその生き物は、その背に人を乗せ、まるでその大空を我が住処……と言わんばかりに堂々と、大きな翼を羽ばたき東の皇都の方へと飛び去って行った。

もしかしてあれはー！。

「多分、想像している物とは違いますよ」

かけられた声に驚き、その内容にまた驚いた。

「でも、あの姿はどう見てもー」

「あれは、飛竜と呼ばれる存在ではなく、フライリガード……と呼ばれる物です。」

それなりの知性がありますが、“竜種”と呼べる程の力はありません」

優しく微笑むその男ー国境警備軍のウォルコットは、「よく間違えられるですよねえ」と、ぱりぱりと頭をかき、苦笑いした。

「他国にも竜騎士団と呼ばれ、実際の呼称も語呂がいいからかそのまま使われていますが、本来は“近衛空士団”と呼ばれるものなんですよ。」

毎年同じような勘違いをして、竜騎士になれると意気込んでやってくる若者も後を絶たず、名前を変えたらどうかと何度も言うてるんですがねえ」

「そう……なんですか」

だが、それでもあの姿は衝撃的だろう。

いくらフライリガードです。と言われても、見た目はそのまま

竜としか言えないのだから。

「力だつて全然違うんですよ？」

本物の竜種は言葉も使えるようですし、伝承の通りに口から火を吹く事も出来るとか。

体だつてあの何倍も大きい……。

しかし、実際に見た事がなければ、間違つのも無理は無い事なのかもしれません」

そう言つて、窓の外、かのフライリザードが飛び去つた方を見ながらそう呟いた彼。

その言葉から、どうしても気になったカイトは聞いてみた。

実際にみた事があるんですか……と。

それを聞いたウォルコットは苦笑しながら、「そんな機会があれば、きっと今頃はそのお腹の中ですよ」と言っていたが。

手続きを終え、出国審査証を渡されたカイトは砦を出て、反対にある砦へと向かった。

如何に友好国と言えど、有事の際にはここから戦争が始まる事もある。そのため、相対する砦が存在し、そこが同時に入国審査をする場所にもなっていた。

川にかかる橋を渡り、反対側の砦へとやってきたカイトは、先ほどと同じくギルド票と、貰った出国審査証を渡し、審査を待っていた。

と言つても、出国審査が済めば入国審査をする必要もそれ程ない為、大して時間はかからない……

ピーーーーーッ！！

突然甲高い音が響き渡り、俄かに砦の内部が騒がしくなった。

と、先ほどギルド票等を渡した兵士が部屋へ入って来て、「暫くは砦を出ないように」と告げる。

「何かあったんですか？」

「川上からモンスターと思しき一段が来ているそうだ。」

そこまで多いわけではないが、足が速く、すぐにこちらに着くかもしれない。

何かあったらいけないから、皆からは出ないでくれ」

取り合えず入国審査は終わりだよ……と、入国許可証を手渡され、そのまま部屋から出る。

外の様子が知りたいな。

皆内にあふれる人の合間を縫って、入口側の窓から川の方を見る。

遠くに何か黒い影が見え隠れしている。あれがモンスターだろうか？

もっとよく見えるように……と体を伸ばす。目を凝らした先に見えたモノは、アースリザードと呼ばれる、地を走る蜥蜴とかけだった。

先程空を飛んでいたフライリザードが、空に適した姿をとつたモノならば、今度のアースリザードは、地へと適した体を持つモンスターだった。

大きく発達した後脚を持つその蜥蜴とかけは、恐ろしいスピードで刻々と皆へと近付いていた。

すると、皇国側の砦から、10人程の騎士達が、馬に乗って出て来た。どうやら迎え撃つようだ。

そしてカイト気がつく。

どうやらまだ、橋の上に人が残っている事に。

国境の砦を護るモノ（後書き）

今回出て来たフライリザード。

それを飼育し、育て、共に戦うのが、

こつこつこのえくつしだん
皇国近衛空士団

です。

ですが、他国では竜騎士団として広まっていますね。

なので今後、竜騎士がいない筈の世界で竜騎士が集う軍団がある――
ーと言う矛盾が出て来ますが、ご容赦下さい。

あくまでこの世界での竜騎士は、カイトのみとなります。

暫くの間は。

対峙する時（前書き）

戦闘シーンが入ります。

グロ系嫌いな方は飛ばして下さい。

対峙する時

どうやら警備兵が迎え撃つ決心をしたのは、その橋の上にいる人達をモンスターから守るためのようだ。

アースリザードは走る速度は速いが、空を飛べず砦の中にはいる事ができない為、本来は砦の上から弓などで撃って倒すのだと言う。

近くの兵士に尋ねるとそう答えられた。

まるでよくある事のように言う。それだけ相手をし慣れていくという事が。

だが、今回は守るべき人が外にいる為に、外で対峙せねばならない。

微かに緊張が伝わる砦だったが、その心配を余所に、アースリザードに近付いた兵士達は、見事な連携でモンスターを取り囲み、次々と討ち取っていった。

同じように見ていた人々が歓声を上げる中、その中の一人が悲鳴をあげて指差した。

その先……川の上流、今兵士達が戦っている反対岸、つまり此方側の岸にもアースリザードが現れ、橋を目指してひた走ってい

ただ。

更に、今戦っている方の中から1体、包囲を抜けると、そのまま橋に駆け寄り始める。

虚を突かれた兵士達は、囲んでいるモンスターで手一杯で動けないようだ。

徐々に距離が詰まるモンスターと橋。

これから起こるであろう光景を想像したカイトは、いても経つてもいらねずに、砦から飛び出した！

「ほら、もう少しだ！頑張れ！」

御者台に乗って、馬車を引く馬に声をかけながら、必死に反対側の砦を目指す。

あの時、周りから聞こえたどよめきに驚き、その後で躊躇さ
えしなれば、こんな事には……！

それは、丁度橋の中間あたりにいた時だった。

それ程大きくない橋で、いつも渡り慣れていた場所。

周りを囲む人波にうっとおしさを感じながらも、ここさえ越
えてしまえばもう後は街道を行くだけ……と自分を励まし、家族が
乗る馬車をゆつくりと、反対岸の砦へと進ませていた。

そんな矢先、橋を渡っていた男の一人が、今までいた岸を指
差し何事が叫んだ。

なんとなくその先を見た私は、その光景に驚き、恐怖した。

恐ろしいモンスターの集団が、こちらに向け一心不乱に駆け
てきていたのだ。

砦には警備兵もいて、たまに現れるこのモンスターの対処に
も慣れている。

そう知ってはいても、砦の外にいる私達にとっては大した意味
もない。

馬車に乗っている家族がモンスターに襲われる……その事を

考えると、気が狂いそうになった。

周囲の人間も同じなのか、その姿を見るなり悲鳴を上げ、次々に走り出した。

しかし、その向かう方向がバラバラだったのが、災いした。

走り出す人波は、自分のいる馬車を囲み、向かいの砦と背後の向かう人とでこった返した。

それでも、そんなに沢山の人がいたわけではなかったから、直ぐに人波は薄まり、馬車を進める余裕もできた。

簡単に進む方向を変えられない馬車は、背後に向かう為には捨てなければいけない。

しかし、それを躊躇した私は、家族を乗せたまま正面の砦に向かう事を決めたのだ。

他に数人いた周りの人間を一緒に乗せ、正面の砦へと走らせる。

だが、人が増えたせいか思う程の速度が出ない。

苛立つ私は、顔を上げ、気がついた。

向かいの岸の上流にも、モンスターの姿がある事に。

おそらく、橋の中程にいた人達も、その姿を見つけたのだろう。こちらに走っていた足を止め、踵を返そうとしていた。

「そのまま進め！思い切り走るんだ！！」

おそらく背後のリザードの姿は見えていない。こちらのリザード達よりも近い場所にいる、そちらのほうが厄介だった。

砦から飛び出したカイトは、背負っていた弓を持ち、矢筒から矢を何本か引き出した。

まだ射程には届いていない。

橋にいた集団にむけて走りながら、丁度橋に辿り着いた反対岸のリザードを睨む。

やはりこちらのほうが速い！

カイトの支持に従い、走り出した人達。先頭にいる馬車の陰に入らない様に位置を調整したカイトは、限界まで弓を引き絞り、リザードが射程にはいると同時に、撃ち出した！

まっすぐに打ち出された矢は、正面のリザードへ一直線に飛ぶ！

しかしリザードは、その矢を横に一步踏み出す事で避け、尚も走り近付いてきた。

一矢で仕留めるつもりは無い。

カイトはそのまま、二の矢三の矢を放ち、リザードを牽制する。

と、背後の砦から兵士が現れ、向かってきていた上流からの一団と対峙した。

今しか無い！

全速力で駆け抜ける人と馬車に当たらぬ様にと撃っていた矢を、確実に仕留める為の撃ち方へ変える。

「クルト！」

カイトが叫ぶと同時に、背後に控えていた黒狼が、人波をよけリザードへ飛びかかった！

間近に迫った人間へ爪をたてようとしていたリザードは、いきなり現れた黒狼に驚き、咄嗟に身をかわ躲す！

体制が崩れたそのすきを逃さず、8割程に引き絞られた弓から、十分な威力を持った矢が飛び出し、狙い違わずリザードの眉間へと突き刺さった！

息を止めたりザードから目を離し、上流の一団へと目を向ける。

どうやら此方の様子が気になるらしく、あくまで時間稼ぎの様に戦っている。

漏れ出て来るかもしれない。

そう判断したカイトは、橋の上の人達に「早く皆へ！」と声を掛けるなり、兵士達の方へ駆け出した！

同じく駆け出したクルトが追い抜き、今まさに兵士の一人に牙を突き立てようとしていたりザードに飛びかかった！

その首筋へ牙をつきたて、体ごとねじる様に回転する。

突然噛み付かれたりザードは叫び声を上げ、同時に襲いかかった激痛に身をよじらせた。

鋭く尖った牙を突き立てられ、さらにねじる様に動きを加えた結果、噛み付かれた部分をえぐる様に切り取られ、その痛みに耐えかねるように地へとその身を投げ出したりザード。

近寄るなり腰の剣を抜き、躊躇せずその頭蓋へと突き刺す！

驚いている兵士を尻目に、カイトクルトは次の獲物へと向け
て飛び出した！

その後カイトの加勢もあり持ち直した警備兵達は、巧みな連携で徐々にリザードの数を削り、ついに殲滅し終えた。

辺りには、首が飛んだり、頭が割られたり、心臓を貫かれたりしている死体が散らばっていた。

「いや……助かったよ。君がいてくれなかったらどうなっていた事か」

礼を言ってくる兵士に「いや、できる事をしただけで」と返したカイトは、剣からモンスターの体液を拭い取り、その刃を見つ

めた。

この剣を使って初めてまともな戦闘をしたけれど、凄い切れ味だった……。

鉄の鎧に匹敵すると言われるアースリザードの鱗をいとも容易く斬り裂いたこの剣。

これが無ければこうも簡単にはいかなかっただろうな……。

この剣を持たせてくれたガゼットに、心の中で礼を言いつつ、カイトは皆へと引き返した。

対峙する時（後書き）

たまに来るモンスターの襲撃。

そのおかげで、練度と士気の低下が防がれているんですね。
国境警備兵が強い理由は、常に最前線にある事だからでしょうか。

勝利の美酒の味は（前書き）

一度書いた文が手違いで消えてしまっ

「うおおおおおおお」

とか一人でバカやってみました。

うん、バックアップは大切ですね。。。

勝利の美酒の味は

戦い終え、皆に戻ったカイトを待っていたのは、歓声と感謝の嵐だった。

皆の中に居た者は、皆一様に橋の上に残っていた者達を心配していたようだ。

同じ様に旅をしている者達だ。いつ自分が同じ様な危機に遭うかわからない。

だからこそ、皆自分の事の様に考えていたようだった。

助けられた者達も、ある程度の覚悟はしていた筈だった。

しかし、想像の中の出来事だったものが、実際に目の前に降りかかってくれば話が違う。

ここで命を落としていたかもしれない。

それを身近に感じた彼等は、目に涙を浮かべ、己が助かった事を、神と、救ってくれた恩人に感謝していたのだった。

その気持ちを一身に受けていたカイトだったが、素直に誇れるものではなかった。

カイトとしては、見ていられずに飛び出しただけで、後から警備兵達が来てくれなければ一人で全員を助けられたかわからない。

むしろ、自分も命を落としていたかもしれない。

そう思ったからこそ、皆に、

「自分の力だけで助けられた訳じゃありません。警備兵の皆さんが来てくださったから、自分も生きて帰ってこられたんです」

だから、自分ではなく、普段からここを守っている人達に感謝を言ってください。

しかし、それを謙遜と受け取った皆は、あれだけの腕を持つのにそれを誇らないとは！と、さらに評価を上げ、尚カイトを褒め称えるのであった。

その雰囲気流石に居心地が悪くなってきたカイトは、急ぎの用があるからとその場を離れようとした。

しかし、それを告げようとした所、背後の扉が開き、外から警備兵の面々が砦の中に入って来た。

それぞれの防具を血で染めて帰ってきた警備兵の者達は、砦の中にいた人達と同じ様にカイトを褒め称えた。

だが、旅人達はその威容に一瞬気圧され、静まり返る。

すると、それを察したのか、一人の男が歩み出て来た。

「君が居てくれて助かったよ。」

おかげで誰一人と犠牲を出す事なく、モンスターを討伐できた。

きつと反対岸の面々もそう思っているだろう。

「この国境を守る人間全ての代表として、感謝の言葉を言わせて貰うよ。ありがとう。」

そう言うと彼は、兜を脱ぎ頭を下げた。

その姿にカイトは動揺してしまう。

いくら助けたとはいえ、騎士ともなればその身分は平民の遙か上。

その騎士様が、平民の自分に頭を下げたのだ。

「や、やめてください。俺は、自分に出来る事をしただけです。皆さんがいなければ自分も死んでいたかもしれない」

だから顔を上げてくださいと、お願いするカイト。

「いや、謙遜する事はない。君とその子狼の連携は見事だった。

どうだろう、もし急ぎの用件がなければ、一緒に夕食でも？ーいよければ、後ろにいる方々もどうでしょうか？今回危険な目にあわせ

たお詫び……という事で」

すると、さっきまで腰が引けていた連中も皆、ただ飯が食え
るとあって口々に賛成の声を上げた。

更に、先程馬車に乗っていた人だろうか？ 恰幅のいい男性が、
「なら私も助けていただいたお礼に半分持ちましょう」と言つと、
場は歓声に包まれた。

「……で、どうかな？」

と聞いてくる兵士。

この雰囲気では断るほうが勇気がある。

実際に“急ぎ”では無い為、断る口実も無いまま、カイトは
流されるように酒宴へと向かうのだった。

「それでは、見事モンスターを退けたカイト君と警備兵の勇姿に敬
意を表して——乾杯——！」

その掛け声と共に始まった酒宴は、その夜遅くまで続いた。

あの後交代を終えた兵士達に連れられて来た、酒場兼宿で、テーブルいっぱいに広げられたご馳走と酒を前に、皆生きている喜びを分かち合おう！と、ひたすら飲み、食べた。

最初、その食事等の豪華さに驚き、大丈夫なんですか？と聞いたカイトだったが、

「大丈夫。半分はあの商人が出していてくれるし、こちらはあの時一緒に出ていた兵士達全員で割っているから」

と、抜け目なく言われた言葉に、それならとカイトも席に着き、目の前のご馳走に舌鼓を打った。

兵士達と挨拶を交わし、親交を深めたカイトだったが、良かったらうちの騎士団に入らないか？との勧誘には首を縦に降らなかった。

それを見た兵士達は残念そうだったが、気が変わったらいつでも来てくれよ！と彼の肩を叩き、酒を進めてくるのであった。

生まれて始めて飲んだ酒の味に酔ったカイトは流されるまま酒杯を傾け、何時の間にか意識を失い、気がついたのは翌朝、ベッドの上だった。

「ん……ここ……は……あ、あ、ああ……」

目を覚まし、体を起こそうとしたカイトは、ガンガン鳴る頭と、クラクラと回る視界に驚き、そのまま体をベッドへと戻した。

人生で初めてたらふく酒を飲み、初めての二日酔いを経験したカイトは、しばらく酒は飲まなくていいかも……。と、その頭痛に顔をしかめ、再び目をつむった。

なんとか昼頃に起き出したカイトだったが、その頃には既に粗方の者が宿を出た後だった。

その事を聞いた宿の女将は、「昨夜はなかなかいい飲みっぷりだったね。皆、お前さんにありがとうと伝えてくれと言って出て行ったよ」と教えてくれた。

なんか食べるかい？と聞いた女将に、食欲が無いと伝えると、笑いながらこれでも飲んどきな、と水を出してくれた。

……水がこんなに美味しく感じたのは、奴隷商から売られて

すぐのあの時以来だ。

そしてふと、あの時一緒に馬車に乗っていた面々を思い出し、
少しだけ気分が重くなつた。

奴隷として売られた者が3年生きれる割合は、およそ3分の
1。

おそらくほとんどの人間が生きていないだろう。

彼等は、こつやつて酒を飲み、二日酔いになって、

それを笑い合いながら、水を飲む。

それをきつと経験せぬまま、逝ってしまったのだろう。

それを考え、やるせない様な気持ちになりながらグラスを
傾けていると、

「そう言えば、昨日の隊長さんが話があるとか言っていたよ。起き
たら宿舎に来てくれってさ」

それを聞き、きつと待たせているだろうと思つたカイトは、
慌ててクルトを連れ、兵舎へと向かうのだった。

勝利の美酒の味は（後書き）

いずれ加筆修正を加えると思いますが、

現状勢いに任せて書いたような文章で、所々変な表現があるかと思
います。

「おいおいこれは……」

と言う様な場所があれば、感想等でご指摘ください。

ついでに、良い所悪い所も書いて頂ければ幸いです。

……一言だけ突っ込まれても、返す言葉に困ってしまうので。。
サーセン。。。

一人で旅をするよりも

出来るだけ急いで……まだ少しフラフラしていたから走れない……カイトが宿舎に着くと、待っていたのだろう。昨日の兵士が立っていた。

「やあ！体のほうはもう大丈夫かい？」

「……おかげさまで、色々と面白い体験をさせて頂きました」

ニヤニヤとこちらを見てくる、この頭痛の元凶を、少しだけ恨めしそうに睨む。

そう、この頭痛は、昨日この兵士……ローツが、散々カイトに酒を飲ませてきたからだった。

カイトが初めて酒を飲むと聞いた彼は、酒場にあつた多種多様な酒をカイトの前に次々と出してきたのだ。

奢りだから、お礼だからと散々言われれば誰でも断りにくくなる。

その結果が今日のコレだ。

「まあまあ……普段は飲めない様な物も飲めたんだし、役得と思わなければ。で、用件と言うのはだ……」

悪びれもなくそう言ったローツは、西門前にある馬車庫の方を見た。

つられる様にそつちを見たカイトは、そこに見知った人間の姿を見つける。

それは、昨日助けた商人だった。

「昨日飲んでた時に話してたんだがな、お前さんと彼等の向かう場所とは同じらしい。で、折角だから一緒にいかないか……と言われた所で、君が潰れてしまつてな。で、とりあえずその話の続きをしようと言つ事で、ここで待つていたんだ」

「なるほど……でも、それならここじゃなく、直接あの人の所へ行つてもよかつたんでは？」

そう言つと、彼は困つた様に笑いながら訳を話した。

曰く、昨日の活躍で自分達とは別に、砦の守護隊長の方からも礼をしたいとの事。

だが、本人はまだ仕事が残つていて手が離せないから、変わりに既に知人である俺から渡して欲しいと言われたと。

それならそうと先に言つてくれればいいのに……なんて事を考えながら、差し出された皮袋を貰う。中身はどうやら、それなりの量の銀貨だつたようだ。

「まあそう言つな。俺も別れの挨拶がしたかつたんだ。

また、帰る時は是非立ち寄つてくれ。何か困つた事があれば力になるう」

「ありがとうございます。また、きっと会いにきます」

そう言って。互いに手を取りあうと、カイトは商人の元へ向かった。

「体調はどうですかね？」
「なんとか歩ける位ですかね」

苦笑いしながら言うと、商人は笑いながら「あれだけ飲めばそうでしょう」と言っていた。

どうやら、酒が好きな大人でもなかなか飲まない量を飲まされていたようだ。

「改めて自己紹介を。私は、クラスト商会のトルネと申します。カイトさんが向かわれるラスティカの街で店をやっています。」

今回は買い付けを兼ねて家族で旅行をしていたんですが、帰る途中のあの砦であんな事になってしまい……。

ですが、カイトさんのおかげで、こうして命を拾い、家族も荷物も無事でした。

折角向かう先が同じという事なので、護衛として一緒に来て頂ければ嬉しいなと思ひまして、今日はこうして待っていたので

す

当然護衛としての給金も払います……と言っ。

カイトとしては、馬車に載せて貰え、さらに給金さえ貰えるという好条件だったから断る理由が無い。

「有難いんですが、本当にいいんですか？給金迄もらわなくても……」

「いえいえ、最近はモンスターの数も増えて来たみたいですし、腕のたつ方が一緒に来て貰えれば。私の方からお願ひしてるんですから、どうか受け取ってください」

そこ迄言われれば拒否するほうが失礼だ。

カイトは礼を告げ、トルネと同道する事となった。

一人で旅をするよりも（後書き）

全体プロットをまとめていたら、また予想より長くなりそうなの……。
そんな気がする……。

旅をするという事・1 (前書き)

20万PV突破!これからも頑張っていけますので、どうか応援よろしく願いします!

旅をするという事・1

「では改めて自己紹介を。私はトルネ・ドランコ。

クラスト商会の長をしておりますで、ラステイカの街で商店を経営しています。

こっちは妻のアリシャ。その隣がルルカ。私どもの一人娘です」

「アリシャです。初めましてカイトさん。昨日は本当にありがとうございます」

「る……ルルカ……です。た、助けていただいて、ありがとうございます！」

「カイトです。よろしくお願いします。トルネさん、幸せですね。こんな美人の奥さんと娘さんがいるなんて」

目鼻立ちのすっきりとした、美人という言葉がとても似合うアリシャさんと、少したれ目の優しい顔をしたルルカちゃん。

きっと目鼻はトルネさんに似たのだろう。髪は母親と同じ淡いブルーだ。トルネさんが濃いブラウンなので間違いないだろう。

とても幸せそうな家族に見えて、思わず素直に感想を漏らしてしまった。

それを聞いてほんのり頬を染めるアイシャと、顔を真っ赤にして狼狽えるルルカ。

「あら……ありがとうございます。こんなかつこいい男の子に美人

だなんて言われたら照れてしまうわ」

「あ、あ、あ、ありがとごごごごございます」

「おいおい……早速妻と子供を口説かないでくれませんか？」

妻と娘の様子に若干危機感を覚えたのか、トルネがジト目で見てきた。

「い、いや、ほんと、こんな家族がいたら幸せだなんて、ほんと、ただそう思っただけで」

よくわからない圧力に負けて、狼狽えながら答えるカイト。

それを見たトルネは、軽く含み笑いをして、

「冗談ですよ。ええ、とても幸せです」

と答えてくれた。しかし、さっきの瞳は何かわからないが本気だった気がする……何に対して本気だったのか若干知りたいような気もする。

「まあ、道中長いですし、さっさと荷物を積んでのんびり行きましょ」

* * * * *
* * * * *
* * * * *

「成る程……大変でしたねえ……」

あれから荷物を積み込み、見送ってくれたローツに別れを告げ、街道をひた走る馬車の上で、カイトとトルネは色々な話をした。

以前見た不思議な宝や曰く付きの逸品等を面白おかしく話してくれるトルネ。

そして話はカイトの旅の目的となり、そのままカイトの過去へと話は及んだ。

最初は奴隷であった事を隠そうとも思っていたが、この誠実そうな商人を裏切りたくないと思い、全てをありのまま話した。

そして、今向かっている街に妹がいる。

そこ迄話した所で、背後からすすり泣いているような声が聞こえた気がした。

気になって振り向くと、馬車の幌から両手でクルトを抱え、首を出したルルカがボロボロと涙をこぼしている姿だった。

「まったくお前は……お父さんは人の話を盗み聞きする様な子に育てた覚えはないぞ?」

「じ……ごめ、なさ、……ごはん……わたそう、と、おもって……
ううううう」

涙で顔をくしゃくしゃにして謝るルル力を苦笑しながら注意するトルネ。

なんとかなだめ馬車の中に戻らせると、トルネがすまなそうに誤ってきた。

「申し訳ない。たまたまとはいえ、あまり他人に聞かせたく無い話をさせ、それを盗み聞かせる事になってしまった」

「気にしないでください。トルネさんだから話した事ですし、トルネさんの娘さんなら、聞かれても問題ありません」

トルネはホツとしたようにため息をつくど、じつとこちらを見てきた。

「しかし、そういう理由があるなら、カイト君の腕も、その落ち着きも理解出来る。ここ迄生きてくるのは、大変だったでしょう」

「いえ、自分は、とても良い所を買われましたから。妹を連れ帰ってもいいとさえ言われていますし」

成る程……と少し納得したトルネ。

「では、この旅が終われば、また屋敷に?」

「はい、戻ろうかと思っています。お世話になった恩も返したい」

どこか納得したような面持ちで頷くトルネ。

「しかし、妹に会った後、すぐ戻るのかね？」
「一応そのつもりです。……ラステイカに着いて直ぐに会えるとは思っていないので、どれだけ時間がかかるかわかりませんから」
「確かに。ならば、私も探すのを手伝いましょう。ラステイカの街に居た事があれば、必ず何処かの店で買い物をしているでしょう。店の伝を使い話を聞いて回れば、きっと何処にいるか直ぐにわかりますよ」

任せなさいと、ドンツと強く、自らの胸を叩くトルネだった。

* * * * *

「カイトさんには、そんな事情があったのね……」
「ああ。とても過酷な人生だ。彼にはこの先、幸せな人生を歩んで貰いたい……」

命を助けられた事もあり、彼の今後を思うトルネは、心底彼の幸せを願っていた。

しかし、きっと彼の事だ。この先も、ずっと苦難の道が続くかもしれない。

それを考えると、少し憂鬱な気分になった。

命を助けられるという事は、それ迄の、そしてこれからの自分も、その全ての可能性を救われたという事になる。

しかも自分だけではなく、自分の命より大切な、妻と子供の命も一緒にだ。

これはきつと、一生かかってもこの恩は返しきれない。

これから先は、出来る限り彼の力になろうと、トルネは決意した。

「そういえば、ルルカとカイト君は何処に行ったのかね？」

「それなら、カイトさんが日課の鍛錬をするからと宿についてすぐ庭に出て、ルルカもそれについて行ったわよ？」

「……………ルルカも……………？」

妻は何処か面白そうに含み笑いをしながら、

「ええ。最初は照れてるだけみたいだったけれど、あの話を聞いた後は、カイトさんカイトさんって、ずっと言ってたわよ？あの子も、もうそういう年頃なのねえ」

ふう……………と、わざとらしく溜息をすると、ちらちらとトルネの様子を伺うアリシャ。

しかし、トルネにはアリシャの視線に気がつく余裕は無いようだ。

「ルルカが……………。むう……………娘はやりたくないが……………しかしカイト君

なら……でも……」

「……もしもカイトさんでダメなら、よほど素晴らしい他人じゃないとうんって言えなくなるわよ」

妻の言葉にビクリッと反応するトルネ。

しばらくはこの話で楽しめそうね……と、ちよつと意地悪くしかし、愛する夫の可愛い一面と、娘の成長を嬉しく思い、何処か優しげに微笑むアリシャだった。

* + * + * + * + * + * + * + * + * +

ヒュンッ……ヒュンッ……。

静寂の中、剣を振る音だけが響いていた。

ヒュンッ……ヒュンッ……。

毎日の日課となっている素振りには、最初にショートソードをもらった時から続けている。

先ずは剣を手に、身体に馴染ませるために。

ヒュンッ……ヒュンッ……。

馴染んだ後は、無駄の無い動きを身体へ覚えこませる為に。

ヒュンッ……ヒュンッ……。

そして今は、自分が思う通りの剣線を描ける様に。

ヒュンッ……ヒュンッ……。

慣れていなかった頃は、2000も振れば腕が棒の様になり、掌にできたマメがいくつも潰れた。

それが1年、2年と続く間に、回数が増え、直ぐに破れていた手の皮は厚く、硬くなっていた。

ヒュンッ……。

今では朝晩千回づつとなった日課の素振りを終えて振り向いたカイトは、何時の間にか寝ていたルルカに目を向けた。

どれだけ回数を重ね、月日を重ねても、時間だけは短縮する事ができない。

鍛錬をするからと宿の庭に来ていたカイトに、なぜか一緒について来ていたルルカだったが、じつくりと1刻かけて素振りをしている間に旅の疲れが出たのだろう。

膝を抱え込んで眠ってしまった。

無防備過ぎないかな……と、苦笑し、眠っていたルルカを抱え宿に戻るカイト。

幸せそうに微笑みながら寝ている彼女は、一体どんな夢をみているんだろう？

ちよつとだけ羨ましくなったカイトだが、彼は知らない。ルカの笑みの原因が、夢の中に出て来たカイトの姿にあつた事などは。

宿に戻ったカイトを待っていたのは、少し怖い顔をしたトルネと、面白そうにこちらをみるアリシャだった。

「カ……カイト君……その格好は……？」

何を誤解したのだろうか？だんだん険しくなってくる顔。ちよつと本気で怖くなってきた。

「い、いや、庭で素振りをしてたら何時の間にか眠ってて……起こすのも可哀想だったんでそのまま連れてきたんですが」

迫力に押され、軽くどもりながら答える。

……あれ？俺って、悪い事何もしてないよな？

何が彼を怒らせたのかわからないカイトは、見兼ねたアリシヤが声をかける迄、必死に自問自答を繰り返していた。

旅をするという事・1（後書き）

ルパンの新作を見たら、敵役の氷室がラピユタのムスカ大佐と重なってツボにハマってしまいました。

石田さんのノリノリの声にも影響されて、しばらくは忘れられそうにありません。

旅をするという事・2

翌朝、日課の鍛錬を終えたカイトが戻ると、顔を赤くしたルルカが待っていた。

「あ、あの、昨日は、ありがとうございました。部屋まで運んでいただいたみたいで」

あー、アリシャさんが言ったのかな？

視線が合ったアリシャさんが、面白そうに微笑んでいる。

……トルネさんは相変わらず怖い顔で睨んできてる。

内心冷や汗をかきつつ、「気にしないで」と笑ながら食卓へと座った。

どうしてこうなったんだろう……などと思いながら。

「あなた、そんなに心配しなくても、意識してるのはルルカだけで、カイトさんは何とも思っていないみたいですよ？ルルカの事は」

昨夜からルルカの事で頭を悩ませていた夫に、内心呆れながら声をかける。

私としては、意識して欲しいのだけれど。

そう心の中で付け加えながら。

娘のルルカも、先月で16になった。早い者では結婚していてもおかしくはなく、今まで特定の誰かに思いを寄せる様な事がなかったルルカを少しだけ心配していたのだが。

今回の旅行はとて面白い収穫があったみたいね。

モンスターに襲われる等と、危ない事もあったが、連れてきてよかったとアリシャは思った。

いつもなら、黙って見送る筈だった今回の買い付けだったが、誕生日を迎えるルルカへのプレゼントとして、家族旅行の様な形にしたのは、普段街から出る事がない娘の視野を広げる為でもあった。

きっと、殆どの人は、一つの街から出る事はあまりない。

村で生まれたり、住む場所を変えたりする事がなければ、危険な街の外に出る必要がないからだ。

しかし、アリシャとトルネは、娘のルルカにもっと広い世界を見て欲しいと思っていた。

確かに街の外は危険でいっぱいだ。しかし、だからこそそこでしか見れないものもある。

違う街、違う国だからこそそこでしか見れない、聞く事ができないもの。

それは、きっとこの先の彼女の一生を、深く、豊かな物にしてくれるに違いない。

最も、これといった護衛が雇えず、途中まで他の商隊と一緒に移動していた私達が、帰る時にその商隊から離れ、単独で国境を越えて戻らないといけなくなったのは、大きな誤算だったけれども。

国境に着いたら、そこにいる信頼できそうな腕の立つ人を雇って護衛してもらおう。

そう考えて入った国境の砦で、カイトに会えたのは幸運ではなかったけれども。

きっとそれは、娘にとっても……よね？

カイトの隣で少し頬を染めながら、楽しそうに話をしている娘を見ながら、アリシヤは微笑んだ。

そして、それをじっと見続ける夫の横顔を見ながら、「この人にもそろそろ娘離れをして貰わなければいけないのかしらね」と思うアリシヤだった。

朝食をとり、村を出たカイトは、御者台の上でも肩身の狭い思いをしていた。

……というのも、どうにも昨夜からトルネの様子がおかしい。

さっきの朝食の時も、怒っている様な雰囲気醸し出しつつ、ひたすら食事をとっていた。

たまにこちらを見ていた視線が……怖かった。

そして今は、昨日とは違って変わって無言を貫き通してくるトルネの姿に、どうしてこうなった……と、悩むカイトだった。

「なあ、カイト君」

先程渡された昼食を取りながら……ルルカから渡される時の視線が痛かった……馬車に揺られていると、トルネが声をかけてき

た。

「は、はい」

思わず姿勢を正すカイト。

「君は、娘の事をどう思う?」

「ルルカ……ですか?……可愛いと思いますが。い、いや、その、ほら、なんていうか、妹みたいなの?」

一瞬殺気が漲みなった気がする。

「ほう、妹?」

「は、はい。……自分の妹は、とても世話焼きで、融通がきかなくて、口うるさくて。そんな妹を、俺はいつも困らせていました。」

狩りに出たら、すぐには戻らない事も何度もあって、そんな時はいつも、獲物の事なんかどうでもいいから、必ず無事で帰ってきて……と、よく言われてました。

いつも俺の心配ばかりして、自分の事なんか二の次で。

俺は、そんな妹がとても、好きでした。

ルルカは、そんな妹に似てるんです、顔も、性格も違う筈なのに」

妹の事を思い出しながらそう語るカイトを、じっと見据えながら話を聞くトルネ。

その表情は、何時の間にか優しい物に変わっていた。

「……そうか。君は、妹に会えたら、そのまま連れて屋敷に戻ると言っていたね？」

「はい。すぐ……かは分かりませんが、出来るだけ早く戻れたらと思っています」

「なら、戻る前に一度、うちに顔を出してくれないか？」

「……？はい、わかりました。」

でも、いつになるかわかりませんよ？と言うカイトに、それでもいいんだと笑うトルネは、どこか清々しげに笑うのだった。

++*+*+*+*+*+*+*+*

「ところでカイト君、恩返し云々は置いておくとして、旅を続けたと思う事はないのかね？」

「いや、特に考えた事はなかったですが」

カイトにしてみれば、ある意味最初の旅は奴隷の旅だったと言っても過言ではない。

鎖に繋がれ長い距離を歩き、日々擦り切れていく心をなんと

か繋ぎ、同じ境遇の仲間と、只この旅がいつ終わるのか、それだけを話して過ごしていた。

正直、いい思い出は、ない。

だから、改めてそう問われる事が不思議だった。

カイトにとって旅とは苦難でしかなく、今回ものはそれとは別物のような気がしていたからだ。

「自分にとって、旅は面白いと思えるものではなかったので」

ただその一言に全てを込めた。

「確かに、君の過ごした日々は辛いものだったろう。

だけど、それが全てではないんだよ？

むしろ、今のような旅の方こそ、“普通の旅”と言える」

何が言いたいのかわからないカイトは、ただ首を捻るだけだ。

「君の人生は、苦難続きだったからこそ、他の人とは少し違う。

……歪んでいると言ってもいいかもしれない。

本来、旅とは危険がつきものではあるが、苦難のみだけではないのだよ。

もし君に余裕ができたなら、一度ちゃんと旅をしてみたい。

勿論、今回の旅を続けてしまってもいいんじゃないかとさえ思っている。

……きつと、君の屋敷の主も、そう思ったんじゃないかな？」

そうなんだろう？

確かに自分がまともな感性を持っているとは思えない。

歪んだ価値観でしかいられない場所にいたのだから。

しかし、この人は、まるでそれが直せるといつているように聞こえる。

いや、もしかして、ほんとうに？

「私はね、たまにこうして自分で買い付けをしに行っている。それは、同じ場所に居続ける事で、同じ考えしか出来なくなるのが怖いからだ。」

場所が違えば物の値段も変わるし質も違う。

そもそも使い方が変わる物さえある。

人だって同じだ。いろんな人がいる。

でも、それは同じ場所に居続けてはわからないし、一度わかったつもりになっても、すぐに忘れてしまうものだ。

人はどうしても、自分の目にはいる範疇の事にしか気が回らないからね。

カイト君、いろんな世界を見てきなさい。

世界には、君の考えつかないような出来事が沢山ある。

それを出来るだけ吸収して、大きくなって欲しい。

君には、それが出来ると私には思っているよ」

そういつと、トルネはただ前方を見据え、馬車を走らせてい

く。

これから待ち受ける、様々な事へカイトを誘うように。

旅をするという事・2（後書き）

意外と？モテるカイト君ですが、果たして彼の恋愛事情は……。

また、次話から少し加速していく事になります。

感想、ご指摘、応援メッセージお待ちしております。

父として、人として（前書き）

父親は、娘に決して叶わぬ恋をされると言われています。

それだけ大事なんだって話なんですネ。

父として、人として

パチパチと香ばしい匂いを放ちながら焼ける肉を前に、私はそっと斜め前に座る若者の横顔を見た。

赤く照らされた顔に、楽しそうな笑みを浮かべ、その隣に座る娘と話をしている。

その隣にいる娘は、目の前で燃え盛る火のせいだけ……とは思えない、赤く染めた顔で、嬉しそうに青年の隣に座っていた。

……わかつている事とはいえ、どうしても……どうしても、笑顔だけでその姿を見続ける事ができない。

我ながら情けない……と思いつつ、それ以上見ていられずに視線をそらす。

その視線をそらした先に座る妻……アリシャは、しょうがない人。とでも言いたげな視線を私に向けると、娘の方へと視線を向けた。

とても優しく娘を見つめるアリシャの姿はとても美しく、思わず見惚れてしまう。

「トルネさん、焼けましたよ」

差し出された肉と共にかけられた声で我に帰り、「ありがとう」といいつつその肉を受け取る。

パリパリに焼けた皮と、熱い肉汁が垂れるその肉を頬張ると、思わず唸り声が出てしまうほど美味かった。

次々にその青年の手から渡される肉を受け取っていく妻と娘。

同じ様に頬張り、目を見開くと、口々に美味しい！と声を上げた。

「料理も上手なんですね！」

……声をかける娘の瞳がキラキラと輝いている様に見える。

……おのれ……！つと、いかんいかん。

私は彼と娘の事は見守ると決めただろうに……未練がましい。

「いや、これは俺の料理の腕ではなくて、素材の味がいいからですよ」

「でも、そのお肉をとってきたのもカイトさんじゃないですか！」

そう、今食べているこの肉をとってきたのも、焼いたのもカイトだった。

今いる、付近に村がなく、旅をする上で空白地帯となっている場所で野営をする事を教えると、彼が弓を手に付近の森へと入り

狩ってきたのだ。

今いるこの辺りは、昔から村ができず、ここを通る場合は必ず野営をして一夜を過ごさねばならない場所だった。

珍しくはあるが、どうしても村を作るのが不向きな場所だったり、領主仲や領地の境目だったり、色々な事情から同じ様になっている場所は王国内に他に3つほどあった。

なかなか狩りと言っても、そう簡単に獲物をとってこられるわけでも無い。

野営の準備をしながら、一応保存食を出していたら、一刻もせず森の中から、丸々と太ったボアを仕留めてきたのには驚いた。

やはり、彼とこの狼の力は並ではないらしい。

その後渡された肉を食べ終え、腹を満たした私は、最初の不寝番をする為に、一人焚き火の前にいた。

野宿をする以上、どうしても獣などに襲われた時の為に、こうして不寝番をする必要があった。

私が日付が越えるぐらい迄、その後がカイト君という順番だ。

あのルル力が恋か……。

あり得ない事ではないが、それでも、実際にその日を迎えた今となつては、驚いているというより、戸惑っているという方が近い。

人見知りが激しい娘、もう少し人前に出られりようになれば
と思い、連れてきた旅で、まさか人見知り云々どころではなく、思
い人ができてしまう事になるとは……。

まあ、今迄あまり人前に出ず、同じ年頃の子達と遊ぶ機会も
少なかったのだからしょうがないといえましょうがないのだろうが。

どうしてもそれなりの規模の商会の主、その一人娘という事
で、あまり外で遊ぶ事が無かった娘には、出会う機会などそうない。

それでも、商会仲間とのパーティー等には参加する事があつ
たが、人見知りな娘は、大抵の場合母親と一緒に隅の方にいる事が
多かった。

アリシヤとしては、その事に心配も覚えていたのだろう。
顔も悪くない娘が、それなりに親しい異性がいた事がない
のは。

だが、いつか、いつかはと思っていた事が、いざ現実になる
と……ううん……。

その後トルネは、堂々に巡る思考の中、ひたすら交代の時間
迄過ぎたという。

* + * + * + * + * + * + * + * + * + * +

最近では日課になっている、カイトさんの朝の素振りを見ながら、私はほっとため息をついた。

止まる事を知らず、只々一心不乱に、一定の間隔で振り下ろされる白銀の剣。

太陽の光を受けて煌めくそれは、振り下ろされる剣線に沿って、縦に、横にと空中に綺麗な半月を描き出す。

汗を滴らせながら、只々それを繰り返す彼の姿は、本当に綺麗だった。

あの日馬車の中で、いつ襲いかかってくるかもわからないモンスターに身体を震わせていた私は、もう大丈夫。と言う母の言葉に従い、馬車を降りた。

何時の間にか砦の側に着き、場車庫へと置かれた馬車を後にして砦に入ると、中にいた人達皆が、私たちが生き残ったのを我が事のように喜んでくれていた。

そして、窓から顔を出し、見ていた事を一部始終話してくれたのだ。

橋を必死に走っていた人達。

その後ろに迫る、騎士達を振り切ったモンスター。

そこへ一人飛び出した青年の話。

まるでおとぎ話の様に聞こえるそれが、今まさに自分の身に起こった出来事だとはなかなか理解できなかった。

それまでずっと安全な家の中で育った私が、初めて街の外の、違う国へと赴いた旅。

初めて見たお城や、色々なお店。

そんな物をずっと見てきた帰りに、唐突に襲いかかってきた

モンスター達。

いきなり降りかかった死への恐怖に身を竦めていた自分達を救ってくれた青年。

モンスターを討伐し終え入って来た青年の姿は、とても、とてもかっこよかった。

翌朝起きると、身支度を終え、荷物を馬車へと運んだ。

今迄使用人に任せていた事も自分でする様になって、その大変さがよくわかった。

それでも、今ではだいぶ慣れたけれど。

そして荷物を運び終え自分達。

そこに彼が現れた。

お父さんの話を聞いていると、どうやら彼の行く場所が私達の住んでいる街だったらしい。

お父さんは彼を護衛として雇い、馬車に載せて行くという事
だった。

私はとても驚いた。

彼と一緒に行く。

それを嬉しいと思っている自分に。

馬車に揺られている間、ずっと私の心臓はドキドキと高鳴っ
ていた。

かすかに聞こえてくる彼の声。

それをもっとはつきりと聞いてみたい。

はあ……とため息をつくとき、目の前に座っていた母が、くす
りと笑った気がした。

顔を上げると、母が紙袋を差し出し、「お父さんとカイトさ
んのお昼ご飯。持って行ってあげて？」

それを聞いた私は、だいていた彼の子犬……とつても毛並みが
よく、気持ちいいのだ……を連れ、御者台の方に移動した。

かかっていた幌の隙間を広げようと手を延ばしたところで、その隙間からお父さんとカイトさんの話し声が聞こえて来た。

「……………つは、自分には妹がいて……………」

盗み聞くつもりはなかった。

声をかける時期を見失って、いつ幌を開こうか迷ってしまったのだ。

だが、そうしている間に、話はどんどん進んで行った。

どうして旅をしているのか。

……………そして、自分が何者だったのか。

私は、最初彼が奴隷だった事を聞いて、酷く驚いた。

あの、いつも泥だらけで汗臭い奴隷達。あの中の一人だったのかと。

だが、何故奴隷になったのか、それからどう生きてきたのか、今何をして、どうしていききたいのか。

それを聞いているうちに、自然と頬を涙が伝っていた。

きっと、もの凄く大変だったんだろう。

すごく辛い思いをしてきたんだろう。

自分がとても想像できない位に。

でも、幌の隙間から見えた彼の横顔は、笑っていた。

悲しげに、苦しげに、でもどこか、誇らしげに。

そんな彼の事を、私はもっとよく知りたいと、そう思った。

今日の朝の分の素振りを終え、食堂に戻り朝食を食べ、支度を
をした私達は馬車に乗り、村を出た。

順調に行けば、今日の昼過ぎにはラスティカの街に着くはず
だ。

出る時は、あれほど恋しかった自分の街。

だけど今は、まだ、もう少し、彼と一緒に旅をしたい。

もう少しだけ。

父として、人として（後書き）

毎回思うんですが、やはり自分が男のせいか、女の子視点の話を書くのはちょっとだけ苦手な気がします。

どうしても、空想に頼らざるを得ない物がありますから。

ラスティカ

「おお、見えた。あれがラスティカの街ですよ」

前方に向けて指差したトルネ。

確かに、うつすらと街を取り囲む壁のような物が見える。

「あれが、ラスティカ……」

あそこに妹が……。

今、何処で何をしているのかわからない妹の手掛かりがあの街にある。

まだ遠い街の姿に、はやる気持ちを抑え、カイトは馬車に揺られ続けた。

「おや、これはトルネさん。おかえりなさい。無事で安心しましたよ」

街へ入る為に通行審査を受ける列に並んでいたカイト達は、順番が来ると衛兵からそんな声をかけられた。

「やあ。いつもお務めご苦労さん」

笑顔で接するトルネと衛兵は顔なじみのようだ。
何度も買い付けで通ったりしているからだろうか？

「聞きましたよ。国境の砦にアースリザードの群れが襲いかかってきて、結構危なかったとか」

「おやおや、全く耳が早い。うちの商会の人間にも見習って欲しいもんだ」

そう言っただけでわざとらしくため息をつくトルネに、「私が衛兵だからですよ」と苦笑を返す衛兵。

「おや、君がもしかして、砦を救った英雄様かい？」
「え、えいゆう？」

唐突に話を向けられたカイトは、その内容に驚きを隠せない。

「橋に残っていた人達に襲い掛かるリザードの群れを、単身飛び出して救った英雄……だろ？」

面白そうに語る衛兵の話は、あの時の状況に尾鱗おしれをつけた物だ。
……しかも、どうやら自分一人で助けたような話になっている。

あまりの恥ずかしさに顔を赤くしながら、「いやいや、自分一人だったわけではないですし」と弁明？をするカイトを、面白そうに見る衛兵。

「まあまあ、そうからかう物ではないよ？」
「失敬、冗談が過ぎましたかな？」

お互いに笑みを交わすトルネと衛兵に、ちょっとだけ恨みを込めた視線を投げながら、手続きが終わるのを待つ。

「ああ、そつだそつだ。ウィルス君、リースという女の子を知らないかい？彼の妹みたいなんだが、この街にいるという話を聞いてここ迄きたようなんだ」

ウィルスと呼ばれた衛兵は、少し考えたようだが首を振った。

「……いや、わからないですね。自分が非番の日や、別な門から入ったのかもしれませんが。後で仲間に聞いてみましょう」
「すまないね、助かるよ」
「いえいえ、トルネさんに恩を売れるのなら安い物です。ーああ、こちらが通行証です。お待たせしました」

差し出された木の板を受け取る。

「門をくぐった先の詰め所でこちらをお出し下さい。」

街を出て、再度入る際には、またこちらでこの入場証を受け取る必要がありますので。

……最近この辺りも物騒になっていますから、どうにも面倒をおかけします」

「いえ、こちらこそ。妹の事で何かわかったら教えてください」

任せて下さい。と言うウィルスと別れ、カイト達は街の中へと入った。

* + * + * + * + * + * + * + * + * + * +

街に入ったところで、今晚からの宿を探す為に別れる事をカイトが告げると、トルネは「家に泊まりませんか？その方が情報も集まりやすいと思いますよ？」と申し出てくれた。

何故か強く賛成してきたルルカの勢いにも押され、カイトは暫くの間トルネの家に泊めて貰う事となった。

了承した時に、大袈裟に喜ぶ妻と娘の横で、何故かそれを提案した本人にも関わらず、悔しいような悲しいような表情を浮かべていたトルネがとても印象的だった。

ラストイカ（後書き）

ラストイカに到着したカイト。

無事妹は見つかるのでしょいか？

懐かしい名前（前書き）

VRMMOとか、チートとか、異世界転生も好きなんです。
好きなんですがね、もうちょっとところう、王道物とか、ダークヒーロ
ー的なのとかも出て来て欲しいなって思ったり。

毎晩三食カレーじゃ、飽きちゃいますよね。。。

懐かしい名前

翌朝、日課の鍛錬を終えたカイトは、街に出て妹の姿を見た者がいないか、聞き込みを始めていた。

しかし、早朝の街では流石に人気もまばらで、あまり話は聞けそうにない。

何故こんな朝早くから聞き込みに出たのか……というと、単純な話、居心地があまりよくなかったからだ。

昨日案内された家は、アベル様のお屋敷ほどではないが、立派に豪邸と言えるもので、使ってくれと言われた部屋は、自分が住んでいた小屋よりも広かった。

とても大きくて柔らかかなベッドは、柔らか過ぎて逆に心許なく、その上使用人までいる始末。

確かに商会の主と言ってはいたが、この状況は想像していなかった。

……やっぱり何処かに宿を取ろうかなあ。

本気でそう考え始めるカイトだった。

…これからどうするの？

足元に居たクルトが、暇そつに声をかけてきた。

あの家にいると、ルル力達のおもちゃになってしまうので、カイトと一緒に出てきたのだ。

普段は子犬のふりをしているクルトは、屋敷に着くなりその使用人……主に女性……から熱烈な歓迎を受け、それに耐え切れずカイトの側から離れなかった。

「まずは、話を聞いて回ろう」

と言っても、出来る事はそう多くはない。

商店関係は全てトルネが手配してくれている筈なので、それ意外で話が聞けそうな場所は……宿屋、酒場、ギルドあたりだろうか？

もし、誰かの伝を頼りに来たのでなければ、宿に泊まっているか、泊まった事がある筈だ。

誰かの伝を使って来たのであれば、一度は酒場を使った事がある筈。昼食を出す酒場も珍しくない。

そして、どちらの手段で来たとしても、何かしらギルドを利用している可能性もある。

依頼を出すか、受けるかだ。

ギルドの依頼は、一般的に冒険者と言われるような人達以外でも、その日の糧を稼ぐ為に利用する人は多い。

そして、材料集めや家の修復、引越しや荷物運びなど、ちょっとした手伝いが欲しくなったときに頼る場所も、ギルドだ。

今の時間なら、宿屋は忙しいだろうし、酒場はあいていない。

ならば、ギルドだろう。

直接本人に行き当たる事はそうないだろうが。

カイトは、尻尾をふってついてくるクルトと一緒に、ギルドへ向けて歩き始めた。

「すみません、このギルドに、リースという名で依頼を受けた者が、依頼を出した者はいませんか？」
「失礼ですが、あなたとそのリース様のご関係は？」

疑わしげに聞いてきた受付の人に「妹だ」と告げ、事のあら

ましを話す。

もちろん、細かい事はぬきで、盗賊に襲われ生き別れになった妹がここにいと聞いてやってきた……としかいつてはいないが。

それを聞いた受付の女性は、少し同情した様な目でこちらを見ながら「申し訳ありませんが、依頼人や冒険者の皆様の情報をお渡しする事はできないんです」と告げた。

そこをなんとか、と食い下がるカイトだったが、がんとして首を縦に振らない。

困り果てたカイトだったが、あまりしつこく聞いて警戒されすぎるのも良くないと、受付から離れ、依頼が貼られた掲示板へと進もうとした。

「お？お前さん、もしかしてあの国境の砦で戦った冒険者さんかい？」

突然かけられた声に驚き、振り向くカイト。

その先にいたのは、傷だらけのレザーアーマーを着込んだ男だった。

「やっぱりそうだ！あんとときの兄ちゃんじゃねえか！」

そう言って近づいてくる男だったが、カイト自身はあまり見覚えがない。

あの時はたくさんの方が居たし、その後の酒場での事も、あ

まり覚えていない。

少し困っている、その男は自分に覚えが無いことがわかったのか、苦笑しながら近づいて来た。

「ああ、わりいわりい。あの時もちゃんと話ししてなかったからな、覚えてなかったのも無理はねえ。」

俺はオール。ラスティカの街を中心に活動してる冒険者だ。

あんたの活躍は、皆の中で見てたよ。……俺にも、もう少し力があれば出ていけたんだが」

そう言っただけで苦笑する彼は、悔しそうにそうつぶやいた。

「で、このギルドでなにか困りごとかい？俺でよかったら力になるぜえ！まあ、きつい依頼の手助けってんじゃ、俺は力になれそうにないけどな」

せっかくこう言ってくれたのだからと、カイトは受付の女性に話した事を、そもまま彼にも語った。

「……成る程なあ。そいつは大変だったな。……だが、俺もあまり力にはなれそうにないな。俺がこの街で受けた依頼の依頼主にも、そんな名前は聞いたことがないし、そもそも女の冒険者もあまり……」

そう言っただけで、彼はハッと目を見開いた。

「そっぴや、1年位前からこの街で活動してる冒険者がいてな、そ

いつがいつも女の子を連れていたな。珍しいからよく話題になったが、最近はどうしてるんだろうな」

そう言っていると彼は窓口に歩み寄った。

「なあ、最近、あのトリスって奴らはどうしてるんだ？」

「トリス!？」

それは、確かに村で仲の良かった、病弱な妹を持ち、カイトの妹を連れて街へと逃げた、友の名前と同じものだった。

懐かしい名前（後書き）

つて事で、ここから2章は佳境へと突入します。

唐突に出て来たトリスの名前。

妹の名前よりも先に出て来た友の名が示すものは……？

再会と出発（前書き）

もうすぐ30万PVを超える事になりそうです。

今迄応援してくれた皆さんに感謝を、

そしてこれからも応援よろしくお願いします。

再会と出発

「な、なんだ？ トリスを知ってるのか？」

突然大声を出したカイトに驚き、思わず後ずさる。

そのまま詰め寄ってきたカイトは、俺の肩に手を置くと、そのままの勢いでまくし立てた。

「トリスがここに居るのか！？ 女の子を連れて？ 今は？ 今は何処で何をしてるんだ！？」

「あ、ああ、確かにパーティーに女の子がいた筈だ。

だが、なあ、とりあえず落ち着けよ。お前の知ってるトリスってやつと同じかどうかもわからねえし、連れてる女の子も妹かどうかはわからねえんだ。

あんまり期待しすぎると、違った時辛いぜ？」

兎に角落ち着かせようと必死になだめる。だが、今のカイトに効果はあまりないようだ。

「なあ、トリスは何処の宿に泊まっていたんだ？」

冒険者なら、何処かの宿に泊まっていたんだろ？」

「あー………何処だったかな………俺がこの街を出る前は、飛竜の鋭角トリスつてどこにいたかな？」

「わかった。ありがとう！」

カイトは宿の名前だけ聞くと、そのままギルドを飛び出していった。

「……俺が街を出たのは一月前だったんだが……。
それに、あいつ宿の場所知ってたのか？」

あまりの無鉄砲さに、よくこれまで生きてこれたな……と疑問に思うオールだった。

++*+*+*+*+*+*+*+*+*+*+*+*

宿の名前を聞いて飛び出したカイトだったが、飛び出してくる自分に、自分が宿の場所を知らない事に気が付いた。

今更ギルドに戻るのも恥ずかしい。

それなりに人通りが増えて来た街路を行く人に聞けばいいかと気を取り直し、一番近くにいた人から声をかける事にした。

あれから半刻ほどかけ、飛竜の鋭角亭ひしゅうていへとついたカイトは、意を決して扉を開け……ようとして、突然内側から開いた扉に強かに額を打ち付けられた。

それなりに硬い木を使っていたようで、開けた時の勢いといまっぴら素晴らしくいい音を辺りに響き渡らせる。

激痛に思わずしゃがみ込んだカイト。

だいじょうぶ？と声をかけながら心配そうにこちらを見てくるクルト。

なんとか返事を返そうとしたところで、目の前の扉がゆっくりと開かれた。

「あ、あの……だいじょうぶ……ですか？」

恐る恐る扉を開け、こちらを覗き込んで来た少女と目が合う。

大丈夫だ……と声をかけようとしたところで、どうも目の前の少女に見覚えがある様な気がした。

どうやら、その少女も同じ事を考えているらしく、頭を傾げながらこちらをみってくる。

誰だ……？一度何処かで会った事があると思うんだけど……。

その疑問は、宿の中から聞こえて来た声にかき消された。

「ニーナ！なにやってんだい！？さっさと買い物にいつてきな！」

ニーナ……！？

その少女の名は、病弱だったトリスの妹の名前と同じものだった。

慌てて宿を出たその少女を追いかけ声をかけたカイト。

「ちょっとまって！……君、トリスって名前に聞き覚えは？」

「え……お兄ちゃんを知ってるんですか？」

「ああ、やっぱり。君はトリスの妹だったんだね。トリスは？今何処に居るの？」

矢継ぎ早に質問をするカイトに不信感を抱いたのか、警戒感を顕にするニーナ。

「あなたは、誰なんですか？」

どうやらもう俺の事は忘れられているらしい。

苦笑しつつ、少しだけ寂しげに自分の名前を告げるカイト。

すると、彼女はそれで思い出したのか、大きく目を見開くと「カイトさん!？」と大声をあげた。

たちまち辺りから不振な目を向けられる二人。

嫌な雰囲気になりそうな気がしたカイトは、「こっちに」と、二ーナの手を引き走り出した。

「はあっ……はあっ……!」

「ごめん、大丈夫?」

胸を抑え苦しそうにする彼女を気遣うカイト。

走っている間に、彼女が昔病弱だった事を思い出したのだ。

「はあっ……はあっ……だ、だいじょうぶ……です。……えへへ、カイトさん、足……速いんですね」

そう言って微笑む彼女の顔は、確かに昔の面影がある。

「でも、驚いちゃいました。ずっと、姉さんや兄さんが探してるのは知ってたけど、まさか本当に生きているなんて」

そういった彼女は、ハツつとして「ごめんなさい、あの、私は、てつきり」と、申し訳なさそうな顔でこちらを見てきた。

「ああ、まあ、しかたないよ。いきなりだったし、俺も……あれから色々あつてさ。」

ギルドで、トリスがあゝの宿に泊まっているって話を聞いて来たんだけど、ニーナは一緒じゃないの？」

「ああ、兄さんは今、北の森の中にある迷宮ダンジョンに行ってます。」

ここでお世話になったパーティーの人達と一緒に。

姉さんも、一緒ですよ。」

「そうなんだ。」

ところで、姉さんつてのは……？」

なんとなく、だが、答えを予想しながら聞いたそれは、カイトの想像通り「あ、ごめんなさい。リースさんです」というニーナの答えで現実となった。

「そうか。トリスが兄で、リースが、義姉あねか」

一時期そうなる事を望んでいたカイトだったが、現実にそうになると意外と心にくるものがある。

リース……大人になったんだね……。

一人遠い目をしていると、「あ、あの？カイトさん？」と、かけられた声にハッと我に帰る。

「ニーナ、そんなに他人行儀な言い方はしなくていいよ。俺の事も、

兄さんと呼んで」

なんだか雰囲気が変わったカイトに軽く怯えつつ、宿で頼まれた買い物を出し、カイトと二人、街の商店へと足を運ぶ二ナだった。

* * * * *

「そうか、なら、もうしばらくは帰って来ないのかい？」

「そうですね……街を出たのが3日前で、迷宮に着くのがそれ位と言われたので、探索し終えて帰ってくるのは、多分後1週間はかかるんじゃないかと」

買い物を終えて戻る途中に、色々な話を聞いていた。

2年程前から体調が良くなった二ナを連れて、冒険者登録をしたリースとトリスは、いくつかの街を渡り歩きながらこの街に来たという。

どうしてこの街に来たのか……という疑問には、「奴隷として売られた可能性もあるから、商人の集まる街や国を伝っていった

結果」という事だった。

奴隷になっていたという想像は当たってはいたが、ローゼスハイトの方には目が向いていなかった様だ。

確かに、現在平和なローゼスハイトよりは、国境が荒れている場所もあるこちらのほうが奴隷商も集まってはいるらしい。

流石にもう売られてしまっただろうが、売った相手を聞き出せるかもしれないという事で、奴隷商を探しながら旅していたようだった。

他にも、二人に剣を教えた師や、闇雲に探そうとしていたり
―スに、唯一可能性のある奴隷という存在の方に目を向けさせたのは、生き残ったベルクだったそうだ。

だが、そのベルクも、あの盗賊たちに襲われた時に受けた矢が原因で、旅立つ前に亡くなってしまったようだが。

「私は、まだやっと普通の生活ができるようになっただけなんで、
迷宮などにはついて行かずに、こうやって宿とかで働かせてもらって
るんです」

おかげで、宿代タダなんですよ！

そう言って笑う彼女は、昔の病弱だった頃とは違う、とても
元気な、素敵な笑顔を見せていた。

買い物が終わり、宿へ戻ったニーナと別れ、カイトはトリス達が向かった迷宮の話を聞くためにギルドへと向かった。

どうやらその迷宮はまだ発見されて日が浅いらしく、多くの冒険者がそこに潜っているようだった。

迷宮の場所を聞いたカイトはそのままトルネの屋敷へと戻り、今日あった事を話し、明日、街を出て迷宮へ出発する事を告げた。

いきなりの事に驚いたトルネ達だったが、探索を終えたらまた戻ってくるというカイトを信じ、それなら今日はご馳走にしようと張り切って用意してくれた。

翌朝、いくつかの道具と数日分の食料を渡されたカイトは、様々な人達に見送られ、迷宮へと出発した。

再会と出発（後書き）

カイトくんは誤解晴れぬまま妹達のいる迷宮へ。

そこで待ち受けるものとは？

森の中の迷宮（前書き）

初迷宮です。

今作品の中での迷宮の存在等も解説しています。

森の中の迷宮

鬱蒼うつそうと生い茂る森の中、黙々と歩を進めていたカイトの前に、暗い穴を覗かせる洞穴の様なものが現れた。

事前に聞いた通りなら、これが迷宮ダンジョンの入り口な筈だ。

まるで生き物を飲み込む様に大きく口を開けた洞穴は、誘う様に怪しくそこに存在していた。

「迷宮とは、モンスターの巢やファミリー等とは違う、人工的な産物です。」

迷宮の始まりは、過去に名を馳せた高名な鍛冶師や、錬金術士、魔術師等が、自分で作成した魔法武器マテリアルウェポンや魔法道具マテリアルアイテムを保管し、守る為に作られたそうです。

その道具達を狙う盗賊たちに奪われない様に、様々な罠や魔物等を配置し、守ったと言われています。

しかし、現在それらを造った者達はみな死に絶え、ただ宝物を守る番人だけが存在しているのが今の状況です。

基本的には中に存在する魔物達は外へ出ては来ませんが、後から住み着くモンスターもいる為、放置しておくには危険が多く、その為新しく見つかった迷宮には、最深部迄到達する事と、中に存

在する魔物を全て討伐し、入り口を塞ぐという二つの依頼をギルドで設け、迷宮を潰して貰う事になっています。

中に存在する宝物関連に関しては、全てそれを発見した者に所有権がある事としていますので、迷宮を探索する冒険者は後を絶ちません。

その代わり、熟練の冒険者でも命を落とす危険が大きい罨や魔物も多く住み着いている為に、中に入るにはそれ相応の覚悟をしていただく必要があります」

昨日ギルドで聞いた迷宮の概要を思い出しながら、改めてカイトは気合を入れ直し、その洞穴の中へ足を踏み入れて行った。

++*+*+*+*+*+*+*+*+*+*+*+*+*+*

「……ッセイ！」

強く振り抜いた剣は、目の前にいたゴブリンの首を跳ね飛ばし、その息の根を止めた。

この迷宮に入って既に1刻。もう時間の感覚も無くなって来ている。

どうにかこれまでクルトと2人、ひたすら奥へ奥へと進んでいたが、こつも先が見えないと疲労感も大きくなってくる一方だ。

クルトの方も、倒したモンスターの血や、迷宮に籠る臭いのおかげで辟易としているようだ。

そしてさらに二人を襲うのが、数々の罠だった。

一度何者かが掛かった罠でも、大きな仕掛け以外……例えば、落とし穴のようなものは、ある程度時間が経てば元に戻る仕掛けのようだ、

横の壁から飛び出た矢に貫かれた死体等、目に見えて何かある様な時以外は、常に細かい所に注意を払いながら進まなくてはならない為に、どうしても時間がかかってしまう。

削られる意識と集中力を必死に繋ぎとめながら進む二人。

幸い、モンスターの方はそこ迄多くない様で、散発的に襲っ

て来ては返り討ちにされている。

最も、既に先に進んでいる者達が倒しているからかもしれないが。

そんな事を考えながら進んでいたカイトだったが、そつと手を添えながら進んでいた壁に、怪しい溝がある事に気が付いた。

その溝は、人一人入れそうな位の大きさの四角形をしており、よく探ると、取っ手のような窪みがあるのも発見した。

畏かもしれないと、手に持った松明の明かりを掲げ、窪みをしっかりと観察する。

だが、それらしい痕跡が見つからなかったカイトは、その取っ手に手を添え、押したり引いたりを繰り返してみた。

しかしそれはビクともせず、諦めようとした時だった。

足元でカリカリと扉のようなものを引っ掻いていたクルトの手元で「カチリ」という音がしたと思ったら、それまで少しも動く気配がしていなかった岩が、ひとりでに横へと動き出した。

ズズン……という重い音を響き渡らせて開いたその扉の奥にはまるで明かりが無く、警戒しながらその奥へと進んだカイト達。

そのまま薄暗い通路を進んでいたカイトの前に、石でできた人形のような物が3体置かれていた。

人に似せて作られたように見えるその石像は、ピクリとも動く事無く、石室の中央に鎮座し続けていた。

あの石像の背後には何があるのだろうか？

と、横へと回り込み、背後を覗こうとしたーその時。

突然背後で大きな物音がしたと思と、入って来た筈の通路が塞がれ、石室の周囲に置かれていた燭台のようなものが次々に音を立てながら燃え盛り始めた。

ポツポツポツポツという音をたてながら順々に壁に沿って火がついていく。

そのあまりの異常さに気を取られていたカイトだったが、中央に鎮座していた石像が、ゆっくりと腰を上げるのを見て、警戒感をあらわにした。

「汝、宝を求める者か？」

唐突に響き渡った声に驚きつつ、カイトは心を落ち着けながら答えた。

「……妹を探しに来た。財宝には、興味はない」

「では、疾く去るがよい」

「だが、妹はこの迷宮の奥にいるはずだ」

「……ならば、我を打ち倒し、この迷宮の深部へと進むが良い」

そう言うと石像は、腰にあった石の剣を構えると、カイトに襲いかかって来た。

咄嗟に横へ飛び回避するカイト。

それと同時に無防備になった石像の脇腹へクルトが噛み付いた。

だが、石像はそれを全く気に留めず、体を揺すり振り払うと、再びカイトへ向けて剣を振りかぶった。

「……かたいー……」。

クルトの声に、それはそうだろうと苦笑を返しつつ、石像の攻撃を必死によけるカイト。

重そうな見かけなのに、とても素早い。

縦に横にと剣を振り回しカイトを追う石像。

だが、予想よりは素早かった石像の動きも、慣れてしまえばよける事は難しく無く、その動きを予測しながらカイトは回避し続けていた。

だが、どうしても打つ手が見当たらない。

見た目からして石であるし、長い年月の間に風化しなかった事を思えば、なんらかの強化がされている事も想像できる。

更に、クルトの硬い牙でもまったく傷がつけられなかった。

下手に攻撃して剣が折れたら……。

そう考えると、なかなか手を出せなかった。

その攻撃を避けようと、動いていなかった他の二体の背後に回ったカイトは、そのうちの一体の腰に下げられた剣へと目を向ける。

――恐らく同じ強化が施された物。

それを直感的に手に取ると、攻撃して来た石像の隙をつき、

思い切り剣を叩きつけた。

ビシッ……ビシビシッ……！

肩口へと叩きつけた衝撃でひび割れる剣。

だあ、それと同時に打ち付けた場所から微細なヒビが石像全体へと広がっていく。

——今だ！

動きを止めた石像に、カイトは腰の剣を抜き去り渾身の力で振り抜いた。

降り抜かれた剣が、まるで手応えが無く振り切られるとその斬線に沿ってゆっくりりと石像の体がズレ、重い音を響かせながら地へと横たわった。

はあっ……はあっ……。

荒い息をつきながら、そっと動かぬ石像の方を見る。

恐らく、最初はなんらかの力で3体とも動く仕組みになっていたのだろうが、長い年月の間にか、その仕組みが壊れたのだろう。

物言わぬ石へと戻った目の前の石像の残骸を見つつ、3体で襲われてはひとたまりもなかったな……と、背筋を震わせた。

石像が倒れた事で開いた奥の扉へ歩いていくと、その奥にキラリと光るものがあった。

眩く輝くそれは、黄金と漆黒の、一抱えもある様な卵に見えた。

カイトは意外に軽かったその二つの卵を、持って来ていた袋へといれ、背中に背負うと、更に先へと続く通路を歩き出した。

その後いくつかの小部屋を抜け、襲いかかる魔物を倒しながら進んでいたカイトは、一際広い空間の入り口へと辿り着いた。

そしてその奥には、人の2倍はあるつかという巨大な姿を持った、半人半獣の魔物と切り結ぶ、4人の冒険者の姿があった。

森の中の迷宮（後書き）

深い迷宮の奥でカイトが見たものとは！？

次回はグロ表現がそこそこあります。

仄冥い迷宮の最奥で（前書き）

グロ注意のバトルパートです

出てきた巨体の魔物は、ミノタウロスを想像していただけると。

仄冥い迷宮の最奥で

キーン！ギーン……ガギンッ！

家一件が入りそうなほど広い空間で、身の丈が2リルム（3m60cm）程もありそうな巨体と、4人の冒険者が剣を切り結んでいた。

重たい一撃をひたすら耐える盾を持った男と、魔物を取り囲み攻撃を加えていた3人の冒険者の周りには、夥しい量の血と、大量の肉片が転がっていた。

そのただ中で切り結ぶ、巧みな連携を駆使して攻撃する冒険者と、巨体を縦横に振るい攻撃を寄せ付けない魔物の戦いは、ある意味おとぎ話の様な物にも見えた。

必死に支持を出しながら耐える盾剣士と、隙をつきつつ攻撃する仲間たち。

だが、幾度も浴びせられる攻撃にビクともせず、手に持った巨剣を振り回す魔物にはまったく衰えが見えない。

時折聞こえてくる「ダメ！硬すぎる！」という声や、「諦めるな！」という声に滲む焦燥感、戦い続けてかなり経つ事を示す様に、疲労の色で濃く染めていた。

それでも攻撃の手を休めずにいた冒険者達だが、リーダーと思われる盾剣士が、魔物の攻撃を弾け（パリィ）ずに体制が崩れた事で、その連携が徐々に崩壊しはじめた。

よろめいた盾剣士を武器を握っていない手で殴りつけると、吹っ飛んだ盾剣士には目もくれず、そのまま剣を振り回し、周囲に集まった冒険者達を薙ぎ払った。

咄嗟に剣を盾にしてやり過ごした様だが、全員が距離を取られ、痛みに呻く。

魔物はそのうちの一人、少女へと間合いを詰めると、右手の大剣を大きく振りかぶり真っ直ぐに打ち下ろし、唐突に襲った右眼の激痛に身をよじらせた。

その眼には、カイトが射た矢が、深々と突き刺さっていた。

更に何本かの矢が飛び、身体の節々へ突き刺さった矢の痛みに怒った魔物は、一際大きく雄叫びを上げると、猛然とカイトへ向けて突進してきた。

それを冷静に横への移動で避けたカイトは、尚も矢を射て牽制を続ける。

とりあえず今は、他の冒険者が体制を立て直すのを待つのが

先だ。

そう考えたカイトは、確実に魔物の攻撃を避けながら、一本、また一本と、矢を魔物へと突き立てていった。

そして、魔物が更に怒ってできた隙を突き、狙い澄まして放たれた矢が、残った左眼へと吸い込まれる様に突き立つ。

再度訪れた激痛に身をよじらせた魔物。

今が好機と弓をなおし、腰の剣に手をかけたカイトは、一直線に魔物へと駆ける。

音で反応したのかこちらを振り向いた魔物が、剣を思い切り横薙ぎにふるった。

カイトはそれをすんでの所で止まり、やり過ぎすと、そのまま剣をその振り切った腕へと向けて思い切り振り下ろした。

ーーーーザンッ!!

その一撃は、魔物の強靱な皮膚と筋肉を切り裂き、一刀の下に切り離れた。

空を舞った腕と、舞い散る血飛沫。

今迄味わった事のない激痛に、再度大きな咆哮を上げ、身体ごと魔物はカイトへぶつかった。

その巨体で押され、吹き飛んだカイトは、強かに背後の壁へと打ち付けられる。

そのまま迫ろうとした魔物にクルトが飛びかかった。

小さな身体を駆使し、牽制しながらなんとか時間を稼ごうと粘るクルト。

小さな身体に思う様に当てられず苛立った魔物は、未だ繋がっている左腕で大きく薙ぎ払うと、クルトを振り払った。

そのクルトの粘りのおかげか、カイトを見失った魔物は立ち尽くし、必死に辺りへ耳を澄まして気配を探った。

しかし、既に復帰していた冒険者の一人が背後へと回り、手にしていた剣を強かに膝裏へと突き刺した。

その衝撃に片膝をつく魔物。

背後へと闇雲に振るわれた拳は、無防備な冒険者へ届く事は無く、その間に立ち塞がった盾剣士の盾で守られる。

それによりさらに崩れた魔物の体制を立て直す間を与えず、接近したカイトが首へ剣を突き立て、そのまま上へと切り上げた。

その鋭い剣線によって半ば断ち切られた首は、さらに振り下ろした剣によって、綺麗に両断され、首は空を舞った。

ーードウツ！と大きな音をたて、床へと崩れ落ちた魔物の身体を避けながら、カイトはなんとかあったなと胸をなでおろした。

足元で尻尾を振るクルトの頭を撫で、よくやった。ありがとう。と声をかけると、嬉しそうに目を細めながらさらに強く尻尾を振る。

その姿に癒されていると、横合いから先程の盾剣士が声をかけてきた。

「助かったよ。君がいなければ全滅していたかもしれない。ありがとう」

そう言って手を差し出してくる男。

「俺はウォルト。君は、一人でこの迷宮に？」

「カイトだ。実は、生き別れた妹達がこの迷宮に來ていると聞いて――「兄さん!？」――!？」

遮られた声に驚き振り向いたカイトの視線の先には、先程の魔物の攻撃で吹き飛ばされ、身体をボロボロにした女の子が、確かに事らを見ながら、瞳に涙を浮かべていた。

仄冥い迷宮の最奥で（後書き）

再開したカイトとリース。

生き別れた兄妹の再開、それは新たな冒険への幕開けと……なる？

再会はきらめく星の散る中で（前書き）

300000PV、30000ユニーク、お気に入り950件達成
しました！

今後も応援よろしくお願いします！

再会はきらめく星の散る中で

「兄さん!？」

“彼”は、確かに自分をカイトと言った。

それは、3年前に行方不明となった兄と同じ名前。

自分達を逃がし、ただ一人盗賊の追っ手と戦った、兄の名前。

その名前を聞いた時、反射的に声が出てしまった。

そうと決まったわけではないのに。

しかし、振り向いた“彼”は、

引き締まった体をもつ、素晴らしい剣の腕を持った青年は、

兄と同じ、くすんだ茶色の髪と、優しさが滲み出している様な瞳を持っていた。

そして間違いなく、“彼”は私をこう呼んだ。

「……リース……と。」

「リース……？」

確かに、俺を呼んだ気がした。

微妙に変わった声。

伸びた身長。

あの頃の面影を残すのは、自分と同じ髪の色と、勝気さを残す瞳。

だが、それで十分だった。

それ以上の理由は必要なかった。

彼女は、俺の事を“兄”と呼んだ。

なら、きっと彼女は、自分の知る“彼女”の面影を残す少女は、紛れも無く、俺の只一人のー！。

「リース？」

だから俺は呼んだ。

この世界に只一人の、妹の名前を。

きっと、死んでしまったんだと思っていた。

でも、それを認めたくなくて、トリスに頼み、旅をしていた。

色々な街へ行き、多くの人を訪ねて。

少しでも特徴が似た人がいると聞けば、そこへ行った。

何度も、何度も。

そして2年が経ち、3年経った。

奴隷が生きている平均年数は2年だと言われている。

売られてすぐ死んでしまうものが後を立たないから。

だから、買い戻すなら2年以内にと言われている事も、聞いた。

それでも諦められずにもう1年探した。

それでも見つからず、諦めようとした。

この迷宮探索が終われば、冒険者を辞めよう。

だが、彼はこの迷宮に現れた。

彼を探さずに、彼を忘れようと思った、この迷宮に。

なんの偶然なんだろうか。

なんの因果なんだろうか。

考えても考えても整理できない頭の中身を全て放り投げ、

私は彼へと走り出した。

彼女は、俺の声を聞いて、少し迷った様だ。

無理はない。

きつともう、死んでしまったと思っていただろう。

そんな俺が、いきなり目の前に現れたんだ。

混乱するだろう。

それでも彼女は、その瞳に涙を浮かべ、こちらへと走り出した。

涙を堪えようと、口をへの子に歪ませ、

ただ俺の姿だけを見据え、

駆け寄ってきた。

私は、勝手に出てくる涙を堪え、一歩づつ彼へと近づいた。

今迄永遠の様に感じられた彼との距離が、一歩づつ近づいていく。

もうちょっと

あと数歩で手が届く。

私は、その数歩を駆け抜けた。

彼女は、必死に距離を埋めようと走ってくる。

只々、俺に向かって。

もう、手が届く。

そして私は、

そして彼女は、

俺を、

彼を、

――思い切りぶん殴った。

力の限り殴られた俺は、そのまま壁際まで吹っ飛んだ。

あまりの勢いに壁が所々崩れる。

驚いたクルトが、俺の元に駆け寄り心配そうに覗き込む。

最も、思い切り殴られた俺の視界はチカチカと星が瞬いており、うまく正面すら見えない。

どうやら隣にいたウォルトと言う男は、いきなりの出来事に言葉を失っているようだ。

大きく響いた音に、ようやく目を覚ましたトリスともう一人の女性は呆気に取られている。

視界だけはなんとか回復したけれど、まだたちあがれそうにない。

そんな俺に、妹はツカツカと歩み寄ると、魔王の様に睥睨してきた。

――怖い。

心底そう思った俺は、流れる冷や汗を止める術も無く、死刑執行を待つ囚人の様に彼女をただただ見続ける。

クルトもその殺気に体を強張らせ、ふるふると震えている様だ。

殺気をみなぎらせた魔王が、ゆっくりと口を開く。

「3年……3年よ？……あなたが帰って来なかったあの日から……3年……」。

私が……私達が……どれっただけ心配したと思っているの……？

馬車だけ渡して……一人だけその場に残って……カッコつけて姿を眩ました拳句に……

冒険者になって迷宮に潜ってる……？

あんたがそうやって生きている間に、私達が、どれだけ、苦労して、心配して、あなたを探していたか、わかっているの!？」

俺は、ただひたすら、彼女の怒りが収まるまで、地に額を擦り続けた。

*
+
*
+
*
+
*
+
*
+
*
+
*
+
*
+
*
+
*
+
*
+

その後、なんとか回復きつたトリス達三人がかりで必死に彼女をなだめすかし、

ようやくそれまでの俺の生活を話し終え、

納得した彼女が怒りの銚を収める迄に、

どれだけ時間がかかったのか見当もつかない。

誤解が解け、顔を真っ赤にしながら誤ってきた彼女達と一緒に、戦った広間の奥にあった宝物庫の中の物を全て袋へと詰め、なんとか地上へ戻った時には、既にとっぷりと日が暮れていた。

とりあえずここで野宿して、明日になったら戻り始めようと決めたカイト達は、入り口脇の茂みに隠しておいたテントや食料を引っ張り出し、野営の準備を整えた。

焚き火に火をつけその周りを取り囲み、今日あった出来事を振り返る5人。

……と言っても、話の種になるのはもっぱら、魔王と化したリースと、ひたすら謝り続けるカイトの姿だったが。

腹を膨らませた5人は、二人つつ時間をずらしながら休息を取りつつ、夜の見張りをする事になった。

そして今は、カイトとリースが、焚き火の前に腰を落ち着けている。

リースの膝にはクルトが丸くなっており、その背を気持ち良さそうに撫でている。

もっとも、クルトの方は先程のリースの恐ろしさが忘れられず、細かくカタカタと震え続けているのだが……。

そんなクルトを膝に載せたリースは、そっと俺の方に視線を向けると、

「……さっきは、ゴメンなさい。痛かった……よね？」

と、謝ってきた。

痛いなんて物じゃなかったが……、

「気にしないでいい。俺も心配かけてたんだ」

というと、リースははにかみながら、

「うん」と返すと、少しくすぐったそうに首をすくめた。

「どっした？」

「ううん。なんかね、やっと、また会えたんだなって思ったら、急に恥ずかしくなっちゃって」

そう言って頬を染める。

……さっきのアレが恥ずかしかったんだろっか。

確かに、アレは女の子にあるまじき行いだったような気がする。

「ま、まあ、きつともう、今までみたいに離れるような事はないだろつから、うん。」

「……気にする必要はないと思うぞ？」

「?うん、そつだよね、もう、私を置いて行ったり、しないよね？」

「ああ、約束する。もう、一人にはしないよ。」

そついうとリースは、嬉しそうに笑いながら、

「ねえ、もっと、いろんな話聞かせて? 兄さんが過ごしてきた、3年間の話」

と、カイトに甘えてきた。

再会はきらめく星の散る中で（後書き）

妹って、怒らせたら一番怖い存在なんじゃないかって、お兄さんは思っています。

兄弟水いら……ず？（前書き）

予想以上に前話のリースの一撃が好評だったようです。

兄弟水いら……ず？

「いい雰囲気だな……」

「そうね。心配する必要は無かったのかも」

テントの中でそつと隙間から二人を伺う影。

「だが、最初は本当に驚いたよ。助けてくれた凄腕の彼がリースの兄だったなんてな」

「ええ、本当に。あの動きは、相当な熟練者で無ければできないわ。……狙って眼を穿つなんて」

その瞬間を思いだしつつ身震いする女性。

「ああ。それなりに大きさはあったが、動き回っている対象の一部分に命中させるなんて芸当は、なかなかできない」

弓が本職ではないとはいえ、何かしらの手段でそれが実行できていたら、あそこまで苦戦する事もなかったかもしれない。

それも含めて、彼はかなり凄腕の冒険者だったと言う事だ。

「でも、それにしては名前を聞かなかったわね。あれだけ腕があれば、それなりに名は売れる筈なのに」

「ああ、そういえばリサは畏を調べていてあまり話を聞いていなかったんだっけな。……彼は、少し前まで奴隷だったそうだ」

その事実には驚くりさ。

「奴隷なのにあの腕……って事は、そうなる前は何してたってのよ？」

「リースの村で狩りをしていたんだと」

……っは、冗談じゃないわ。

散々訓練をしても、彼ほどの腕を身につけられる人間はそうはいない。

村の狩人が奴隷になって、開放されたら凄腕の冒険者になっていたとか、どんだけよ。

己が今迄してきた鍛錬を全てバカにされた様な気がして、リサは唇を歪ませた。

「だが、彼はそれだけの努力をしている様だ。毎日朝晩千回づつの素振りを2年続けているようだし、森で様々な動物を弓で狩っているそうだ」

今度は千回という回数に度肝を抜かれるリサ。

御伽噺の中でなら、それ以上に剣を振る人間は山ほどいるが、実際に2年間朝晩千回づつ剣を振れる人間はそうはいない。

実際自分では500も振れば腕が上がらなくなるだろう。

「それだけ、努力してきたんだろう。リースやトリスも、あの年ではなかなか見ない程の腕を持つてる。」

……それだけ、過酷な日々を続けてきたんだろう」
「そう……ね。村を盗賊に焼かれて、それでも生き延びてこようやって再開出来るくらいなものね」

それとなく視線を焚き火の方向に向けたサラは、そこにもう一人の人物が加わっている事に気がついた。

*
+
*
+
*
+
*
+
*
+
*
+
*
+
*
+
*
+
*
+

「ふふ」

顔を上げると、そこにはトリスの姿があった。

何も言わずカイトの隣に座ったトリスは、ふっと笑うと「生きてたんだな」とつぶやいた。

「俺はさ、もう正直生きてるなんてこれっぽっちも思っちゃいなか

った。

……薄情だよな。

あの日お前のおかげで命が助かったってのにさ」

「……いや、無理もないよ。」

俺だって、逆の立場なら諦める」

「ならよ、ずっとお前が生きてる事を信じ続けて、冒険者になってまでお前を探し続けたリースを、大事にしてやれよ」

当たり前な事を言うなと、軽く小突いてみせる。

「しかし、よくまああそこまで腕を上げたな。」

これでも俺達も結構腕には自信あったんだぜ？ベルクさんに鍛えられた後、二人と三人でいろんな所を巡ったんだから」

「ああ、そうだろうな」

「そうだろうなって……まったく。そんな俺達や俺達より腕が上の二人が一緒にかかって、なかなか倒せなかったあの化け物を、お前は一人で相手してたんだぞ？」

別に、一人で倒したわけじゃないよ。と笑いかけるカイトに、呆れた顔を向けるトリス。

「お前わかってないのか？」

決定打がなくてギリ貧になってた俺等が、お前が入っただけで数分もかからずに倒しちまったんだぞ？」

まったく、自覚がないやつはこれだから。

ぼやくトリスに微笑みかけるリース。

「トリスは、自分が助けに行くはずだった兄さんに助けられたから、もやもやしてるだけでしょ？」

「ばっ……か、ちげえよ！」

顔をそらしたトリスの頬は、心なしか赤かった。

「ふふつ。じゃあ、私は先に休むね。後よろしく」

去っていったリースの背を目で追いながら、何故かため息が出る。

「3年たったけど、変わったような変わってないような、不思議だな」

「そう思ってるのはお前だけさ。……変わったよ、俺達は」

微かに苦笑しながら言うトリスに顔を向け、ああ、成る程と一人納得する。

「そうか、トリスがお兄ちゃんで、リースがお姉ちゃんだもんな」

「……？ああ、ニーナに会ったのか。そうだな、じゃなきや、ここに俺たちがいるなんてわからないもんな」

「驚いたよ。ニーナもあんなに元気になってさ」

「あそこまで動けるようになったのは最近だ。少しづつ、体も丈夫

になつてきてるみたいだ」

昔と変わらず、妹の事を考える時は優しそうな笑みを浮かべるトリス。

「まあ、ちょうどいい頃合いだしな。

そろそろトリスも妹離れしてもらわなくちゃ」
「俺はそんなに過保護じゃねえぞ」

じつとりとした視線を向けてくるトリス。

「それでもだよ。俺は出来れば、きちんとリースの事を一番に考えてもらいたいからな」

トリスはそれを聞いて首を傾げる。

「どづいづこった？」

「隠さなくてもいい。リースと付き合っているんだろっ？」
流石に結婚の約束まではしてないよな」

ニヤニヤとした視線を向けるカイト。

「は？おまえ、なに勘違いして……」

「隠すな隠すな。じゃなきゃ、ニーナがお姉ちゃんなんて呼ぶわけないだろ」

「いやいや、それはただ単に呼びやすいからであつてだな」

好い加減素直になれよと問い詰めるカイトの態度に辟易しつつ、「お前の方はどうなんだよ？」と話をそらしてみた。

まったく期待をしてなかったわけじゃないが、その一言で微かに顔を曇らせるカイト。

「お、おお？お前、まさかいい人がいるのか？」

軽く突っ込んで聞いてみると、歯切れ悪く「いや、うん、どうなんだろうな」などと言い出した。

「まさかお前がなあ。しかし、なんでそうはつきり言えないんだ？まさか、怪しい関係とかじゃないよな」

リースが怒るぞ？と軽く脅すと、迷宮の中の事を思い出したのか、軽く顔を青ざめながら、「いや、やましい事をしたわけじゃないで」と弁明し始めた。

「ここにくる途中で、国境を越えたんだが、その時にモンスターに襲われた人達を助けてだな」

その時に助けた商人の娘がどうも俺の事を好いていてくれて
いるらしい。

「おいおい本当かよ！で？なんてとこの娘なんだ？」

「クラスト商会」

その名前を聞いた途端トリスはあんぐりと口を開けて、信じられないようなものを見る目でカイトを見続けた。

「お……ま……クラスト商会って言ったら、ラスティカの街で一二を争う所じゃねえか。しかも確か一人娘だったろ？」

どんだけいい相手に惚れられてんだよ。

「まあ、うん、でも、色々考える所もあつてさ。ずっと居続けるわけにもいかないし」

その言葉を聞いたただそうとするも、街に帰ったら話す。としか言わないカイトにそれ以上聞けず、その後交代の時間まで、暖かな焚き火の前で、二人は静かにこれまでの事を語り合った。

兄弟水いら……ず？（後書き）

1話と2話を改稿させて頂きました。

カイトの年齢についても書き足したりしているので、気になる方は一度目を通していただければ。

ちなみに今の時点でカイトとトリスは18、リースとニーナが16です。

帰還（前書き）

次で2章が終わり……かな？

帰還

次の日からカイト達は、失った時を取り戻すかのようにゆっくりと街へと向けて歩み出した。

一晩では語り尽くせぬ、3年という長い月日の間にお互いに起きた事、経験した事を、只々笑い合いながら話続けた。

トリス達とある街で会った不思議な人物や。

カイトの屋敷に来たお転婆な皇女。

初めての迷宮で拾ったトリスの剣の話や、リースに一目惚れしてきたうっとおしい貴族の話。

三日間話続けても話はまだまだ出てくる。

当然その話ばかりしていたわけではない。

今回潰した迷宮で見つけた宝の分配等も話し合った。

今回は未発掘の迷宮だったので、ほぼ全てカイト達の手で集められていた。

様々な力を付与された幾多の宝石や武器達。

古代の金貨や装飾を施された燭台。

おそらくこれ売り切れればばらくは遊んで暮らせる。

それだけの価値がある宝物達だ。

最初に迷宮の奥に安置されている所を見た時はため息どころか、呆気にとられて魂まで何処かにいつてしまっうんじゃないかと思っただ程。

既に多くの迷宮が探索され尽くした今では、未発掘の迷宮を最初に制覇する事など、大きな金脈を見つけてしまっう程に幸運な事だ。

「俺は、きつちり5等分するのがいいとおもっている」

分配の時に口火を切ったのは、パーティーリーダーのウォルトだった。

「今回はカイトがいなければきつとこれを持ち帰る事はできなかった。

流石に全部とは言えないが、彼を含めた5人で、きつちり分けるのが後腐れも無くていいだろう」

ハッキリと言い切ったウォルトに皆が頷きかけた時、カイトだけが一人待ったをかけた。

「俺は、その分配からは除外してくれ」

「お、おい何を言い出すんだ!？」

「そっうよ!5人で分けても相当な額になるわ!それだけあれば皆で家を買って住む事もできるじゃない!」

……確かに、それもいい。

きつと幸せな生活を送れるはずだ。

――だが……。

「俺は、皆に会う前にある物を拾った。

それがなんなのか、俺にはわからない。

だけど、何故かそれを手放すのだけは、嫌なんだ。

その不思議な何かを手放すのを嫌がる俺がいる。

俺を分配するメンバーに入れるなら、俺はこれもその分配する内に入れなければいけない。

……だけど、俺にはその宝とこれを秤にかける事はできそうにないんだ」

それは、あの石像が守っていた二つの塊。

金属のような、生物のような、不思議なその物体は、カイトがそれを袋にいれて背負った時から、まるで自分の一部であるかのような錯覚さえしていた。

なんて事はない鉱石なのかもしれない。

ただの置物である可能性も高い。

だが、手を添えると微かに脈動するような不思議な鼓動を聞

かせるそれを、手放す事だけはできなかった。

「……そんなに、大事か？価値があると？」

不審げに顔を覗き込んでくるウォルトに、「俺には」とだけ返した。

きっとこれを手放せば、俺はこの先絶対後悔する。
そんな確信があった。

「……そこまで言うなら仕方ねえな。今回は武器みたいな代物はそう無いし、結局は全部換金する事になるだろう。」

カイトの物は除外して、残りを換金後に4等分。それでいいな
？」

揃って頷く4人。

カイトの瞳に、後悔の文字は無かった。

++*+*+*+*+*+*+*+*+*+*+*+*

行きより1日多く費やし、4日かけて帰り着いた一行は、
一
先ずそれぞれの宿で休息を取る事になった。

いくらゆっくり帰ってきたと言っても、迷宮を探索し、交替
で見張りをしながらだ。

しかも今回は多くの価値ある物を持っている。

張り詰めた神経を解く時間が必要だった。

街についた途端緊張の糸がきれ、足をふらつかせたリースを
支えながら飛龍の鋭角>(ひりゆうのつ)へ戻ったリースとト
リスは、それぞれの部屋に戻るなりそのままベッドへ突っ伏して、
夕食の時間まで起きてくる事は無かった。

一方カイトはウォルトとリサを連れて、トルネの屋敷へと来
ていた。

大きな商会なら、それなりの金額で買い取ってもらえるんじ
やないだろうか？

それに、『アレ』がなんなのかもわかるかもしれない。

屋敷へ着いたカイトは、ドアノックを叩いた。

「はい……あら、カイト様！お帰りなさいませ。

皆さん心配しておられましたよ。

後ろの方々はお知り合いですか？」

「はい。妹達とパーティーを組んでいた人です。

トルネさんは……執務室ですか？」

「はい。ご案内いたしましょう」

此方へ……と言って先導するメイドの後をついて行くカイト達。

後ろの二人は、邸宅の大きさと豪華さに目を白黒させている。

メイドに連れられ執務室へとやって来た三人は、トルネと向き合い宝物の鑑定をお願いしていた。

「ーほお……」。

とか、

「ーふうむ……」。

などと時折つぶやき、目を輝かせながら品物を手に取りひたすら見続ける。

その間何も声がかけていないウォルトとリサは、緊張でカチコチになっている。

「むむむ……これが全て、迷宮の中にあつたのかね？」

「ーは、はいっ！全て、迷宮の小部屋や、魔物が守っていた部屋

から手に入れた物ですっ」

普段はこんな大商人に直接見てもらう事などない為に、緊張でもりながら答えてしまう。

「なるほど……。恐らく、その迷宮は古代の魔術師か、クリエーター工作師の倉庫か、宝物庫だったのだろうな」

見なさい。

彼が差し出したのは、淡く光を放つ一つの宝石。

赤く光るその宝石は、まるで宝石そのものが光っているように見える。

「これは、宝石の価値だけとってもかなりの物だ。

……とても純度が高い。

だが、それだけではこつも光は放つまい。

他にも同じような物があるが、恐らく全て、何かしらの魔法か、それに準ずる物が込められているのだろう」

そして彼は、おもむろに全ての宝物を綺麗にテーブルに並べると、窓へ歩み寄った。

————— シャツ！

彼がカーテンを閉め、部屋を暗くした途端、テーブルの上に赤や青など様々な光が所狭しと光り輝いた。

その美しさに思わず息を呑む。

「私も長年商売をしているが、これだけ上質の物がたくさん集まっているのを見るのは初めてだ。」

この手の物を蒐集しゅうしゅうする好事家コレクターに見せれば、相当な高値で売れるはずだ」

自分で持って行った方が実入りはいいと思うぞ？

と微笑むトルネ。

顔を見合わせ、何事か考えたサラとウォルトだったようだが、意を決すると、「いえ、ここで買い取ってください」と告げた。

「まともに商売をした事がない俺達が行っても、足元を見られるのがオチです。」

それなら、ある程度の適正価格を知っているあなたに売るのがいい」

「私が足元を見るかもしれんぞ？」

人の悪い笑みを向けるトルネ

「それならそれで、構いません。」

本来ならこうやって見せる事も無かったはずだ。

それなら俺は、ここに連れて来てくれたカイトを信じます」

まっすぐに目を向けるウォルト。

その目をじっと見つめたトルネはふつと微笑むと、「カイト君の知り合いに嘘をつくわけにもいかな」と告げ、少し待ってなさいと言った後、隣の部屋へと去って行った。

ウォルトは、トルネの姿が見えなくなると共に一気に肩の力を抜きため息をついた。

「もう一生こんな商談はしたくない……」

心の底からそう呟くウォルトと、それに無言でこくこくと頷くサラ。

ーガチャッ

隣の部屋から戻って来たトルネは、一枚の羊紙皮を持っていた。

「すぐにこれ全てを買い取る金は、今はこも屋敷にはない。

街の商業ギルドへこの証書を持って行けば、私の金庫から書いてある額を引き出して、渡してくれるはずだ」

差し出された紙に書かれた金額を見て度肝を抜かれるウォルトとサラ。

その証書にはこう書かれていた。

【これはこの者との取引において買い取った商品の対価となる金銭を、私『トルネ・ドラニコ』の名において、我がクラスト商会の所有金庫から引き出す事を許可する物である。

私、『トルネ・ドラニコ』は、彼の者が引き渡した商品の対価として、

エルム金貨2300枚

を、彼の者へ引き渡す事を承諾するものとする。

これは、いかなる事態が起きようとも、変更される事は無いものである事を、

『クラスト商会筆頭　トルネ・ドラニコ』

の名において誓う。

××××年××月××日

トルネ・ドランコ

放心したままの二人の姿を見たトルネは、

「ん？ 足りなかったかね？」

と告げた後、面白そうに笑った。

++*+*+*+*+*+*+*+*+*+*+*+*+*+*

なんとか正気を取り戻した二人が、証書を握り締めて部屋を辞した後、カイトはトルネと向かい合っていた。

「いいんですか？ あんな大金で買い取ってもらって」

少し心配になり声をかける。

脇から見たただけだが、確かに金貨2300枚と書かれていた。

確か、国境の警備兵の給料が、小隊長で月にエルム金貨2枚と聞いた。

普通の平民なら、その1/4、レルム銀貨50枚程で余裕を持って生活できる。

「なに、私はそれなりの伝を持っているからな。」

恐らくこれ全て売り払えば、5000エルムにはなる」

それなりの時間を使えばな。

そう言つて笑う彼の顔は、今までに見た優しい父親ではなく、一流の商売人の物だった。

「しかし、君にも運が巡つて来たのかもしれないね。」

エルム金貨を500枚近く手に入れば、それだけで働かなくてもよくなるだろう」

そう聞くトルネの顔は、何故か面白そうに笑っていた。

「……実は、自分は分配には参加していないんです」
「なんでまた？」

不思議と言うより、怪訝な表情をするトルネ。

無理もない。

トルネの所へ持ってこなくても、冒険者ギルドの伝で紹介された所へ持って行けば、間違いなく金貨1000枚はくだらない。

いくら確かな目利きができずとも、それ位はわからなければ冒険者とは言えない。

そこまで目は曇っていないだろう。

すると、カイトがおもむろに腰の袋から何かを取り出した。

拳程の大きさのそれは、見た目以上に重いのか、ゴスンツという音とともに机の上に置かれた。

「これは、同じ迷宮にあつた物です。」

自分はこれを手にする為に、他の物の所有権を放棄しました」

眩く輝く金色と、闇さえ飲み込む様な漆黒のそれは、机の上で妖しい存在感を放っていた。

「触ってみて……いいかね？」

カイトが頷いたのを見たトルネは、その内の金色の方に手を伸ばす。

「……重いつ!？」

見た目以上に重かったそれは、片手で持ち上げるのがやっとの重さ。

恐らく10ドグルム(10kg)はあるだろう。

「……よくこれを持ち帰れたね?」

「それが……自分には軽く感じるんです。」

大きさも、一抱え程ある卵の様な物でした。」

迷宮から出て、最初の野営をする時には既にその大きさに縮んでいた。

不思議な現象に驚いたカイトはトリスにも見せたが、カイトが手渡すとその重さに驚いて落としそうになった。

カイトが持つ時だけ、何故か軽く感じる様だ。

その手に持った金色の何かを子細に調べるトルネ。

だが、それが何かは全く判断出来ない。

「……すまない、私にもこれがなんだかわからない。

今までにこんな物はみた事もなかった」

「そうですか……何故かそれを体から離すと心がざわめくので、売ったりする気は全くないんですが……」

「私の方でも出来るだけ調べてみよう。」

……それよりカイト君」

なんでしよう？と顔を上げたカイトが見た物は、嬉しい様な悲しい様な微妙な顔をしたトルネ。

「娘が会いたがっつてると思う」

その声と同時に、背中越しに扉が開く音と、「カイトさん！」と
「と
いう少女の声が聞こえてきた。

帰還（後書き）

ちなみにトルネの家を家財道具一式揃えて買うと、
エルム金貨1800枚になるといふ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6072y/>

蒼穹の竜騎士《ドラグナイト》

2011年12月7日02時55分発行